変幻去来坂
江崎俊平
春陽文庫

A－25－50

謀反の挙に出て敗死した由井正雪は、死の間際に庶子雪之介を逃がし、これに一万両の黄金の隠し場所を秘めた絵図面を持たせてやっていた！　絵図面は雪之介から娘お万の手に！　そのお万が大番頭も務めた水野左衛門尉の側室となって絵図面の秘密を告白したことから、左衛門尉がそれをかつての上司で寺社奉行などの重職をも務めた青山頼母に告げて絵図面を預けたのだが、左衛門尉は頼母によって放たれた刺客によって殺害されてしまったのだった！
　左衛門尉とお万の間に生まれた早苗・主馬之介の姉弟はいま頼母の手から絵図面をとり戻すべく苦心するが、老獪な青山一党の凶刃が二人の身に迫る！　その早苗姉弟を助けるのは春之介と名のる虚無僧であった！　――はたして黄金の謎を秘めた絵図面の行方は……!?

装画＊成瀬数富

変幻去来坂
江崎俊平

春陽文庫
A
25
50
400

ISBN4-394-12550-2 C0193 ¥400E 定価400円

変幻去来坂

謎の"隠し財宝"!

由井正雪の"隠し財宝"の謎を秘めた絵図面をめぐる早苗・主馬之介姉弟の宿願の闘い!

春陽文庫

謎の"財宝"!

定価400円

変幻去来坂

江崎俊平

春陽文庫

春陽文庫

変幻去来坂

江崎俊平

春陽堂

目次

変幻去来坂

月夜の笛

1

江戸もこのあたりになると、めっきり寂しくなってくる。田畑の中に大名の下屋敷が見受けられるくらいで、百姓家もまばらであった。
しかも、月夜とはいえ二更（午後九時から十一時）を過ぎているのだから、人影を見るのが不思議なくらいであろう。
と――築地塀の陰から人影が現れた。若い武家風の娘である。
女はいま来た道を振り返って、尾行者のないのを確かめて足を速めた。細面の整った顔立ちの女である。まだ十九にはなってはいないだろう。その女の顔は、何物かにおびえているものとみえて、ひどく青い。
あたりはしんとしていて物音ひとつない静寂が続いている。
女は何度も振り返った。そして、木立のあるところをえらんで歩いていく。
女は手にしっかり何かをつかんでいた。書状らしいものであった。
二町ほど歩いたところに、木立に囲繞されて小さな祠がある。その前まで来て、女はまた振り

返って人影のないのを確かめると、ようやくほっとした安堵の色がその青い顔に浮かんだ。
町の中と違って、尾行されていればすぐ発見することができる。
女はその祠の前に立った。それから、祠のうしろに回った。
「まだ来ていないのでしょう」
女はつぶやいて石の上に腰を下ろし、はじめて今夜が十五夜であったのに気づいたように目をみはって夜空を仰いだ。
「きれいな月だこと……」
女の緊張から解放された心が、月の美しさを感じる余裕を生んだのであろうか。事実、ここまで来るまでに、女は頭上に煌々と光る満月があるのに気づいてはいなかったのであった。
そこでだれかと待ち合わせをする約束であったに違いない。
女はしばらく月を仰いでいたが、不安そうにふたたびあたりを見まわした。
「遅い……何かあったのではないのでしょうか」
女は気を落ち着けようとして立ち上がったのを、また腰を下ろしてみたが、
「約束をたがえるはずはないのに……」
眉宇に不安が刷いた。
こんな静かな場所に、深夜、女一人で人を待つのはいい気持ちのものであるはずはない。
しかし――
女は四半刻（三十分）ばかり待ってみた。人の足音はない。
「何かあったのに違いない。行ってみよう」

女はそう自分の心に言い聞かせると、思いきって立ち上がった。歩きだそうとしたとき、付近で立木のざわめく音がしたので、ほっとして、

「主馬之介（しゅめのすけ）ですね」

と声をかけてみたが、返事はない。女の顔からみるみる血の色が消えていった。

主馬之介であればすぐ返事があるはずである。それがないところを見ると、別人に違いない。

女は懐剣をしっかり握りしめていた。

木立の中から姿を現した顔を見たとき、女は絶望が背筋を走った。衆住兵衛（もろずみひょうえ）であった。兵衛は女を見ると、にっと白い歯を見せた。

「妙なところでお目にかかりますな、早苗（さなえ）どの」

「あなたこそ、こんなところで何をしておられるのです」

早苗は声が震えているのが自分でもはっきりわかった。

「今夜は満月、わしでも時には満月の夜はこうやって一人で月を仰ぐ風流心もないわけではない。しかし、早苗どのがこんな夜更けにこのような場所へ来るとは……まさか、わしの跡についてきたのではあるまいな。それならば、今夜は楽しい月見ということになる」

「失礼いたします……」

早苗は、今夜、弟の主馬之介と会うことになっていたのだ。見られなくてよかったとほっとしながら、こうやっている間に主馬之介が来るようなことでもあればと気が気ではなく、平常から何かと言い寄ってくる兵衛から逃れようと歩きかけたが、

「お待ちなさい。早苗どの、逃げることはあるまい」

兵衛はそう声をかけて、

「いま主馬之介とかいわれたようだが」

「何もいいはいたしません」

「空耳だったといわれるのか。それならばそれでもよい。だが、若い男がさっきまでおぬしを待っていたといっても、まだ逃げるといわれるのか――」

「…………」

「その男は気を失ってある場所にいると聞いても逃げるといわれるのならばそれでもよい。わしも無理には止めまい。早苗どの、いかがなされる?」

早苗が立ち去ることはないという自信に満ちた兵衛のことばであった。

2

早苗はやっと振り返った。ありったけの怒りと憎悪をその形のいい切れ長の双眼ににじませて、

「あなたですね、主馬之介に気を失わせたのは」

「さあ、なんとも答えることはできぬ。そう思いたかったらそう思ってもよい」

兵衛は笑った。

「主馬之介はわたくしの弟です。不義の相手ではございません。どこにいるのです。会わせてくださいまし」

「わしの頼みを聞いてからならばその願いもかなえてやろう」

「どんな願いです」

「何度もいっていることだ。あらたまっていう必要はあるまい」
「わかりません。はっきりいってください」
「わしはおぬしが本心から好きだ。神かけてもよい。わしの妻になってもらいたいのだ」
「それならば……」
「待てという返事は聞いた。しかし、それだけではわしの気持ちがすまぬ。わしは今夜おぬしが弟と会うことを知ってここへやって来ていたのだ。近ごろのおぬしの行動には不審の点が多いとみて、それとなく注意していたのだ」
　早苗の頬がぴくっと動いた。
「おぬしが何者であるかも知っている。なんの目的で奉公に上がったのかも知っている。もちろん、わしが口を滑らせばおぬしの命はない。わし以外にはだれ一人気づいてはいないことだ。といっても、まだわしから逃げようとするのか」
　じゅうぶんに自分のことばの持つ効果を知った兵衛の口ぶりであった。
　早苗は、兵衛が家中の中でも指折りの剣士であり、その口を封じるために自分の手で殺すことのできない相手であるだけに迷った。
「おぬしがわしの妻になると約束するのならば、わしもおぬしの味方になろう」
「いますぐに返事はできません」
「そのことばなら聞き飽いておる。わしの欲しいのはいますぐの返事だ」
「…………」
「わしが手ごめにしても、こんな場所では通る人もなく簡単なことだ。それをしたくないから、

こうやっておとなしく話しているのだが……」
　早苗は拒否したときには三年間の苦労が水泡になるのを恐れた。
「返事がなければ、主馬之介を連れて殿のお耳に入れることにする」
「お待ちください。兵衛さま、わたくしがお約束すれば黙っていると約束なされますか」
　早苗は思い切ったように尋ねた。
「おぬしが約束すればわしも約束をする」
「お約束いたします。けれど、今すぐというわけにはいきません。わたくしがある目的を果たすまで待っていただければ、あなたの妻になります」
「ほんとうだろうな」
「偽りは申しません」
「では、その証拠を見せてもらおう」
「証拠とおっしゃいますと……？」
「ここで、おぬしはわしのものになるのだ」
「えっ……」
「そのことばが嘘でなければできるはずだ。二人で住むことはできなくても、妻ならばためらうことはないはずだ」
「それはお許しくださいませ。犬猫のようなことは……」
「嫌だと申すのだな」
「嫌とは申しません。けれども、こんなところでは……」

「だれも見ている者はいない。あくまで嫌というのならば、おぬしにその意志がないものと思って、しかるべく処置をとる」
「兵衛さま……」
早苗はがっくり項を垂れ、あきらめたようにいった。
「ご存分になされませ……」
兵衛の眸がきらっと喜びに輝いた。兵衛にとって一時の気持ちではなかった。三年前、早苗が奉公に来てからずっと思いを寄せていたのである。それだけに兵衛はうれしかった。
早苗は目を閉じていた。その瞼が未知の恐怖に震えているのが兵衛にはいじらしいものに思えた。
「この女が自分のものになる……」
こんなに簡単に事が運ぼうとは思ってもいなかった。それだけにうれしさもひとしおだった。
そっと肩に手を置いてみると、早苗はぴくっと震えた。それに誘われるように、兵衛は肩に置いていた手に力を入れて引き寄せた。
その折――
すぐそばで笛の音が流れてきた。
兵衛は、はっとして手を離し、その面上に怒りをにじませた。
早苗もわれに返って、兵衛から離れた。

3

なんびとのすさびなのか。
月夜にふさわしい妙なる調べであった。細く、強く、月に向かって笛の音は流れていく。
早苗は夢から覚めたような気持ちで笛の音に耳を傾けた。その笛の音が救いの神の声のように聞こえた。
（もう少しで取り返しのつかないことになろうとしていたのだ）
身を任せたくらいで約束を守る兵衛ではないのは知っている。そのことを種にして、何度も関係を迫ってくるに違いなかった。それを知っていながら、なぜ身を任せようとしたのか。
だが、あの場合、早苗にほかにどんな方法があったのであろう。ほかの方法では兵衛は承知しないに違いない。
兵衛は怒りをもって笛の音に耳を澄ませた。笛の音に聞きほれているのではない。笛の音に気をとられるような風流心などみじんもない男なのだ。
彼は笛の主の所在を突き止めようとしていたのであった。
「許さぬッ！」
つぶやくと立ち上がり、大股に笛のほうへ近づいていった。祠の横で虚無僧が横笛を吹いていた。天蓋を深くかぶっているのでその顔は見えないが、その体つきからみて、そう年配の者ではないようであった。
虚無僧は、兵衛が殺気をにじませて近づいてきたのも気づかぬ様子で、一心に笛を吹いている。
自分の吹く笛の音に自分で聞きほれている様子で――
兵衛は、むっとして、虚無僧の目の前にいきなり抜き討ちに空打ちをくれた。しゅっと虚空に

刃鳴りが残る。

虚無僧は、べつに身をかわす風でもなく、笛をやめる様子でもなく、兵衛を完全に無視し去って、一管の横笛にすべてを託した安らぎにも似た態度であった。

「おのれッ！」

兵衛の五体の中に怒りが棒のようにつっぱってくると、たたきつけるような声で、

「おい！……やめろ！」

と浴びせた。虚無僧はそれでも笛を離そうとはしない。

「やめろといったらやめぬか――」

天蓋に手をかけると、虚無僧ははじめて身をひき、笛を口から離して、

「月夜にかかるところのすさび、だれからも苦情を持ち込まれることはないと思っていたのに」

「何者だッ、きさまは……」

兵衛の声に比べて虚無僧の声はひどく穏やかであった。

「わたしはご覧のとおりの虚無僧、風体露身の身なれば、今宵のねぐらをここに決めたのだが、あまりの月の明るさに寝るのが惜しくなり、笛を吹いていたのです」

「隠すなッ！」

「わたしがなにか気に障ったことでもいたしたのですか」

「きさまは目的あってここへ来たのであろう。白状せぬと、うぬの首は胴についてはいないぞッ！」

威嚇すれば逃げ出すだろうと思っていたのだが、虚無僧は平然として、

「言いがかりもはなはだしい。虚無僧というものは、いつも空を流れる雲のように目的もなくさまよっていくもの……」

「わしの目はごまかせぬぞ……」

「だいぶお怒りの様子だが……どうやら、わたしの笛が、あなたのせっかくの機会を逃すことになったのがお気に召さぬようだが……」

「知っていたのだな――」

「心ある武士のなすことではないと思っただけのことだ……」

「きさま……わざとやったのか……」

「お引き取りになったほうがよかろう。女のほうが逃げ出していったのをお気づきではないようだが……」

「許さんッ！」

だっと大地をけると、兵衛は怒りの一刀を虚無僧へたたきつけていた。

兵衛は意外なものを見て舌を巻いた。腕に自信があるだけに、これほど簡単に身をかわされるとは思ってもいなかったのである。

「おっ！……」

が、意外にも虚無僧の身は軽く、すっと二間ばかりを飛んで立ち上がっていた。あたかも花にたわむれる蝶の柔軟さであった。

兵衛は、しかし、それと知るや、さらに憎悪を眸ににじませ、二の太刀を大きく打ち下ろしていた。二の太刀もむなしく虚空を裂いた。

兵衛はさらに三の太刀を踏み込んだ。
虚無僧は、こんどはその刃の下をくぐり、伸びきった兵衛の脾腹に一撃を加えていた。
うっ……うめいて、兵衛はもろく膝をつき、そのままつっ伏していった。
虚無僧は、祠のうしろへ回ってくると、呆然とつっ立っている早苗に、
「いまのうちに戻られるがよい。若者はそなたが来る少し前に戻っていった。無事であることだけを教えておこう。何事もあせってはならぬ」
諭すようにいうと、背を向け、ふたたび横笛を口にあて、さっきと同じ曲を奏しながら歩きだした。
早苗は呆然と見送っていた。
虚無僧の姿が樹間に消えてから、われに返ってその跡を追ったが、その時はすでに笛の音は消え、虚無僧の姿も消えていた。
(笛の音が聞こえるかもしれぬ――)
早苗はそう思ってしばらく立っていたが、どこからもふたたび聞こえてはこなかった。
しかし、あの虚無僧は自分の秘密を知っている。が、少なくとも敵ではない。
もういちど会いたいと思った。もういちど会って、はっきり正体をつかみたい。とは思うものの、会う方法もなかった。
早苗は、ぐったりと月光の中にのびている兵衛を見ると、こうやっている場合ではないと思い直した。
兵衛がわれに返れば、またさっきのことが繰り返されるだけだ。気がつかないうちに屋敷へ戻

っていなければならぬ。屋敷の中では、いくら兵衛でも、今夜のようなことはしないだろう。
今後、何かにつけて邪魔立てするに違いない兵衛だと思うと、思いきって殺しておいたほうがいいのではないかと思った。
今ならば早苗にも兵衛を殺すことはできる。殺したところで自分が下手人と思う人はあるまい。自分が屋敷を抜け出してきたのもだれにも知られてはいないのだから。
早苗は、懐剣を抜いて、つっ伏している兵衛の背に突き刺そうとしたが、思い直すと、逃げるようにその場から離れていった。
衆住兵衛がわれに返ったのはそれから一刻(二時間)ほどしてからであった。
自分が身を横たえているのが大地だと知ると跳ね起きて、あたりを見まわした。
(なんとしたことだ……)
おぼろげながら記憶がよみがえってくると、兵衛は、おのれッ! と、すでに姿を消している虚無僧に対して怒りが突き上げてきた。
せっかく思いを遂げようとしていたのに……早苗の白い項がはっきり瞼に残っている。
それにしても、あの虚無僧はいったい何者であろう。兵衛も腕には自信があった。その兵衛を素手であしらっているのだ。それだけに不気味な存在であるといえる。
兵衛は投げ出されたままの刀を拾って鞘に納めた。
念のために当て身で倒していた主馬之介を見にいったが、すでに消えていた。早苗も虚無僧もむろんいるはずはない。
「とんだところで恥をかいたな……」

と、思わず苦笑が出る。

しかし、兵衛は早苗が屋敷を出ていくことはないのを知っている。屋敷を出ていかない以上、機会が去ったわけではない。

(あせることはない。いずれはわしのものになる女だ……)

兵衛はつぶやいて戻りはじめた。

彼は、早苗を抜き差しならぬ場へ追いつめるために、早苗が何者で、なんのために奉公に上がったのかを知っているといったが、実のところ、まだわかってはいなかったのである。ただなんとなく、何かの目的を持って入ってきた女だとその行動から気づいたもので、それが事実であったと知っただけでも、今夜のことは無駄ではなかった。

ともかく、早苗の目的を知ることとだ。すべてはそのあとのことになる。あれほど自分を避けようとしていた早苗が、目的を知っているといっただけで身を任せようとするくらいだから、よほどのものでなければならぬ。

(あせることはあるまい。籠の中の小鳥も同然の早苗だ。楽しみはあとになるほど大きいというからな)

兵衛は、ゆっくり早苗の行動を見守っていくことにして、屋敷へ戻っていった。

虚無僧は早苗と何かの関係を持った者であろうか。それとも偶然にあの場へ居合わせたのか。そのいかんによっては、今後のことにかなりの影響がある。

兵衛は、しかし、恐れてはいなかった。早苗が自分の手元にある以上、やがては自分のものになるという自信を捨て去ることはできなかった。

絵図面

1

青山頼母は下屋敷へ移ってから朝が早くなった。隠居の身であり、一切の雑事を忘れるために、数人の家来を連れて下屋敷へ移ってからすでに四年になる。

すがすがしい朝の空気を楽しむかのごとく、頼母は夜が明けるや庭をひとまわりするのが常であった。

頼母が庭下駄をつっかけて下りると、

「お早いお目ざめでございます」

兵衛が挨拶に出た。

「兵衛か、昨夜戻りが遅かったようじゃな」

「はっ……」

「ちょうど目を覚ました折であった。足音でそのほうであることがすぐわかった」

「恐れ入ります。実は……」

「よいよい。ここは下屋敷じゃ。時たまの息抜きもよかろう。だが、あまり人目につかぬようにせい。ひどく眠そうな目をしておる。はははは……」

兵衛は、内心ほっと胸をなでおろしていた。まさか自分が戻るのを頼母が気づいているとは思

ってもいなかったのだ。
「早苗は……?」
「呼んでまいります……」
兵衛は逃げるようにして下がっていった。まもなく早苗が、
「お呼びでございますか」
「供をせい。けさはいつもよりすがすがしい朝だ。少し歩いてみる」
そういって、頼母は樹間に入っていった。邸内は広く、樹木もほとんど自然のままのもので、武蔵野の面影を残している。
頼母は、この自然さが好きで、一切の手を入れることを禁じていた。だから、樹間に身を入れると、雑草が生い茂り、深山に踏み入った感がある。この森の中で、時折、狐の声が聞こえることもあった。
「早苗、そのほう、奉公に来て幾年になる?」
「三年にございます」
「三年か……早いものじゃな。ついこの間のことのように思える。わしがもう十年若ければ、そのほうを口説いていたかもしれぬな」
「まっ……おたわむれを……」
「家来どもの中には言い寄ってくる者もいよう。衆住兵衛など、そのほうを見るときの目つきは尋常のものではない」
「気がつきませぬが……」

「あの男、使いようによっては役に立たぬこともないが、ちと自負心が強すぎる。早苗ならまちがいはあるまいが、ほかの家来の手前もある、うまくあしらっておくのだな。人の前で恥をかいたりすれば、一生忘れぬ男だ」
「はい……」
「疲れた。朝の散策がだんだん大儀になってくる。わしもちと長生きをしすぎたようだな……」
頼母は早苗がびっくりするような声で笑った。
頼母は六十八になる。こうやっていると人のよい隠居にすぎないが、十五年前致仕するまでには、寺社奉行、大目付などの重職にあり、その非情な辣腕ぶりは恐れられたものであった。彼のためにお取りつぶしになった旗本大名も十指を数えるほどであった。
その当時の面影は、今の頼母のどこを見てもない。
頼母が部屋に戻ると、早苗を待ちかねたように兵衛が身を寄せてきて、
「殿は何を話された?」
「べつになんでもございません」
「おぬし一人を連れての散策ははじめてのことだ。なにか話があったに違いない」
「兵衛さま、お屋敷の中ではみだりに口をきかないようにしてくださいませ。人目がございますから」
「不義はお家のご法度か。わしはな、そなたとなら、この屋敷を逃げてどこぞへ行ってもよいと思っているのだ」
「お許しを……」

早苗は兵衛の横をすり抜けるようにして逃げ出していった。兵衛はその後ろ姿を見つめながら、ひとりうなずいていると、

「兵衛はおらぬか」

頼母の声がした。

「ここにおります」

兵衛が頼母のいる縁側へ身を寄せると、頼母はいぶかしそうに、

「いま、そのほうが立ち話していた女がいたようだが……」

「だれも話してはおりませぬ」

「目の迷いか。わしも少し年をとりすぎたかもしれぬ」

頼母はそれ以上深く尋ねようとはしなかった。

2

早苗はようやくあせりをおぼえてきた。頼母ははたして絵図面を持っているのであろうか。そのことに対して疑惑を抱きはじめていたのだった。

絵図面というのは、早苗の母お万が持っていたものである。早苗の父は大番頭まで勤めた水野左衛門尉で、お万はその側室であった。

お万は謀反の罪で死んだ由井正雪の直孫であるという。事が破れたとき、正雪はその庶子雪之介に数人をつけて逃がした。同時に一万両の黄金を隠し、その絵図面を持たせていたのである。

正雪が絶対の成功を信じてはいなかったのは、事をあげる以前にそれだけのことをなしていた

のを見てもよくわかることである。

一味に加わった者はことごとく処刑されたが、その以前に姿を隠していた雪之介らは、ひそかに甲斐の山中で生きつぎ、絵図面を守ってきたのだった。

お万はその雪之介の血を受けた者である。ある時、彼らの住んでいた谷間は、雪崩のために一人残さず死んだ。お万は、部落からかなり離れたところにいたので、一人だけ助かったのである。

お万はその時十八であった。自分一人で生きていかねばならなくなったので山から出てきたところを、雲助たちに手ごめに合いかかったのを助けたのが水野左衛門尉であった。左衛門尉は屋敷へ連れていった。身なりを整えてみると、意外の美貌に左衛門尉は目をみはったものである。

左衛門尉にはむろん正室はいたが病弱で、臥しているときのほうが多かった。お万も左衛門尉に好意を抱いていたので、そのまま側室となり、正室が死んでからはお万が正室同様の存在であった。お万は高ぶったところが少しもないので家来たちにも受けがよく、屋敷の中にはなんとなく温かいものがいつも感じられた。

早苗と主馬之介が生まれたのもそのころのことであった。

お万は自分の素姓を左衛門尉に打ち明けるのがつらかった。といって、隠しているのはさらにできないことである。

左衛門尉がいちども素姓を尋ねようとしないだけに黙っていることができず、ある日、思いきって素姓を打ち明けた。左衛門尉はしかし顔色も変えず、

「わしはそなたが欲しいのだ。そなたの素姓がどうあろうと、わしの心は変わらぬ。また、そなたが由井正雪どのの子孫であろうとも、なんの差し障りもないことではないか。そなたはわしに

とってはなくてはならぬ女だ。つまらないことを考えるではない。早苗と主馬之介という二人の子まであるのだ。それを忘れてはならぬ」

「は、はい……」

「このことはだれにもいうなよ、二人だけの胸にひめておけば済むことだ。よいな」

左衛門尉のことばに、お万は胸がいっぱいになって、思わず膝をぬらした。思いきって顔を上げると、

「この絵図は正雪さまが一万両を隠された場所を示されたものと伝えられております。わたくしが持っていても不用の品、なにとぞ殿のお手元にお預かりくださいませ。いかように処分されてもかまいませぬ」

それまで肌身から離したこともない絵図面を差し出したのだった。

左衛門尉もその絵図面の始末には頭を悩ませた。一万両といえば相当の金額である。人に知られるとどんなことが持ち上がらないともかぎらない。

「お万、この絵図面のことは人には話してはいないか」

「早苗には、わたくしに万一の場合があったときには、この絵図面だけは大切にしておくようにと教えております。そのほかの人にはだれにも話してはおりません」

「早苗はまだ幼い。まさか人に話すことはあるまいが……」

「信じてくださいませ。幼くとも早苗は利発な子ですから、軽々しいことはいたしません」

「この絵図面をどう処分しても差し支えはないか」

「ご存分になされませ……」

「では、わしに考えがある。手元においといては面倒なことにならないともかぎらぬ。あるお方に相談いたしてくる」

左衛門尉はそういって、ていねいに絵図面を懐中にしまった。

3

左衛門尉は、翌日、このことを当時の大目付青山頼母に話したのであった。左衛門尉はけっして青山頼母を信じていたのではなかった。いや、頼母という人物を内心ではひどく嫌っていたものであった。

城中で、左衛門尉は頼母に呼び止められた。そして、

「水野どのは結構な品お持ちらしゅうござるな……」

「お気に召したものでもございますかな」

なにげなく聞き返すと、頼母は、ふふふと、あざわらうように口をゆがめ、

「変わった絵図面をお持ちとのこと……」

それを聞くや、左衛門尉はさっと顔色を変えた。

左衛門尉自身、それを知ったのは昨夜のことなのだ。それがどうして頼母の耳に入っているのか。その疑問はすぐ解けた。

頼母は常に忍者を用いていたのである。そして、旗本や大名の奥深く忍び込ませ、その秘密をつかんでいたのである。運悪く、絵図面のことを話しているときに、頼母の忍者が潜んでいたのに違いなかった。

左衛門尉は、頼母に隠し立てしたときのことを考えて打ち明けることに覚悟を決め、
「実は、そのことにつきご相談したいと思っていたのですが、他聞をはばかることゆえ、下城してからゆっくり話したいと思いますが」
「よろしゅうござる。では、わしの屋敷ででも……」
「お寄りいたします」
と言わざるをえなかったが、左衛門尉はなにか不吉な予感がしてならなかった。相手が頼母ゆえに、いっそうその予感が強かったのかもしれない。
下城してから左衛門尉が頼母の屋敷へ寄ると、頼母はすでに戻っていて、待っていた。
すぐ奥まった一室に案内された。
「人払いしてあるので、何を話されても差し支えはない……」
頼母はそういって、暗に何もかも知っているぞといわんばかりの態度を示した。
「実は、わたくしの屋敷におりますお万でございますが、由井正雪どのの血を受け継いでいるものとか……」
「それは穏やかではないな。由井どのといえば謀反を企てて死んだ者、かなりの年数を経ているとは申せ、謀反人の血をひく者を側女にするとはお上への聞こえもいかがと思われるが……」
「知らぬこととは申せうかつでござった。いたって気立てはよく、家来どもも悪く申す者はございません。それだけに、なんとかしてお万を助けたいと思うのですが……」
「謀反人の血を受けるものでなければなんとでもなろうが……」
「それを知ったのはきのうのことでした。その折」

と、左衛門尉は小さく畳んだ絵図面を取り出して、
「これでございますが、由井どのが事が破れるときのことを考え、庶子雪之介にこの絵図面をつけてひそかに隠れさせたということでございます」
「ほう……」
頼母は絵図面を取り上げて見入った。
「この絵図面に示してある場所に、由井どのは一万両の金塊を隠しているとのことでございます」
「一万両か……」
頼母はさして興味を示さなかったが、それは知っていたからである。
「お万は、この絵図面は不必要な品ですから、わたくしに処分してくれと申しますし、わたくしもべつに執着はございませんが、捨てるというわけにもいかず、はたしてこの絵図面どおりにたどっていってわかるものやら……」
「で、わしに相談というのは……」
「この絵図面をお渡しいたしておきますから、適宜の処置を願いたいと」
「お万のことは……」
「このままにしていただければ……」
「ふうむ……」
と、頼母は鼻孔を膨らませて絵図面に見入りながら、
「この絵図面の場所は……」
「甲州とかで、それ以上のことはお万も確かめたことはないのでわからぬと申しております」

「一万両というのはまちがいはないのだな」
「さよう言い継がれてきたことで、しかと確答はできませぬ」
「わしに処分を任せるといわれるのだな」
「それが最もよいことだと思いますので」
「一応、預かっておこう。お万のことも穏便に済むように考えておく」
「お願いいたします」
左衛門尉はその日はそれで戻っていった。絵図面はおそらく頼母が自分のものにしてしまうに違いないと思ったが、それでお万が助かれば一万両も惜しくはないと思った。
それが頼母を甘く見すぎていたと知ったのは二日後のことであった。

4

左衛門尉は急に閉門を命ぜられたのである。しかも、その理由は、左衛門尉に謀反の疑いがあるという。
「わたしのために……」
と、お万は左衛門尉の膝にすがって泣いた。
可もなく不可もなく、その点平凡の一語につきる幕吏の左衛門尉であったから、謀反の疑いがあるというのは、由井正雪の血をひく自分がいるということのほかには原因を考えることはできなかった。
「そなたの責任ではない。わしが……もう少し慎重さが足りなかったのであろう。だれも恨むことはない」
左衛門尉はさして落胆はしていなかった。というよりも、すべてをあきらめたといったほうがよい。
「追って沙汰する。それまで神妙にしているように……」
左衛門尉は次に来るものがおそらく死であるのは疑う余地はないと思った。
頼母に謀られたのである。頼母は、左衛門尉を死に至らしめれば絵図面は自分のものになる、と思っての仕業だ。左衛門尉は、頼母の平生を知るだけに、それがはっきりわかるのだった。
謀られた——今になってはもはやどうすることもできないのだ。
「お万、そなたは早苗と主馬之介を連れてすぐ逃げてくれ。いまなら逃げることができる。あしたになれば遅い。いますぐ二人を連れて」
左衛門尉はそういったが、
「わたくしから起こったことでございますから、それはできませぬ。どこまでもお供をさせてくださいませ……それがかなわなければ……」
ことばを切ってお万は息をのんでから、
「死ねとおっしゃってくださいませ」
といった。
「子がかわいくないのか……」
「でも、わたくしだけ逃げるということはどうしてもできませぬ」
お万は固い決意を双眸に浮かべた。

左衛門尉はお万の決意が動かしがたいのを知らねばならなかった。

「そなたがそれだけ言ってくれるのはありがたいと思う。だが、二人の子だけは生きる方法を考えてやらなければなるまい。むざむざと青山頼母にしてやられて死んでいくのも残念じゃ。絵図面を自分のものにするために、わしが生きているのが邪魔になるのであろう」

左衛門尉は、一通の書状をしたためると、幼い時からいっしょに育った忠僕の義平を呼んで、

「そなたはいますぐ二人の子を連れて姿を隠してもらいたい。わしに万一のことがあれば、二人の子にこの書状を渡してもらいたい……」

若干の金子を与えて、夕刻、二人の子とともに逃がした。

もはや助かることもないと覚悟を決めた左衛門尉は、奉公人すべてに暇をやり、きたるべき日を待った。

明日か、明後日か、切腹のご沙汰が下るような予感がしていたのだ。

その夜、左衛門尉はお万と二人だけになった。かつてないことであった。

不思議に左衛門尉は心が落ち着いていた。こういう結果になったことについて後悔ということもなかった。ただ、頼母にしてやられた無念さだけはぬぐいきれなかったけれども――

その夜、三更（午後十一時から午前一時）を過ぎてからであった。左衛門尉とお万は枕を並べて寝ていた。

ふと――枕元に人の気配を感じ、目をあけると、黒装束が二人立っていた。はっとして跳ね起きようとしたとき、黒装束は左衛門尉に抜き討ちをくれていた。

「うっ……」

したたか肩を斬り下げられ、つづいて二の太刀をくらって、左衛門尉は虚空をつかんだ。

「頼母め……」

言い終わらぬうちに、三の太刀がその声を断ち切った。

左衛門尉は、刺客を見たとき、それが頼母の仕業であるのを知った。いずれは切腹になるものであろうが、それまでには評定所で一応の取り調べはある。知っているのが頼母一人だとすれば、左衛門尉は評定所で包み隠さず申し述べるに違いない。それを恐れての刺客であることはまず疑う余地はないことである。相手が頼母であれば当然考えておくべきことであったのだが……。

いま一人の刺客もまたお万を斬っていた。とどめを刺し、数分後には邸内から黒装束は消えていた。

翌日、評定所から呼び出しがあり、その時になって二人の斬死体が発見されたが、下手人の手がかりもないので、そのまま二人の死はなんの取り調べもなく捨ておかれることになった。

義平が知ったのはそれから十日を過ぎてからであった。言われたとおりに遺書を開いてみた。

その遺書にはすべてのことが丹念に書き続けられていた。

義平はそれから頼母をつけねらったが、四年前についに刺客の手によって殺されてしまった。

早苗は、主馬之介とともに絵図面を取り戻そうと決心し、三年前からつてを求めて頼母のそばへ奉公することになった。

名前もそのまま早苗を名のった。隠さないほうがかえって怪しまれないと思ったからである。

早苗はなんとしても絵図面を取り返したかった。一万両が欲しかったのではなく、父母を殺した頼母の手に一万両を渡すことができなかったのである。

5

早苗は、三年もの間、頼母が絵図面らしいものを取り出す気配がないので、しだいにあせりだした。父を殺し、母を殺し、義平を殺したのが頼母であるのはまちがいはないのだ。それも目的は絵図面を自分のものにするためであるのはいうまでもない。

しかも、今まで頼母は甲州のほうへ出かけていった様子はない。隠居の身であるといっても、勝手に江戸を離れることはできるものではなかったし、そればかりではなく、実のところは、頼母は慎重に時期を待っていたものであった。

絵図面のことはもはやだれも知っている者はいないはずであるという確信がある。義平も死んでいるのであるし、二人の子もその後行方不明になっている。頼母は、きょうまで、その二人の子の行方を捜していたのだった。

が、その行方をつかむことはできなかった。これまで慎重に事を運んできた頼母だったが、ようやく自分の年齢に不安を感じだしたのも当然のことであった。

ちょっとした手違いから百年の計がもろく崩れてしまうのを、今までの経験から如実に知っている。

頼母が病気療治のためという理由で甲州の湯治場へ行くようになったのは、夏も終わり、ようやく青空が高く澄むようになった初冬のある日のことであった。

三人の家来と、早苗と、もう一人の侍女を連れていくことになった。三人の家来の中には衆住兵衛が加わっていたのはいうまでもない。

「きたるべき時が来た……」

早苗は、甲州と聞いて、身内が引き締まるのをおぼえた。しかし、意外に人数が少ないのがやや解せなかった。

だが、湯治場へ行くのに多人数で行くのはかえって怪しまれるものであるし、おそらく甲州のほうでひそかに幾人かの者が行っているはずであろう。彼にはひそかに暗躍する忍者の一団がある。早苗もその正体をつかみたいと思うのだが、ついにきょうまでその影をつかむことはできなかった。

「ご出立はいつでございますか」

と尋ねてみると、明朝という返事だった。

（今夜のうちにこのことを主馬之介に知らせなければならぬ……）

そう思って、そっと屋敷を逃げ出す機会をねらったが、抜け出そうとすれば兵衛の姿が遮るのでどうすることもできず朝を迎えてしまった。

屋敷の中では兵衛はさすがに積極的な行動には出なかったが、それはあきらめているのではなく、その機会を待っているにすぎない。

早苗が抜け出せば、そのあとを尾行し、抜き差しならぬところへ追いつめて、関係を迫るだろう。そうなってしまえば、早苗はもはや拒むことはできなくなる。

ふたたびあの横笛の主が助けてくれるとはかぎらないのだ。

早苗は横笛の主に会いたかった。顔も知らない相手なのだが、あれだけ澄んだ笛の音を生み出す人物なら、その心も笛の音と同じように清く澄んでいるに違いない。

藁をもすがりたい今の早苗の気持ちがそう思わせるのかもしれなかったが、いつか必ずふたたび現れて早苗の危機を助けてくれるような予感がするのである。
笛の主が今の早苗の心の中にともったただ一つの明かりであったといえる。
夜が明けてしまえば早苗は主馬之介に連絡することはあきらめねばならなかった。早苗が手まわりの品を片づけていると、衆住兵衛が入ってきて、
「早苗どの、今夜はひどくお疲れの様子だな。甲州に行くので、やはり興奮して眠れなかったとみえる。無理もない。ここよりもずっと寂しい場所で、人家もまばらで、見えるものは山ばかりということだ」
知っているくせに、兵衛はそういって笑うのだった。その兵衛も眠たげな目をしている。彼も早苗の行動を監視していたので一睡もしてはいなかった。
「衆住さまもやはり興奮してお休みにはなれなかったのですか。お目がひどく赤うございます」
にこりともせず早苗はいった。
「はははは、痛いことをいわれる。早苗どのも口が悪くなった。いざ江戸を去るとなると、なかなか用も多いのでな。あまり軽率なことはなさらぬものだ。思い余ったことがあれば、なんでもこのわしに相談されるがよい。妻のために働くのをいとう男ではない」
そのことばを唇をかみしめながら、早苗は背筋を虫酸が這うような思いで聞いていた。

渓谷の朝

1

珍しく霧の深い夜明けであった。
東天が白みはじめたころから動きだした霧が半刻（一時間）の後には消え、すがすがしい朝日を浴びて秩父連峰がくっきりと見えた。
遠く八ガ岳も望まれるし、目を返せば富士がすぐ近くに麗姿を見せている。江戸から見た富士とはまた違った感じであった。
笛吹川の支流荒川の上流の、黒平という小さな湯治場である。甲州もこのあたりになると、湯治客といっても頼母一行だけであった。
頼母がわざわざこんな人里離れた場所を選んだのは、やはり絵図面となんらかのつながりがあると思われる。
早苗もここへ来て生き返ったような気持ちであった。
頼母たちに一日遅れて、江戸の深川の材木問屋の隠居という男が、手代を一人連れてやって来た。年は頼母と同じくらいである。
気が合うとみえて、二人はその日からよく碁を打った。いずれが上手ともわからず、勝ったり負けたりだが、それがますます親密度を加えていく結果になった。

「殿はまるでこんなところまで碁を打ちにきたようなものだ」
と、供の者はいう。
湯につかるのは疲れるというので、きまって頼母は朝一度だけ入った。
早苗はなんとかして自分がここにいることを主馬之介に伝えなければならぬと思っているのだが、江戸へことづける人もない。甲府まで行けば、あるいは目を盗んで飛脚屋へことづけることもできるかもしれない。
そう思って、来る日来る日を待ちわびていたのであった。
五日目に、やっとその日が訪れたのだった。頼母は、甲府城代に用があるというので、甲府まで行くことになっていた。その日は甲府泊まりであるという。
供には早苗と、兵衛と、いま一人を連れていくことになった。その夜、早苗は、主馬之介に手紙を書いた。甲府の旅籠で、買い物に行くふりをして飛脚屋へ飛び込む手はずを決めていたのである。
その翌日、甲府へ着いた頼母は、兵衛ともう一人を連れて、城代へ会いに出かけていった。早苗は一人だけ旅籠に残された。しかも、帰りはかなり遅いという。
早苗は、昨夜書いておいた手紙を持って、旅籠にはすぐ戻るからといって出かけていった。
とにかく、自分一人では頼母の行動を監視することはできず、外へ行くときには自分は連れていかないし、尾行することもできない。頼母が黄金を発見しない前に絵図面を手に入れなければ、今までの苦心が水泡になるのだ。
城下町としては古い甲府は落ち着いた町であった。

早苗は小間物屋へ飛び込んで、買い物をしながら、
「あの、飛脚屋はどこにございますか」
と尋ねてみると、すぐ近くだという。
早苗は、手紙をことづけて飛脚屋を出たとき、わきの下にじっとりと汗がにじんでいるのに気がついた。
やっと肩の荷をおろした気持ちだった。
だが、ほんとうの苦心はこれからなのだ。簡単に奪い取れるような場所に絵図面を隠しているはずはないし、たとえ隠している場所がわかったとしても、おいそれと盗み出せるものではあるまい。
早苗は飛脚が江戸のほうへ向かって走っているのを見た。運よく飛脚が出る少し前に飛び込んだので、きょうの便に間に合ったのだ。
主馬之介が見ればすぐやって来る。少なくとも四日の後には黒平のどこかに潜んで、頼母の動静を見つめているだろう。
ところが、飛脚が勝沼を出てからまもなく、いきなり行く手をはばんだ黒頭巾の武士があった。
「な、なんでえ……」
ぎょっとして飛脚が立ちすくんだときには、そのうしろにも二人の黒頭巾が立っていた。
「その中の書状にもらいたいものがある。先刻、武家風の女が、江戸へ向けての書状をことづけたはずだ。それをいただきたい」

「そんなことをいわれたって、あっしにはだれがことづけたかわかりゃしねえ」
「中を見ればわかる――」
「か、勘弁してもらいてえね。いったん任された物は、本人以外には渡さねえのがあっしたちのきまりだ。それほど欲しいんなら、先方さまに渡してからのことにしてくんな。先を急ぐんだから、そこをどいてもらいましょう」
飛脚はそういって突っ走っていこうとしたが、黒頭巾の男は、その飛脚の走りだそうとする一瞬、脾腹に当て身をくれていた。
声もなく飛脚は膝をついた。
担いでいた書状箱をあけて中を調べていたが、
「あった、これだ……」
と、取り出した書状には、明らかに差出人は早苗となっている。
黒頭巾は、その書状を懐中にしまうと、書状箱をもとどおりにして、どこへか立ち去っていった。
飛脚が気を取り戻したのは、それからまもなくであった。背活を入れられてわれに返り、きょとんとしてあたりを見まわした。
「いかがなされた。そなたは当て身を食らっていたようだが……」
虚無僧がのぞき込んだ。
「あ、あなたですかい。いま、黒頭巾が三人ばかりいたんですが、ご存じねえんですかい」
「そういえば三人ばかり走り去っていったが、まさか飛脚から物取りでもあるまい」

「それが、なんの意味だかわからねえんで。さっき江戸へ手紙をことづけた武家風の女がありましてね、その手紙を出せってぬかすんで断ったところが、この始末でさあ」
「武家風の女……名前は……」
「早苗とか書いてありましたが……」
「早苗……」
虚無僧ははっとしたように聞き返した。
「旦那はご存じなんですか、その早苗さまってのを……」
「いや、べつに……で、その書状は奪われたのか……」
「なあに、このとおり書状箱は無事でさあ。人目があるから、取らずに逃げていったんでしょうよ。こうもしちゃいられねえ。夜っぴいて江戸まで突っ走らなきゃならねえ。お礼もろくろくいわないで申し訳ございませんが」
「礼などはよい。奪われてはいないか、確かめたほうがよくはないか」
「その必要には及びませんや。開けた様子はございませんからね」
担ぎかけた書状箱を下ろして、中身を改めていた飛脚は、引きつるように叫んだ。
「ない。なくなっていますぜ。一通だけ、あの武家女がことづけた手紙が……」
そのころ……早苗は、主馬之介へことづけた書状が奪われているとも知らず、ほっとした表情で、旅籠で頼母たちの戻りを待っていたのであった。

2

そのころ――

頼母は、甲府城代松平壱岐守と二人きりで会っていた。壱岐守は、頼母とは苦楽を味わった仲であるというよりも、頼母の腹心として働いた経験を持っていた。

頼母が隠居してからまもなく甲府城代を命ぜられたのであった。もちろん、甲府へやられるについては失策をやったのであったが。壱岐守はまだ五十になったばかりの壮者であった。

「お珍しい人がおみえになるもの。隠居の身であるとはいえ、甲府までお出向きになるについては、それだけの理由があると思いますが……」

壱岐守はそういって意味ありげに笑った。

「さよう。そこもとが退屈しているだろうと思ってな……」

「ははは、頼母どのはあいかわらずでございますな。昔なじみに、わたしで役に立つことはなんなりといたしますが、このところおもしろくない日が続いているので……」

「そなたの知恵を拝借したい。いや、手も借りねばならぬ。この甲州に一万両の黄金が隠されているとしたらなんとする」

「一万両……よくそんな話を聞きますが、まだ出たという話は聞きませんな」

壱岐守は、じゅうぶん興味をそそられながら、さして気乗りしないような表情でさりげなく尋ねる。

「まことのことだ。わしは、このことについては、かなり長い間、我慢を続けてきた。知っているのはこのわし一人。いや、いまはそなたが知っているだけじゃ。わしの腹心の者にもまだ教えてはいない。いかがじゃ」

「それがまことであれば、わたしも手を貸すどころではありませんが……」

「うむ。そなたも知っていよう。大番頭の水野左衛門尉を……」

「古い話でございますな。はっきり記憶しております。謀反の疑いありということで閉門になり、評定所へお呼び出しの前夜、何者かに夫婦とも斬殺されたと記憶しておりますが」

「さよう……そのとおりだ」

「頼母どののなされたこととうすうす気づいておりました」

「ははは。実は、左衛門尉は謀反の心はなかったのだ」

言いかけて頼母は口をつぐみ、きっとした表情で、

「だれかいる。盗み聞きしているらしいな」

「ここへはだれも参りません。念のために……」

壱岐守は立ち上がって改め、

「だれもおりません」

「気の迷いであったかもしれぬ。近ごろとんと用心深くなってな」

「…………」

「左衛門尉の側妾にお万というのがいた」

「存じております。評判のいい女でしたが」

「そのお万が、実は、慶安の乱の由井正雪の血を受けた者。しかも、正雪は事が破れるのを覚悟

して、庶子の雪之介というのに一万両の隠し場所を秘めた絵図面を与えて逃がしたのだ。お万は、その雪之介の直系。しかも、絵図面を持っているのを、ある男がかぎつけてきた」

「それで、左衛門尉を……」

「ふむ。左衛門尉は、わしがそのことをそれとなくいうと、顔色を変えて相談に来た。絵図面はわしの処分に任せるから、お万の素姓については人に言ってくれるな、とな。わしは承知した。その翌日、閉門にした」

「怒ったでしょうな……」

「怒るのが当然のことだ。それで、評定所へ呼び出されて絵図面のことをしゃべられてはまずい。その前夜、刺客を差し向けて殺した。二人の子は下僕をつけて逃がしていたが、それもまもなく斬り、二人の子は行方不明。もし知っていたら、わしのところへ必ず現れると待っていたが、その様子はない。それで思いきって湯治ということで甲州へやって来たのじゃ」

「絵図面のことをかぎつけた男はいかがなされました」

「殺しておいた、後々のためにな……」

「左衛門尉を殺した男は……」

頼母はけろりとした顔でいう。

「わしが生かしておくとでも思っているのか。すぐあとで消えてもらっておる」

「で、その一万両の隠し場所というのが甲州というわけでございますな」

頼母は唇をゆがめた。

「そのとおりだ……どうじゃ、これでもまだ疑うと申すのか」

「いや、疑う気持ちはございません」

「では、手を貸してくださるな」

「喜んでお引き受けいたしましょう」

「そのほうへの謝礼は四千両ということではいかがじゃ」

「結構でございますな。お膳立ては頼母さまにしていただいた上で四千両とは、甲府へ来た退屈もそれで吹き飛んでしまいます。絵図面さえあれば造作はございません。あしたからでも出かけることにいたしましょう」

「そう簡単にいけば、こうやってそなたを訪ねることもなく、わしの手で探し出しておる。その場所の見当がわしにはつきかねておるのだ」

頼母はそういって絵図面を取り出した。

「拝見いたします……」

絵図面に見入った壱岐守は、

「なるほど、肝心のところがなにも書いてはありませんな。これではわたしにも見当はつきません。地名でも書き入れてあれば、この白いところもおよその見当はつきますが――」

と小首をひねって、

「この山の形が地名をあらわしているものと思います。はて、急に思い出せませんが、この山にはたしかに記憶がございます。それとなく古い者に尋ねてみますので、二、三日、この絵図面をお借りすることはできませぬか」

「それは困る。一つしかないのだ。きょうまで隠し通してきたわしの身にもなってもらいたい。

たとえ一日半日でも、この絵図面を手放すことはできぬ」
「いたしかたございません。いい方法を思い出しました。では、この山の形だけ写させていただきましょう。それだけでも場所がわかるかもしれません。山の名前さえわかれば、あとは見当がつくと思いますが……」
「なるほど、それはよい思案じゃ。では、さっそくそのようにやってもらおう」
壱岐守は、筆と料紙を持ち出してくると、丹念に山を写した。そうして、絵図面をしっかり頭の中へ畳み込んでいた。
「明日まいるが、その時までにわかっているだろうか」
「やってみましょう。もしわからないときは、もう一つの山を尋ねてみます。たぶんわかると思いますが」
「頼みおくぞ……」
頼母が退出していくと、壱岐守は、
「狸め！」
と吐き捨てた。
(甲州まで来て、むざむざと六千両を渡してたまるものか……)
壱岐守は、表面は協力するとみせて、一万両を独り占めにする計略を立てていた。
絵図面を借りようとしたのは、そのあいだに写し取ってしまおうと思っていたからであった。写し取ってしまえば、あとはこっちだけで一万両の行方を探すことができる。甲州の地理に通じた者はいくらでもいるのだから、彼らが探し当てたときはあとの祭りになるのだ。

(思いがけないものが転がり込んできたな……)
彼は、ほくそえみながら、頭の中に畳み込んでいた絵図の記憶をたどりながら紙の上に書いていった。が、全部は思い出せない。
(あしたこのわからぬ場所をもう一度見ればよい……)
壱岐守はそういって半ば書き上げた絵図を懐中にしまった。

3

頼母は壱岐守の心がすでに自分を離れていることに気づいてはいなかった。壱岐守が甲府に来ていたのを、思いがけない好運だったと思っていたのである。
城内を出てしばらく行くと、同じ湯治場へ来ている材木問屋の隠居重兵衛が通り合わせた。
「これはこれは……」
「そなたも甲府へお出ましか」
「はい。相手がいなくなると急に寂しくなりましてな……さっき出てきたばかりです」
「わしも少し歩いてみたいと思っていたところだ。ごいっしょさせてもらおう」
頼母は、兵衛たちに先に宿へ戻っているように命じて、重兵衛と二人だけになった。
二人は、それから城下町を歩いて、とある神社の境内に入っていった。
すると、頼母はがらりと態度を変えた。
「早苗になにか変わったところはないか……」
「殿のお目に狂いはございません。やはり、左衛門尉の一子に相違ございません」

「様子に不審の点があるとみて、目を離してはいなかったのだ。甲州へ連れてきたのも、それをはっきり知るためだ」

「殿がお出かけになりましてから、早苗は買い物に行くといって旅籠を出ました。あとをつけてゆきますと、飛脚屋へ手紙を託しました」

「どこへの手紙であろう」

「江戸へということです。それで、飛脚を途中にて待ち伏せ、奪い取ってまいりました。これでございます」

と、重兵衛は一通の書状を差し出した。

表面はなんの変哲もない湯治客だが、彼は頼母の手足となって闇に暗躍する忍者団の首領だったのである。

そのことは頼母だけしか知らないことで、ずっとそばにいる衆住兵衛でさえ気づいてはいないのである。

二人の間には、湯治場で退屈しのぎに碁を打っているときも連絡はなされていたもので、重兵衛についている手代によって、配下に伝達されていたのだった。

書状を受け取った頼母は、すぐ封を切って読んだ。

「やはり二人とも生きていたのか……」

やや考えてから、

「この手紙を主馬之介に届けるのだ。飛脚を装って届けるがよい」

「で、どうなさいますか」

「主馬之介は手紙を読む。読めばすぐ甲州へやって来るだろう。主馬之介から目を離さずに跡をつけるのだ。そして、小仏あたりで斬り捨てるのだ。生かしておいて邪魔になるやつは、だれかれの容赦なく斬り捨てい」

「さっそく手配いたします」

「それから、城代の壱岐守からも目を離すな。万一の場合ということもある。とにかく、欲の深いやつゆえ、用心していて損はあるまい」

「そのほうなら、城内に二人ばかり忍び込ませてあります」

「手まわしのよいことだ……」

頼母は苦笑した。

「早苗のほうはいかがいたしますか」

「捨てておけ。そのうち使い道があるかもしれぬ。女のことだ、捨てておいても大したことはできはすまい。どう動くか、それだけ目を離さなければよかろう。ほかに仲間がいるようであれば、見つけ出して斬ることだ」

「では、怪しまれぬうちに戻りましょう」

「そのほうは言われたことをすぐやってもらいたい」

重兵衛がうしろを向いて手を上げると、手代がすっと身を寄せてきた。

重兵衛がその耳にささやくと、手代はうなずいて立ち去っていった。

と——入れ代わりに、町人風の男が重兵衛に身を寄せてきて、

「殿がお戻りになってから、城代さまは絵図面をかいておられました」

といった。重兵衛が歩きかけていた頼母にそのことを報告すると、頼母はぎくっとしたように、
「壱岐守のやりそうなことだ。その手にのるこのわしと思っているのか。危ういところであった。しかし、壱岐守がどれだけの記憶力があるといっても、絵図面全部を覚え込むことはあるまい。あしたは城内へ行くのを取りやめよう。壱岐守に調べてもらわなくとも、土地の古老に聞けばわかることだ……」
心の中でつぶやき、
「壱岐守から目を離さぬようにしておいてもらいたい。わしはいまから黒平へ戻る。土地の古老に尋ねてみたいことがあるのだ」
頼母はそういって境内を出ていった。

4

「早苗どの……退屈でござろうな。ちと外へでも散歩には行かれないか。わしは、以前に一度、甲府へは来たことがある」
兵衛は、頼母の戻りが遅いとみて、誘ってみた。
「わたくしは疲れておりますから、兵衛さまお一人でどうぞ……」
「それほど嫌うことはあるまい。口約束だけでも夫婦約束をしたわしだ。これでは先が思いやられる」
「どうぞ一人にさせてくださいまし……」
早苗は逃げるように部屋を出た。兵衛を甲州まで連れてきた頼母がうらめしくさえあった。絵

図面を奪い返すという目的がなかったら、江戸へ逃げて戻りたいところであった。
兵衛は早苗の後を追うように部屋を出た。
その時、樹間から横笛の音が流れてきたのである。
「あっ……」
「あっ……」
二人の口から叫びが漏れた。
前者は思いがけなく聞いた早苗の喜びの叫びであり、後者は兵衛の驚愕の叫びであった。
いつか兵衛が早苗を犯そうとしたとき邪魔した笛の音と同じ曲である。
やっぱり会えた……早苗はほっとした気持ちでその澄んだ曲の音に耳を傾けた。
兵衛の顔はみるみる引きつっていった。
(またしても……)と。
双眸に怒りをにじませながら、兵衛は目尻が裂けんばかりに見開いて、その笛の音のほうを凝視した。
斬れる相手なら兵衛はためらいはしなかったはずであった。が、しかし、兵衛を児子のごとくあしらった相手だけに、うかつに手を出して、ふたたび早苗の前で恥をさらしたくはない。そう思って、はやり立つ心を抑えていたのだった。
横笛を奏でている虚無僧の姿は見えない。聞いているのを知っているのか知らないのか、横笛の音は澄んだ音を流していく。
故意か、偶然か――

横笛はなおも清澄の度を高めていった。
まだ昼さがりである。その笛の音を、夕刻、日が落ちてまもなくの山中で聞いたら、そぞろ哀愁をおぼえずにはおれなかったであろう。
曲のせいではない。技でもない。技と曲が一体になって、これだけの調べを生んでいるのである。
兵衛はちっと舌打ちして立ち去っていった。
早苗はただうっとりと聞きほれていた。絵図面のことも、主馬之介のこともその脳裏から消えてしまっていた。
われに返ったのは、曲が終わってしばらくしてからであった。早苗はわれに返ると、
「あの時のお礼をいわなければならない」
と思い、あわてて庭下駄をつっかけて樹間へ入っていったが、虚無僧の姿はもはやどこにもなかった。
一度ならず、二度までもあの笛の音に助けられた。偶然であるとは思いたくなかった。偶然であるとすれば、せっかく早苗の胸の中にともったたった一つの火が消えてしまうのである。会いたい。会ってゆっくり話がしてみたいと思う。胸をきゅっと締めつけられるような切なさがある。それは明らかに恋と名づけられるものであった。
曲の美しさがはっきり耳の底に残っていて消えようとはしなかった。
ほうっと、ひとりでに早苗の口からため息が漏れる。目を閉じれば、まだ横笛の音が続いているような気がする。
遠くへ去っていった思い出をたぐっているように、早苗はいつまでも目を閉じていた。目を開

けば、せっかくつかみかけた自分の夢が消えてしまいそうであった。
その早苗の夢を破ったのは、またしても衆住兵衛の声であった。
「早苗どの、いつまでそうしておられるのだ」
その声にわれに返った早苗は、きっとなって、
「あまりつきまとわないでくださいまし。人目がございます。わたくしはまだあなたの妻になった覚えはございませぬ」
突き放すようにいった。
「口約束ではたしかに妻になるといわれた。わしはそれを信じている」
「ご勝手に……」
早苗が面倒になって立ち去っていこうとすると、
「殿が湯治場へお戻りになるそうだ。早く行かねば夕刻までには戻れない。殿がお待ちかねだ。はやく来ていただこう」
「はい……」
早苗は思いきって飛脚屋へ書状を頼んでいてよかったと思った。ためらっていれば、また主馬之介への連絡の機会を失うことになったかもしれないのだ。
「まだ運に見放されてはいないのだ」
早苗は主馬之介が来るのが待ち遠しかった。頼母が城中へ出かけていったのも、絵図面のことで行ったのに違いないと思っている。それだけにあせるのだった。
彼女は、飛脚屋に託した書状が奪われ、偽飛脚の手によって江戸へ運ばれつつあるとは考えて

もみないのだった。
　まして、その書状が主馬之介を死に追いやることになろうとは……。
　頼母はすでに用意して待っていた。
「早苗か——早く戻らぬと日が暮れてしまう。女の足ではちと疲れるかもしれぬが、湯治場へ着いてからゆっくりするがよい」
　何もかも知っていながら、頼母はさりげない調子でやさしくいうのだった。

峠の夕日

1

　主馬之介は不吉な予感がしてならなかった。早苗からはなんの連絡もないし、いつも落ち合うところも兵衛に気づかれてしまったので、うかつには近づけないのであった。
　自分の軽率な行動が、三年に及ぶ早苗の苦心を水泡に帰さしめるのを恐れて、早苗からなんらかの連絡があるのを待っていたのである。
　二日たち、三日過ぎ、主馬之介が早苗の身に何かが起きたのではあるまいかと思いはじめたのも当然のことといえる。
　それにしても、兵衛から見つかったのはまずかった。先に約束の場所へ行っていたのだから、自分がもうすこし注意をしていれば、兵衛から発見されずに済んだはずである。

　兵衛が自分たちの素姓を知り、目的を知ったとすれば、もはや早苗は無事ではないに違いない。あしたそれとなく見に行こうと思い、早苗の素姓がばれているのならば、近づくのはかえって悪い結果を招くと思い直す。
　逡巡（しゅんじゅん）している間に、時が容赦なく流れていった。
　飛脚が早苗からの手紙を届けてきたのはそうした時であった。
　主馬之介はすぐ封を切ったが、一読してさっと緊張の色を浮かべた。頼母がいよいよ甲州へ乗り込んでいったとすれば、最後の日が近づいてきたことになる。
（やはり絵図面を隠していたのだ）
　絵図面の場所を調べるために甲州へ出かけたのは疑う余地はない。その供の中に早苗を加えたのは、こっちにとっては好運であった。
　筆跡はまぎれもなく早苗のものである。
　早苗の喜びの顔が目に見えるような気持ちがする。
　一人でやきもきしているだろう。そう思うと主馬之介もじっとしてはおれず、歩けるだけ歩こうと、昼さがりの江戸を立って、甲州街道を急いだ。
　その主馬之介のあとから、旅商人風の男と、浪人者が歩いていた。小仏峠で主馬之介を殺すべく後をつけているのだが、主馬之介はその二人が刺客（しかく）であるとは思ってもみないのだった。
　初秋の空は、あくまで広く、高く澄みきっている。雲ひとつない青空が頭上に広がり、かかる日の旅は主馬之介ならずとも自然に足が軽くなってくるだろう。
　泊まりを重ねて小仏峠にかかったときは、もう日が西に傾き、まもなくたそがれが訪れようと

していた。主馬之介は、一刻も早く小仏を越えたく、日の落ちるのを覚悟の上で足を急がせた。
山道になると旅人の姿はまばらになる。ここらは山賊が出るのも珍しいことではないので、麓で夜の明けるのを待ち、朝、峠を越えるのが普通であった。夜の旅人は、よほど急ぎの者でなければ峠を越えることはない。
主馬之介が振り返ってみると、旅商人と浪人者も上ってくる。彼らも夜をかけて峠を越えるつもりらしい。
気にもかけず歩いていた主馬之介は、ふと足を止めた。西空にいましも日輪が没しようとしているところだった。
主馬之介は乗り出すようにしてその落日を眺めていた。前方は切り取ったような絶壁である。それを見るや、尾行していた浪人と旅商人は、うなずき合ってつつと足を速めた。おそろしく速い。しかも足音も立てないので、落日に見入っている主馬之介は二人がすぐ背後に迫ってきたのも気づかなかった。
浪人者が静かに抜刀した。一太刀あびせてけこめば、万が一にも生きているということはできまい。
振りかぶった浪人は、じりっ、じりっと間を詰めていき、主馬之介の姿がその刃圏内に入ったとき、大地をけろうとした。

2

が、浪人は、あっと小さく叫び、つつとあとずさった。その左の肘に小柄が刺さっているの

だ。主馬之介はその気配で気がつき、振り返ってみてぎょっとなった。
「何者だッ!」
刀の柄に手をかけて叫んだ。主馬之介は、浪人がなぜ肘を押さえてうしろに下がっていったのか、その意味がとっさにわからなかった。
旅商人が道中差しを抜いてまさに踏み込もうとしたとき、茂みがざわと動いて、虚無僧が姿を現してきた。
「かかる山道の闇討ち、物取りではないとみえるだけに、不興を覚悟で邪魔を入れたのだ」
虚無僧は諭すようにゆっくりいった。
「き、きさまか……小柄は……」
「一人の命には代えられぬ。わたしが通り合わせたのを不運と思って、きょうのところはあきらめていただこう」
「な、何者だ……きさまは……」
「お見かけどおりの世捨て人、勝手気ままに流れていく身でござる」
「おのれッ!」
旅商人のほうが踏み込もうとしたが、
「むだなことはせぬものだ。二人とも、相当の忍法を心得ている者とみた。二人の腕でこのわたしが倒せるものかどうかおわかりにならぬほどのご仁ではないと見たが……」
二人はちらっと顔を見合わせたが、双眸に殺気をにじませると、旅商人のほうが矢声もかけずに斬りつけた。

暗殺の現場を見られた以上、生かしてはおけぬと思ったのだが、彼も虚無僧の袈裟の中に隠された玄妙の剣を読み取ることができなかった。
商人の一颯はかなり鋭いものであった。斬り込むと同時に、浪人の片手なぐりが夕風を両断して虚無僧の頭上を襲った。一方が失敗しても、一方の刃が虚無僧の五体から血をしぶかせずにはおかないとみての一剣であったが、じゅうぶんにそれを予期していた虚無僧は、それさえ無為のものとなさしめた。
まったく——虚無僧の五体が翻転するのは目にもとまらなかった。
それほど虚無僧の動きはすばやかった。
「しまった……」
と思ったとき、旅商人のほうはみずからの勢いで谷間へ向かっていたし、かろうじて踏みとどまった浪人も、一呼吸の後には足元が崩れ、
「あっ……」
悲鳴を残してたちまち姿を消していった。
主馬之介は茫然と見ているだけであった。ようやく自分が助けられたということがわかると、
「危ういところをお助けいただき、お礼の申しようもございません」
「べつに礼をいわれるほどのこともないが、今後とも気をつけられるがよい。こんどは助かったが、この後も絶えずだれかがねらっていると思うことだ。相手は一筋縄でいく人物ではない。念のために教えておくが、そなたのところへ手紙を届けたのは、実は偽の飛脚であった」
「ええっ……」

「ほんとうの飛脚は黒装束に手紙を奪われたのだ。だれの指図によるものであるかは、そなたにはすでにおわかりであろう」
「しかし、筆跡はまぎれもなく——」
姉といおうとして主馬之介は口をつぐんだ。危機を助けてくれたとはいっても、彼が敵方ではないと言い切れぬのである。
「手紙は本物だ。しかし、奪った手紙を読んでいる。読んでからそなたに届けたのは、それだけの理由があってのことだとは思わぬのか」
「…………」
「その理由というのがさっきのことだ。江戸では人目があるので、峠で斬ろうとして、江戸からずっとそなたの後をつけていた。もう少し心得のあるものならば、忍者だとすぐ気づいたであろうが」
主馬之介は蒼白な表情で虚無僧を見つめていた。いったいだれであろう、この虚無僧は……。
不気味なものを感じながら、主馬之介はまだ警戒心を解いてはいなかった。

3

「死なすつもりではなかったが、みずから死を選んでいったのも当初から約束された運命であったのであろう。だが、そなたをねらっているのはあの二人だけではない。邪魔をする者を消すことにためらう相手ではないだけに、心してかかることだ……」
「はい……」

「相手の周囲には絶えず忍者が潜んでいる。よほどの用心をしていなければ、かえって相手の術中に落ちるだけだ」
「なぜわたしたちのために……」
「気まぐれ者のやることだ、気にする必要はない……」
と虚無僧はいって、
「姉をご存じなのですか」
「早苗どのに会うのは難しいだろう。だが、慎重に機会をねらえば会えないこともあるまい」
主馬之介はかつて早苗が兵衛から犯されようとしていたのを助けてくれたのがこの虚無僧であるのを知らないのである。
あの時は主馬之介は気を失っていた。衆住兵衛によって失神させられたのだが、気がついたときにはかなり離れた林の中であった。
ちょうど兵衛が息を吹き返してじだんだ踏んでいたときである。兵衛が念のために主馬之介が横たわっている場所へ行ったときいなかったのもそのためであるし、また、主馬之介が戻ってきたときにはだれの姿も発見することはできなかったのもそのためである。主馬之介は、失神している自分を運んだのがこの虚無僧であることを、むろん知るはずはなかったのだ。知っていれば虚無僧に対する警戒心はなくなっていたことであろう。
「知っているというほどのものではないが、ちと見かけたことがある」
「なぜそんなことを教えてくれるのですか」
「気まぐれ者のせい、と答えておこう。早苗どのはそなたへの手紙が人に見られているということを知らぬ。が、相手のほうでは、早苗どのが何の目的で奉公に上がったのかということを存じておる。なんとかしてそのことを耳に入れねばなるまい。素姓がわかってしまった以上、いつまでもそばにいるのは危険なことだ。一応身を隠して策を練る必要がある」

「姉は無事なのですか……」
「それはわたしにもわからぬ。早苗どのを捕まえて責めてみたところでなんにもなるまい。絵図面は彼の手にあるのだ。気づかぬふりをして、早苗どのがどう出るか見ているのも楽しかろう。ただ早苗どのの動きいかんによっては危険を招くことがある」
「なにか連絡の方法は……」
「まずあるまい。彼の周囲には忍者の目が光っているので、うかつに近づくことはできぬ。連絡はわたしがつけてみよう。なんとかできるかもしれぬ。乗りかかった船だ、ここで見捨てるということもできまい」
「わたしはこうしているのも気が気ではございません。一刻も早く黒平へ行きたいと存じますゆえ——」
「心して行くがよい。あせっては何もかもむなしくなってしまう」
「助けられた礼も満足に申しませんが……」
「礼などはよい。もう一ついうのを忘れていた。絵図面をねらっている者に、甲府城代、松平壱岐守という難敵が加わったのを忘れるではない」
「甲府城代……？　頼母は甲府城代と手を組んで……」
「いや、表面だけのことだ。双方とも自分の手にしようという腹であるらしい。それだけに、そ

なたたちは一時に二つの大敵と争わねばならぬのだ。行くがよい。くれぐれも早まったことはやらぬようにせい」

「数々のご教示かたじけなく存じます」

話しているうちに虚無僧の人柄を感じて、主馬之介はいまはじめて会った人ではないような気持ちがした。

もはやみじんも警戒心はなかった。

（もうすこし話していたい……）

と思いながら、早苗の身に危険が迫っているのが気になってならない。

いつしか二人を夜の色が包んでいた。西空に残っていた余光も消え、天地ただ黒一色に塗り込められていた。

「はやく行かれるがよい……」

と、虚無僧はいった。

「はい……」

二、三歩あるきかけた主馬之介は立ち止まって、思い直したように戻ってきた。

「お名前をお聞かせくださいませぬか」

虚無僧は背をむけたまま、

「横笛の主といえば、早苗どのには心当たりがあるはずだ——」

といって、振り返ろうとはしなかった。

主馬之介はやがて坂を下りはじめた。その背に、虚無僧の吹く寥々（りょうりょう）たる横笛の音が流れてきた。

（美しい曲だ——）

主馬之介はそう思いながら、その横笛の音が自分たちを見守っていてくれるような安堵（あんど）を感じながら、夜の色のにじんだ坂を下りていった。

裏切り

1

黒平へ戻った頼母は、表面は何事もない湯治客としか見えなかった。絵図面を頼りに、埋蔵場所を探している様子はなく、甲府から戻って三日になるというのに、旅籠（はたご）から一歩も外へは出ていないのである。

毎日、重兵衛と碁をあきもせず打っているだけのことであるが、早苗は自分の素姓が知られているとは気づかず、しきりに頼母から目を離さないでいた。

兵衛は、早苗の目的が何であるかを知ろうと、あらゆる方法を取ってみたがむだであった。早苗が容易に打ち明けることはなかったし、頼母から探り出すのはあきらめねばならなかった。

「早苗どの、殿はまた碁か——」

退屈そうに兵衛は声をかけた。人のいるところでは言い寄ることもないので、早苗はつとめて兵衛と二人きりになるのを避けていた。

「よほどあのお二人は気が合っているのでございましょう」

「碁などで気が紛れる人はよいが、わしのような若い者には退屈すぎる。ひと月もこんな生活を繰り返していたら、気が狂ってしまうかもしれぬ。時には甲府へでも息抜きに行きたいものだ」

ごろりと横になった兵衛は、跳ね起きてから、思い直したようにふたたび横になる。

離れでは、重兵衛と頼母は碁盤を囲みながら、

「まだ返事はないか――」

「少なくともきょうじゅうには来ると思います。なにしろ、だれにもわからぬように連れてくるのですから骨を折ります。呼び出すのもまずいし、どこかへ出かけるときを利用してさらってくるよりほかにはございません」

「うまくやってくれ」

「ぬかりなく手配をしておりますので、失敗はございません」

「で、どこか隠す場所は見つかったか」

「かっこうの場所がございます。猫坂のところに岩場があり、そこに石室がございました。入り口は草が生い茂り、人がやっと身をかがめて通ることができるくらいの広さですが、中は意外に広く、かつてだれかが住んでいたものと思われます。そこなら万一発見されるようなことはございますまい」

「水は……?」

「石室の中に岩間から清水がわいております。きょうじゅうには石牢も出来上がると存じます。にわか造りのものですが、逃げ出すことはありますまい。見張りの者もつけておりますから」

「うまくいけばよいが、壱岐守が欲を出しているだけに油断はならぬ。権作を城内へ呼んで、場所を聞き出そうとしているのだろうが、そうはさせぬ。権作はこっちで入用の者だ。あしたになって権作が姿を消したことがわかれば、さぞびっくりすることであろうな。たぶんわしの仕業と思うだろうが、知らぬ存ぜぬで押し通せばそれまでのことだ……」

頼母は体を揺すぶって笑った。

土地にいたって詳しい男に権作という猟師がいる。甲斐国の山々にはどこにどんな獣がいるか知らないところはないし、どんな山の中に入っていっても道を誤ることはないという。

壱岐守は、部下の者から権作の名を聞かされ、これを利用しようと思ったのである。一万両が人里近い場所に埋められてあるはずはないし、深山だとすると、権作を味方につけておくよりほかにはない。そう思って、権作を呼び出すことにしたのである。

城代からのお召しだというので、権作はすぐ行くことを約束した。その話は城内へ放たれている忍者によってすぐ頼母のもとへ報告された。

頼母も権作を利用するのが最も近道と思っていたのだが、壱岐守が呼び出したと知って、途中でさらう計画を立てたのである。

城代からの呼び出しは幾人もの人が知っていることであり、権作が姿を消したということになれば、壱岐守の仕業ではないかと思う人はあっても、頼母のことを考える人はあるまい。連れてきた家来も知らないことである、頼母が碁を打っている間も、その忍者たちは休みなく動いているのだった。

絵図面を人に見せてはまずいので、権作を捕まえておいて場所を白状させ、道案内をさせるつ

もりなのだ。
　秘密を守るために、捕まえた権作はふたたび解放しないつもりであるのはいうまでもなし、人の命を奪うことに逡巡する頼母ではなかった。
「ご隠居さま、入ってもよろしゅうございますか」
　手代の声に、
「入るがいい」
　と、重兵衛が声をかけた。身を入れてきた手代へ、
「権作はうまくやったか……」
　と尋ねた。重兵衛は手代がその報告に来たものと思ったのだ。
「まだ報告は参りません。じつは、主馬之介を小仏で襲わせた二人ですが、死体になって発見されました」
「なにッ！」
　重兵衛も頼母も、ぎょっとしたように目を光らせた。
「谷間へ二人とも落ちて死んでいるのを杣男が発見しました。斬り傷はないので、斬られて落ちたのではないようです」
「すると、主馬之介を追って小仏までは来たものとみえるな。おそらく主馬之介の仕業であろうが、それほどの腕か――」
　と、頼母も小首をかしげた。
「早苗の弟ならば年はまだ若うございます。あの二人は相当に腕の立つやつで、二人してむざむざと遅れをとるようなことはございません」
「では、どうして死んだと申すのだ」
「それがわたしにもわかりません。主馬之介がそれだけの腕の持ち主であれば、今までにも当然姿を現していなければなりません」
「主馬之介が小仏を越えたのはまちがいあるまい。また、わしがここへいるのを知っているから、必ず姿を現してくるに違いない。配下の者に、若い男を見れば斬り捨てておくように命じておけ。必ずしも武家姿をしているとはかぎらぬぞ」
「申し伝えておきます。それから、早苗と主馬之介が会わないうちに、早苗を石室にでも入れておかれてはいかがでしょう」
「それには及ぶまい。早苗はいてもいなくても、べつに恐れることはない。絵図面を早苗に盗まれるほど油断はしてはおらぬ」
　頼母は気にもかけてはいない様子であった。
「ちと権作の一件は遅うございますな。もう連絡があってもよさそうなものです」
　重兵衛はそういって、山の中腹に一本高くそそり立っている杉のほうを見つめた。
　その杉のあたりで狼煙があげられるはずであった。狼煙の煙で、彼らの間ではじゅうぶんに意が通じるのである。

2

「殿――」

衆住兵衛が退屈を持て余しているように入ってきた。頼母は碁盤から目を離さず、
「なんだ……」
「わたくしに一両日のお暇をいただけませぬか――」
「どこへ行くのだ。まさか江戸へ戻りたいのではあるまい。もっとも、一両日では江戸へ行けるものではないが――」
「山ばかり見ておりますと気が狂いそうになりますので、甲府へ出てみたいと思います」
しかられるのを覚悟の上だった。
「無理もあるまい。そのほうは若いのだ。それに、静かに自然を眺めていることに満足できるような男ではないからな……」
「お許しくださいますか……」
「うむ、よかろう。甲府へ参っても、刃傷沙汰はしないように心してゆけ……」
「ありがとう存じます……」
兵衛は喜んで、さっそく黒平から下りていった。
(甲州くんだりまでついてくるのではなかった。甲州へ行けば早苗が自分のものになるかもしれぬと思っていたのだが、その機会はない。機会がなければ甲州へ来た意味はないのだ。おれはまだ湯へ浸るのを喜ぶほど年老いてはいない)
だれにも向けようもない鬱憤を吐きながら歩いていく。
まもなく猫坂にかかろうとしたとき、兵衛ははっとして樹間に身を隠した。
五人の黒装束が、一人の老人を担いで走っていくのである。

「はて……」
いぶかりながら目をこらしていると、岩場のところへ消えていった。
しばらくして、兵衛は路上へ出ると、興味をひかれるままに、黒装束が消えていった岩場のほうへ歩いていった。
よじのぼるようにして一つの岩を越えると、その向こうにも岩が続いている。黒装束の姿はどこにもない。
兵衛はなおもあたりを捜してみたが、こんなことで暇どっていては時間のむだだと思い直して引き返していった。
甲府城下に足を入れたときにはもう夕刻になっていた。かなり急いだつもりではあっても、道のりがあるし、黒装束の跡をつけたりしたので意外に暇どったものらしい。
(またとない機会だ。今夜はつぶれるほど飲んでやろう)
兵衛は、とある小料理屋に飛び込み、奥の座敷へ上がった。兵衛は、以前にも甲府へは来たことがあるので、この小料理屋を覚えていたのである。
兵衛はもともと酒癖のいいほうではない。今夜は甲府で泊まるのだというので、解放感で気持ちも緩んでいた。
兵衛の抑えつけていた感情が爆発したのは、女が銚子を取りに立ち上がった拍子に膳につまずき、兵衛の袴を汚したときであった。
「たわけッ！……」
「申し訳ございません」

女は顔色を変えて謝った。
「申し訳ないですむと思うか。刀にまでかかっているぞ。刀は武士の魂、鞘当てしても命を捨てることもあるのを知っているのかッ！」
「は、はい……」
「許せぬ。武士の魂を汚されて許せると思うかッ！」
容赦もない大声であった。
その声を聞きつけて、女将が飛んできた。
「まことに申し訳ございません。斬ってみたところで刀の汚れ、ここはわたしに免じてお許しくださいませ。その代わり、今夜はどれほどお飲みになられましょうとも一切お代はいただきません」
「ならぬ。ならぬ！　斬り捨ててくれる……」
兵衛は、止めれば止めるほど、居丈高にわめくのだった。

3

女将は、兵衛の怒りがあまりにもひどいので、おどおどするだけであった。
「どけ、どかぬと、そのほうも斬る！」
兵衛は刀の柄に手をかけて立ち上がった。
その時、襖を開けて、一人の武士が入ってきた。
「衆住兵衛どのとお見受けするが……」

ずばりと名前をいわれ、兵衛はやや狼狽しながら、
「あなたは……？」
と尋ねた。名前を知られていては、甲府城下で刃傷沙汰を起こすこともできなかった。
「お会いしたいと思っていたところだ。この場は拙者にお任せ願いたい」
と、その武士は女たちを去らせてから、
「じつは、甲府城代松平壱岐守さまが、ぜひ貴公に会って話したいことがあるといわれておった。青山どのには内密でなければならぬのだが、けっしてご損をかけるようなことはない。お見受けしたところお一人の様子、幸いだと思って声をかけてみたのだが……おいで願えまいか……」
武士の態度はひどく慇懃であった。
兵衛にとってもその武士の出現は幸いであったといえる。この機会を逃しては、引く潮時がなくなるのに気づかぬ兵衛でもなかった。
「せっかくのお口添え、我慢ならぬところだが、貴公に免じて忘れることにする」
「それはかたじけない……」
武士は安堵して、
「ご案内しよう……」
二人は連れ立って小料理屋を出た。
連れていかれたのは、寮とみえる木立の深い静かな家であった。外から見たところはさしてりっぱとは思われなかったが、中へ入ってから兵衛はびっくりしたものである。
玄関を入ると、数寄をこらした家の中であった。若い女が出てきて、

「山名さま、ようこそ……」
　と、声をかけた。
「このかたは城代さまの大切なお客だ。わしは城代さまを呼びに行ってくるから、それまでおもてなししておいてくれ」
　といって、兵衛へ、
「今夜はここにお泊まりになるがよかろう。半刻（一時間）以内には戻るゆえ、なんなりと遠慮なく申しつけられるがよい」
　山名三十郎が出ていくと、
「ご案内いたします」
　と、女がいった。
　磨き上げられた廊下を二つばかり曲がって、兵衛は、とある部屋へ案内された。
　庭の見通しのよい部屋で、燈籠に明かりがともされ、その明かりが庭をやわらかく包んでいた。
　部屋の中もりっぱなものであった。兵衛などが経験したこともない部屋で、いささか圧倒された形であった。
　女が来て、
「お酒になさいますか……」
　と尋ねた。
「うむ、酒がよい……」

　答えると、女は出ていき、三人ばかりの着飾った女が入ってきた。芸者ではない。といって、素人娘でもない。
　酌人と呼ぶもので、小唄や常磐津の師匠などが、表だって芸者などを呼べない家の宴席などにはべるものである。
　江戸にもそういうものはあるから、兵衛にはすぐわかった。
　酒がくると、兵衛もやっと気まずさから解放された思いであった。
　さされるままに杯を傾けながら、
「ここはだれの屋敷だ……」
　と尋ねてみると、
「あら、ご存じなかったんですか。ここはご城代さまの……」
「下屋敷か――」
「そんな堅苦しいもんじゃございません。息抜きの家ですよ」
　女たちは意味ありげに笑った。
　気のきいた料理屋とてない甲府では、江戸で遊び慣れた壱岐守にはこんな場所を作らざるをえなかったのであろう。
「ご城代さまはいつもおみえになるのか」
「ときどき……でも、詳しいことは存じません」
　勝手に出入りすることはできまいから、酌人たちに壱岐守の行動がわかるはずはなかろう。
　美女に囲まれての酒は酔いが回るのも早かった。

「まだおみえにならぬか――」
　これ以上酔っては城代へ対して失礼にあたると思いながら、つい杯を重ねてしまう。
「もうおみえになるんじゃありませんか。尋ねてまいりましょう」
　と、一人が腰を浮かすと、
「いや、その必要はあるまい……」
　と、兵衛は止めた。どうせこの家に泊まるのならば、そうあせる必要はないと思ったからであった。

4

「ご城代さまのおみえでございます」
　と女が知らせてくると、兵衛は思わず居ずまいを直した。壱岐守はすでに敷居に立っていて、
「待たせたな……」
　気さくに声を投げて入ってきた。
「女どもは呼ぶまで向こうの部屋へ行っておるがよい――」
　と、人払いさせてから、
「いかがだな、ここの居心地は……田舎のことゆえ、江戸のそのほうの口には合うまいが、酒だけはうまいと思っている……」
「で、わたくしにご用と申されますのは……」
「そのほうも気短な男だな。そうあせることもあるまい。ゆっくり話をしよう。そのほうとはい

ちど話し合ってみたいと思っていたのだ……」
　壱岐守はそういって、
「黒平では退屈であろうな。若いそのほうがご隠居の供ではのう。青山どのももう少しは話のわかる人と思ったのだが」
「やっとお暇をもらってご城下へ出てきたのですが、時には息抜きをしなければ単調で気が狂いそうになります」
「もっともなことだ。隠居してからの青山どのは、もはや幕閣を動かす力もなく、廃人同様のお方だ。そのほうも見切りをつけてしまったほうがよくはないのか。むだに一生を埋もれさせるには惜しい。そのほうの心ひとつで、いくらでもその機会はある」
「お話次第によっては……？」
　と、兵衛も心を動かした。
「その気ならばまず一千両になる仕事がある。それをやってくれれば、あとはこのわしがそのほうの身柄を引き受けよう」
「一千両といわれますと……」
「青山どのがある絵図面を持っている。それを奪ってきてくれたら、引き換えに一千両をやろう。損な仕事ではない。一千両といえば、一生かかっても手にすることのできない金額だ。それがたった一枚の紙切れで手に入るのだ……」
「…………」
　兵衛はすぐには返事ができなかった。あまりにも金額が大きいので、急には信じられないのだ

った。

「一千両と申したのは、その紙切れがそれだけの価値があると申しているのではない。その絵図面を奪うだけならば、百両も出せば喜んで働く者はいくらでもいる。わしはそのほうごと一千両で買いたいのだ。むろん、その後はしかるべく手当を与える。一千両はまるまる手をつける必要はない。万一の場合のために蓄えておくのもよかろう」

「…………」

「わしは、ご存じかもしれぬが、青山どののためにはずいぶん尽くしてきた。甲府へ追いやられたのも青山どののためだ。青山どのは、わしが甲府へ追いやられても、助けようとはしなかった。絵図面はなんの価値もないかもしれぬが、青山どのが肌身から離さないようにしているものだけに、奪い取ってやらなければ気が納まらぬのだ」

「…………」

「無理にとはいわぬ。そのほうの気持ちひとつだ」

ことばは穏やかではあったが、言外に拒否を許さぬ強い意志が感じられた。

おそらく――

拒否すれば兵衛をこの家から生きては帰さないだろう。暇どっていたのはその準備をしていたものに違いあるまい。

兵衛は頼母のそばを離れることには未練はなかった。隠居のお守りはもうたくさんだと思っていた。が、禄を離れては、おいそれと仕官の口があるような時世ではない。

5

兵衛はいつしか酒の酔いもさめていた。

「気が進まぬようだな……」

「ご期待にそえるかどうか自信がございません」

「やってみる気はあると申すのか」

「はい。しかし、なにぶんとも油断のないお方ですから……」

「それだけに、わしとしても鼻をあかせてやりたいのだ。絵図面を奪えば、すぐ城内へ駆け込んでくるがよかろう。山名三十郎にすべて連絡をつけるがよい。これは当座の費用じゃ。取っておけ。今夜はここで泊まっていけ。用意はさせておる……」

壱岐守は、兵衛の膝の前に封をしたままの五十両を置くと、部屋を出ていった。

兵衛は、その五十両を手にしても、まだ夢の中にいるような気持ちだった。

しかし、兵衛にとってはまたとない幸運であるように思える。

今までにいちども自分をこれほど遇してくれた人はなかったし、この機会を逃せばおそらくふたたびは巡ってこないに違いなかった。

ふいに――

庭の植え込みの中で騒ぎが起こった。ざわっと枝が揺れたかと思うと、飛び出してきた黒装束がどっと倒れたのである。

「何者だッ!……」

廊下を歩いていた壱岐守の声が飛んだ。
黒装束につづいて、三人のこれも黒装束が姿を現してきた。
「怪しい忍者を見かけましたので斬っておきました……」
と、一人が答える。
「相手もなかなかやるな。わしの跡をつけていたものと思う。ふふふ、とどめを刺して取り片づけい！」
壱岐守は言い捨てて歩いていった。
兵衛は担ぎ去っていく黒装束の姿を茫然と見送っていた。いよいよ抜き差しならぬところへ追い詰められたような気持ちだった。
女が入ってきた。
「お疲れのご様子ですが、お休みにはなりませぬか。お床は延べてございます。ご案内いたしましょう」
「うむ。しばらく横になりたい」
兵衛は女について部屋を出た。
「こちらでございます。ご用の時は鈴をお鳴らしくださいませ。では、ごゆっくりおくつろぎを……」
襖をすこし開けて女は戻っていった。
部屋の中には行燈がともっていた。身を入れた兵衛は、人の気配にぎょっとなった。
衣桁に隠れるようにして一人の若い女が座っていた。しかも、その女は緋縮緬の長襦袢姿であ

った。
あらわな胸の隆起を隠すように女は両腕で胸を抱えている。肩から二の腕に流れる線が成熟した女を感じさせる。
「そ、そなたは……」
兵衛はごくりと唾をのみ込み、かすれた声で尋ねた。
女は黙ってうつむいていたが、やがて思い切ったように顔を上げると、行燈のそばへ行き明かりを吹き消して、
「ご存分になされませ」
消え入るような声でいった。
（これも壱岐守さまのごちそうか——ご隠居と違って味なことをなされる）
兵衛は、息をのんで、闇の中へ座っている女へ近づいていった。

壱岐守は、別室で、三十郎と向かい合っていた。
「あの男が裏切るようなことはございませんか」
三十郎には兵衛が信じられないらしかった。
「大丈夫であろう。欲には転ぶ男とみえる。欲でつっておけばまちがいはない。それに、裏切ったときのことがわからぬ男ではあるまい」
壱岐守はさして気にはしていない。
「絵図面を奪ってまいりましたときは——」

「欲に転ぶやつだから、絵図面の謎に気づいてどんな欲を起こすかもしれぬ。まず消しておくのが最もよい方法であろう」

といって、

「権作はもう連れてきてもよいころだが……」

「遅うございますな。昇仙峡で捕らえ、駕籠で運んでくる手はずになっておりますから、もう参ると思いますが……」

三十郎も意外の遅延に案じていたのだった。

二人の天井でことことたたく音がした。

「入れ……」

三十郎が声をかけると、天井から黒装束の男が飛び降りてきた。

「権作はいかがいたした……」

「それが見当たりません……」

「なにッ！……」

と、壱岐守は目を光らせた。

「待ち構えていたところ、なかなか参りません。家を出たのは確かめて待っていたのですが、あまりに遅いので、一人を迎えにやりますと、やはり家を出たとのこと。途中は一本道で、昇仙峡を通らずに来ることはできないのです」

「あいつだッ！」

鼻孔を膨らませて壱岐守は叫んだ。

「頼母のやつが途中で奪い去ったに違いない！」

ぎりぎりと歯をかんだ。権作に用のある者といえば、頼母をおいてよりほかにはあるはずはなかった。

「思いきって、青山さまを……」

三十郎は壱岐守の決心をうながすように膝を寄せたが、

「まだその時期ではない。いずれはその日がやって来るだろうが……」

重い声で壱岐守は目を閉じた。

非情の夜

1

主馬之介は甲府でそれとなく様子を見るつもりであった。が、甲府まで来るとじっとしてはおれず、一刻も早く早苗に素姓がばれているのを知らせたかった。

逡巡している間に早苗の身に危険が迫っているかもしれない。虚無僧がなんとか連絡をつけてみるといったが、まだその正体もわかっていない相手を頼むことはできなかった。

黒平が湯治場であれば、客を装っていけばよいのだ。主馬之介は安易な気持ちで出かけていった。

黒平では、頼母はいつもと少しも変わりはなかったし、ただ衆住兵衛だけが甲府から戻ってき

て急に元気を取り戻し、以前のような陰鬱な表情を見せなくなった。

早苗にはかえって気持ちが悪くなった。

重兵衛だけは、退屈だというのでときどき出かけていくが、それも夜までには戻ってきて、あいかわらず頼母と碁を打っていた。

早苗は、もうまもなく主馬之介が来るころだと思い、それとなく気をつけているのだが、甲府からかなり山に入った辺境の湯治場へ訪れてくる客はなかった。

早苗が恐れていたのは、主馬之介が湯治客を装ってきはしないかということであった。兵衛がいる以上、来れば主馬之介であることは一目して発見される。

兵衛は、以前のように早苗に言い寄ることはなかったが、それでも早苗の行動には絶えず目を光らせているのがわかった。

そうした昼さがりであった。

「許せ……」

と、一人の若い武士が湯治場へ来たのだった。

「二、三日滞留したい……」

と、その武士はいった。

「どうぞ……こんな辺鄙なところへよくお越しくださいました。景色だけはよろしゅうございますよ」

主人はそういって若侍を案内していった。早苗は、廊下に出ようとして、その若侍の横顔が目に入るや、ぎょっとなった。

主馬之介がやって来たのである。廊下には人はいない。すぐ出ていくようにいおうと思ったが、見つけられてはと思い直して、夜を待つことにした。日が落ちるのがなんと長かったことであろう。

この湯治場では客の寝るのが早く、その代わり朝はみんな早起きであった。

その夜、早苗は寝静まってから、そっと寝床を抜け出していった。今夜じゅうにでも主馬之介を逃がさなければ、兵衛に発見されればたいへんなことになる。そう思って、廊下のきしむ音を気にしながら足音をしのばせていった。

「早苗どの……」

名を呼ばれ、足を止めた早苗の顔が、みるみる真っ青になった。恐れていた衆住兵衛が立っているのだ。

「どこへ行かれる……」

「あの……ちょっと、気分がすぐれませぬので、夜風に当たっていました」

「主馬之介に会いに行かれるのであろう……」

「ええっ……」

「それとも違うといわれるのなら、きょう来た若侍が主馬之介であるとご隠居の耳に入れようか」

「兵衛さま——」

「顔を知っているのはこのわし一人だ。ぜひとも頼みたいことがある……」

兵衛は、すばやくあたりを見まわして、小部屋へ誘った。早苗はこばむことはできなかった。

黒い闇の中で、早苗はなんとかして身を守ろうと、そればかりを考えていた。

が、兵衛の要求は意外だった。

「早苗どの、ぜひとも頼みたいことがある。それをやってくれるのなら、主馬之介のことは黙っているし、また、わしと夫婦になるのを気が進まぬというのなら、忘れてやってもよい」

「…………」

早苗は、びっくりして、思わず兵衛の顔を見た。

2

「わしの力ではどうすることもできぬ。ご隠居の着替えなどを手伝っているそなたの力に頼るよりほかにはないのだ」

「わたくしにどうしろといわれるのですか……」

兵衛のいっていることが事実とすれば、できるかぎりのことはやってもよいと思った。兵衛の口さえ封じることができるのなら、主馬之介は単なる湯治客としてここにいることはできるのだ。主馬之介がいっしょであれば、目的を果たせる日も近くなる。

「じつは……ご隠居から奪ってもらいたいものがある――。もちろん、拒否すれば主馬之介は無事ではいないということを忘れずに返事していただきたい」

「何を奪うのです……」

「絵図面だ……」

「えっ……」

「ご隠居はどこかに隠し持っている。たぶん肌身につけているものと思うが、湯へ入るとき近づ

けるのはそなただけ……」

「何にされるのです」

「それは聞くな。聞いても答えられぬ」

「どんな絵図面ですか――」

「絵図面は一つしかない。やってくれるな」

押さえつけるようにいった。

「でも、油断のないお方ですから……」

「すぐとはいわぬ。が、早いほうがよい。その絵図面さえ手に入れれば、わしは姿を消す。二度とそなたの前には現れないということを約束しよう」

「…………」

早苗は兵衛が自分の素姓を知らないのがようやくわかった。知っていれば、かかる要求は持ち出さないはずである。

素姓も知り、目的も知っているといったのは、早苗に拒否させないための脅しにすぎなかったのである。

「わたくしには恐ろしゅうございます」

「では、主馬之介の身がどうなってもよいと申すのだな」

「あなたさまもそれでご無事にいられましょうか――」

「なにッ!」

「ほんとうに兵衛さまが主馬之介のことを口外されぬと約束なされるのならば、できるかぎりの

ことはやってみます」
「約束する――」
　と、兵衛はほっとなった。
「いつと日時を切られては難しゅうございますが、それをご承知なら……」
　早苗はむろん兵衛に絵図面を渡す気持はないが、彼の邪魔を入れないためには、そう言っておくほうがいいと思ったのだ。
「恩にきる……人に見とがめられてはまずい。連絡は、人目のないところを見つける……」
　兵衛は障子をあけて見まわしてから、
「早苗どの……早く……いまのうちに……」
「は、はい……」
　早苗が出ていこうとする耳へ、
「主馬之介とは当分の間は口をきかぬほうがよい。連絡ならば手紙を書くがよい。わしが届けてやろう……」
　といった。お願いいたします、と早苗は答えておいたが、主馬之介への手紙を兵衛に託す意志はなかった。
　兵衛は必ずその手紙を読むだろうし、主馬之介への連絡はすべて秘密のことであるから、兵衛に知られては今後の動きはできなくなってしまう。
（やはり、主馬之介を一刻も早くこの湯治場から出ていくようにしなければなるまい。でないと、いつかは気づかれるだろう）

　早苗は、今夜のうちに手紙を書き、機会を見てそれを主馬之介の手に渡そうと思った。
　主馬之介の軽率な行動が、早苗にはいささか腹立たしかった。
　同時に、主馬之介のほうでも、素姓が知られているのも気づかず、危険の中に身を置いている早苗がひどく危ないものに見えた。
　主馬之介も湯治場へ身を入れる危険を知っている。知っていながらやって来たのは、その早苗が危なくてじっとしてはいられなかった。
　主馬之介も夜を待って早苗に連絡しようと出てきたのだが、早苗の姿を見て身を寄せようとしたとき、兵衛の姿を見て、凝然となった。同時に身の危険を知った。部屋に戻ると、すぐ飛び出せる支度をした。早苗になんとかして連絡したかったが、顔を見られている兵衛がいるだけに飛び出せないのだ。しかも自分よりはるかに腕の優れている男である。
（軽率であったのではなかろうか――）
　やはり虚無僧に任せてしばらくは傍観しているべきであったかもしれぬ――
　そう思ったが、今になってはどうすることもできぬ。兵衛から発見されぬように、部屋から出ないように努めるよりほかにはない。
　主馬之介は、はやり立つ心を抑えるのに、相当の辛抱が必要であった。

3

　権作が気づいたのは、夜もかなり更けてからであった。はっとしてあたりを見まわす。太い格子が一方を遮り、あとの三方は岩であった。こんな仕儀にならなければならぬような覚えはない。

「だ、出してくれッ！」
権作は叫んだ。わーんと叫び声が不気味に響いていった。
「静かにせい――」
手燭を持った黒装束が近づいてきた。
「わしは何もしてはおらぬぞ。なぜこんなところへ押し込めんのじゃ。わしはご城代さまのお召しで行く途中だ。出してくれ……」
「静かにせい。生きていたければ静かにすることだ……」
「な、なんだと……だれがこんなところへ押し込めたのか、その張本人を呼んでくれ。わしは今まで曲がったことはなに一つやらずに過ごしてきたんだ」
「黙れ……騒ぐと水も飲ませてはやらぬぞ」
「水をくれ。喉が渇いた……」
「手数のかかるやつだ……」
舌打ちして、黒装束は竹筒に水をくんできた。権作は舌鼓を打って水を飲み、
「ここはどこじゃ……」
「こんな岩場はいくらもあるものではなかろう。甲州なら知らぬところはないといわれるきさまだ、考えてみるがよい……」
「岩場でこんな石室があるのは一ヵ所だけしかないが、まさか、猫坂の……」
「やっと思いついたか。さすがは権作だけのことはある……」
黒装束は笑ったが、権作の顔は生きているとは思えないほど青ざめていた。手がぶるぶる震え

ている。
「どうした、権作……」
「この穴の入り口にしめ縄が張ってはなかったのか……」
「さて、そこまではわからぬ。縄のようなものが下がっていたが……」
「たいへんなことじゃ。ここへ入って生きていた者はない。必ず十日以内には死んでいるのだ。去年の暮れにも一人死んだので、しめ縄を張って悪魔退散の祈りをしたばかりじゃ。付近の人はだれも近づいてはおらぬ。早く出してくだされ。おまえさんたちも十日以内に死んでしまうぞ……」
血相を変えて権作はわめき立てる。だが、黒装束は笑って、
「ふざけたことを……ここの山猿どもは埒もないことを信じているのか。その魔物にいちど取りつかれてみたいものじゃ……」
黒装束の笑い声が消えないうちであった。頭上の岩が崩れてきたのであった。
黒装束はさすがに忍者だけあって、すばやく頭上からの岩を避けた。と同時に、飛びすさった場所にも岩が崩れ、
「あぁっ！」
悲鳴を上げたとみるや、血へどを吐いてのめっていった。
権作は目を閉じた。落下が収まってから目を開くと、さっきの黒装束が血を吐いて死んでいた。
「見ろ、わしのいうことを信じないからだ。世の中には理屈ではわからぬことがいくらでもあるのじゃ、言い伝えというものには嘘はない……」

手を合わせる権作である。
悲鳴を聞きつけて黒装束が飛んできた。
「どうしたッ!……」
抱き起こしてみたがすでに命は絶えている。
「ここは魔の穴じゃ。ここへ入ったもので十日以上生きていた者はいない。それをいっても信じないからこのようなことになる」
権作は投げ捨てるようにいった。穴の中へ入らないときならばともかく、入ってしまった以上、自分もまた生きていることはないと覚悟を決めたのか、権作はひどく落ち着いていた。
古老というものは、土地の語り伝えに対しては、狂人のような頑固な確信を持っている。権作もまた例外ではない。
崩れた岩壁を茫然（ぼうぜん）と仰いでいる黒装束へ、権作は投げつけるようにいった。
「死なせたくないものはこの穴の中へ入れないようにするがよい。おまえさんもその男と同じようになるのは避けられないのだ。それがわかったら、身のまわりの始末をしておくがよい」

恩人

1

「あっ……」

主馬之介は思わず耳を傾けた。あの虚無僧の横笛である。曲の名は知らないが、その曲には聞き覚えがある。
笛の音はよく耳を傾けねば聞こえないくらいのものであるが、主馬之介の部屋には、窓の位置がよかったとみえて、はっきり聞こえる。
早苗もその笛の音を聞いた。が、早苗の部屋では切れぎれにしか聞こえてはこない。すべてをあすに託して寝床に入ったところであったが、横笛の音を聞いて思わず身を起こしたものである。
が、早苗の部屋では、その笛の音があの虚無僧のものであるかどうかを確かめることはできず、
(気の迷いであろう。こんな時には何にでも頼みたくなってしまうものだ)
早苗は弱くなった自分の心をしかって身を横たえた。目を閉じても、あの笛の音が虚無僧のものであるように思えてならなかった。
主馬之介はそっと庭先から抜け出していった。虚無僧が約束してくれたことを忘れてはいなかったのだが、その素姓が知れないために信じてしまうのが危険だと思われたのである。だからこそ、危険と知りつつ黒平まで出向いてきたのだった。
いま、虚無僧の吹く横笛の音を聞くと、主馬之介はふと後悔に似たものを感じた。
あのお方は約束どおりに黒平へ出向いてきているのだ。あの笛の音は邪悪の心で出せるものではない。
主馬之介は庭を突き切ってその笛のほうへ近づいていった。同時に、黒い影がその後を追って動きだした。

重兵衛の配下の忍者であった。主馬之介が宿へついてからずっと目を離してはいなかった。
すでにいちど小仏峠で忍者に襲われている以上、そのことのあるのは覚悟しているべきであった。忍者がそれほど簡単に相手をあきらめることはあるものではなく、第二の、第三の刺客が絶えず身辺から目を離してはいないのを考慮に入れておくべきであったろう。
といっても、若い主馬之介にそれを望むのは無理なことであったかもしれない。
主馬之介はかなり慎重に旅籠を抜け出したつもりであったが、尾行する忍者にはさして苦労もなくその動きを捕らえることができた。
笛の音は依然として澄んだ音色を山々に流していった。幾人の人がこの音色を聞いているのであろうか。
聞く人があろうとなかろうと、笛の音はあくまで清澄の音を加えていく。高く、低く、聞く人をしてしばし夢幻の世界へ引き入れずにはおれまい。
主馬之介はその音色に誘われるように近づいていった。
虚無僧の姿はすぐわかった。小高い丘の上で横笛を口にしている。前方には、その名のごとく、黒い夜色に塗り込められた黒富士が静かな姿を見せている。
虚無僧はようやく笛を口から離した。
「主馬之介どのか――」
「はい。ご忠告を忘れ、黒平へ来たことをおわびせねばなりません」
「そういうことになろうかと思っていた。若さも時によっては若さゆえに身を滅ぼす結果を招くことを忘れてはならぬ。笛の音でわかるかどうか案じていたのだ。少し遠いので、あるいは聞こ

えぬのではないかと思ったが」
「窓の向きがよかったのですぐわかりました。で、おわびをせねばならぬと思い、抜け出してきましたが……」
「そなたが黒平へ行ったと聞き、すぐ跡を追ってきた。あそこには衆住兵衛というそなたの顔を知っている者がいたはずだ」
「ご存じでしたか……」
「江戸で、そなたが早苗どのを待っているとき、兵衛の出現で気を失った記憶があろう」
「あの時、わたしは別の場所へ移されていたのは、あなたが……」
「出すぎたこととは思ったが、兵衛から守るために移しておいたのだ。あの時、早苗どのも無事、屋敷のほうへ戻ることができたのだ」
「では、わたしは二度も、いや、きょうで三度、命を助けられたことになります。兵衛から発見されずに済みましたが、あすはどうなるか知れません。笛の音が聞こえなかったら、わたしは朝までいて発見されたかもわかりません」
「そなたは若いな。兵衛が気づいているのをまだ知らぬのだ」
「気づいているのなら……」
「なぜ……と聞きたいのであろう。発見してから捕まえる、あるいはすぐ斬るとはかぎるまい。早苗どのの素姓を知っても頼母はわざととぼけているではないか。兵衛は何を考えているのかはわからぬが、しかし、知っているのはまちがいあるまい。それほど間抜けた男ではないからな……」

「申し訳ございません」
主馬之介はそういって頭を下げた。

2

「わたしはどうしてよいのかわからなくなりました。何もかもお話しいたします」
「知っています」
虚無僧は答えた。
「知っているのに、わたしたち姉弟に手を貸してくださるのですか。わたしたちは謀反人の子です」
「それがなんとしたのだ。そなたに謀反の心があればともかく、知っている者は知っているのだ。自分さえ恥じることがなければ恐れることはない。わたしも、そなたが私欲によって動いている者ならば、こうやって助けたりはせぬ」
いいながら虚無僧は振り向き、主馬之介の背後の草むらへ小柄（こづか）を飛ばしていた。
草むらからぱっと飛び出した黒い人影があると主馬之介の目にとまったとき、虚無僧は三間ばかりの距離を一気に縮めて、その足を脇差（わきざし）で払った。
黒装束は一間ばかり飛び上がった。が、虚無僧もまた大地をけり、黒装束が下り立たないうちにその足に一刀を浴びせていたのだ。
しゅっ！　と血が飛び散り、さしもの黒装束も大地に転がった。
彼は、虚無僧の小柄を受けたとき、その力量の及ばないことを知ったのはみごとであった。が、

跳躍してその抜き討ちをかわしたとき、ほっとなった。そのゆるみが彼を死に誘い込んだのだ。
「主馬之介どの……おわかりかな。この忍者はずっとそなたの跡をつけてきたのだ。これを見破るにはまだ修行がいる……」
主馬之介は、夢から覚めたような気持ちで、苦しんでいる黒装束を見下ろした。
「青山頼母に雇われている忍者とみえる。おぬしの支配者を聞かせてくれれば、命は助けてやろう。どうだ……」
身をかがめて虚無僧はいった。
「…………」
唇をかみしめ、痛さに耐えながら、黒装束は無言だった。
「言えぬのか――」
虚無僧は首をねじむけたが、その唇から血が流れだした。
「死んだのですか――」
ぎょっとして、主馬之介はのぞき込んだ。
「死んだ。忍者はその術が破れれば死ぬのをためらうものではない。頼母の周囲にはかなりの忍者が守っているものとみえる。そなたはしばらく黒平には近づかないほうがよかろう」
「わたしでは役に立たぬのですか」
「無理だ。相手はそれほどなまやさしいものではない。そなたにはそなたでなければならぬ仕事がある。それを待っているのだ」
「どこで待っているのです」

「甲府で待つがよい。すぐ夜道を駆けていけ。また追っ手がかかるかもしれぬゆえ、用心して行くことだ」

主馬之介は、そういわれて、早苗のことを頼み、黒平を離れていった。

主馬之介を見送ってから、虚無僧は黒平へ歩いていった。早苗が大事に至らぬうちに湯治場から逃げさせなければならぬと思う。

が、兵衛がいるので横笛で連絡することができないので、忍び込んでいくよりほかにない。

今夜ということは早急すぎる。まず頼母のまわりを固めている忍者の動きを知ることが先決である。

主馬之介は、すべてを虚無僧に託したといっても、不安が完全に去ったわけではない。

(無事にあのご仁が姉を助け出すことができるだろうか?)

もし失敗すれば、その時こそ姉は命をも危うくなってしまうのだ。

主馬之介は、こんな場合に、なんの役にも立たない自身の無力さがむしろ腹立たしかった。虚無僧ほどになるのは凡庸の自分にはできなくとも、衆住兵衛に当てられて気を失うようなことだけはしたくない。

歩きかけていた主馬之介は、ふと人の気配を感じて足を止めた。黒装束が岩の上に立っているのが見えた。

さっき虚無僧が斬った男と同じような装束であった。

黒装束はひらりと岩の上から身を躍らし、滑るように下りていくと、どこかへ消えていった。

(発見されなくてよかった……)

ほっとすると同時に、主馬之介はあの黒装束が頼母の一味であるような気がしてならなかった。

(さっき出てきた岩場のあたりを探せば、彼らの秘密の一端がつかめるかもしれぬ)

そう思うと、主馬之介はじっとしてはおれず、やや間を置いてから、岩場のほうへ足を踏み入れていった。

3

忍者たちと違って、主馬之介には岩場の歩行はかなり困難であった。

月の光を頼りに歩いていると、岩の間から明かりが漏れているのを発見した。権作が捕らえられている魔の岩穴であった。

近づいてみると、中には人の気配はなかった。主馬之介は一歩足を踏み入れてみた。それから一歩一歩奥へ入っていったが、中に入るにつれて岩穴はしだいに大きくなる。

だれかが住んでいるのであろうか？　明かりは大きな部屋の真ん中にあり、その部屋は外部から見えるのである。

明らかに人がいたのは明白であった。その燭台(しょくだい)のそばには蓆(むしろ)が数枚置いてある。

なおも入っていくと格子が見えた。その格子の中に一人の老人がうずくまっていた。

主馬之介の足音に、その老人はぎくっとしたように顔を上げた。

手燭(てしょく)を持った主馬之介の顔を見たとき、老人は大きく目をみはり、

「あ、あなたは……」

自分を押し込んだ黒装束の一味ではないのを権作は感じ取った。

「それより、あなたはどうしてこんなところへ入れられているのです」
「わかりません。ご城代さまのお召しで甲府へ行く途中、黒装束の一団に襲われ、気がついたときにはここへ入れられていたのです。ここへ入ったものは十日のうちには死ぬといわれている恐ろしい穴です」
「いま黒装束がここから出ていったようだが……」
「それです、それがわたしをここへ押し込んだのです。見張りの者でしょう。一人は岩が崩れて死にましたので知らせに行ったものと思います。その錠を石で壊してください。出なければわたしは殺されてしまいます」
「待っていてください……」
　主馬之介は、問答しているよりも、一刻も早くこの老人を出さねばならぬと思った。黒装束が押し込める人物なら、自分とは敵ではあるまい。そう思って、主馬之介は石を拾うと力まかせにたたきつけた。
　がーん……と異様な音が響いていく。石は三つに割れたが、錠はいささかも緩まない。
　音を気にしながら、主馬之介はもういちど石でたたいた。三度、四度……もはや音の響きなど気にはしておれない。
　老人を助け出す、そのことよりほかは念頭にはない。
　老人も気が気ではないらしく、格子に身をよせてのぞいていた。
　十数度目にやっと錠は壊れた。
「早く……」

　身を乗り出してきた老人の手を引いて穴の中を走っていった。
　出口まではいくらもない——
　やっと外へ出たとき、老人は主馬之介の手を逆に引いて、主馬之介が来た道とは逆に岩場を下りていった。
「しばらくここに潜んでいましょう。外へ出れば、甲斐じゅうどんな山奥でも知らないところはないのですから」
　それが権作をこんなひどい目にあわせたのだとはまだ気づかず、城内へ行くのが遅れたことを申し訳ないと思っていたのだった。
　二人のいる場所からは穴の入り口に人が来るのが見える。闇夜（やみよ）であっても空に透かして見えるから、穴への出入りは見逃がすことはない。
　その反面、上から二人のいる場所は見えない。
　なぜすぐ逃げずに、そんなところへ下りていったのか、権作自身あとで考えてもわからなかった。
　すぐ逃げなくてよかったと思ったのは、それからまもなくであった。
　穴の入り口に二人の黒装束が姿を現した。中へ入っていったが、まもなく飛び出してきて、一人がいま来た道を矢のように突っ走っていった。おそらく仲間に知らせに行ったものであろう。
　二人は岩陰に身を隠した。
　一人残っていた黒装束も、やがてあきらめたらしく戻っていった。地理に明るい権作が外へ出てしまえば、さしもの彼らでも発見するのをあきらめねばならなかったのであろう。

四半刻（三十分）ばかり潜んでから、権作はもうよろしかろうといって顔を上げた。
「いまの黒装束は青山頼母という黒平に湯治に来ている者の配下の者たちだが、あなたには心当たりがあるのですか」
「いいや、わたしは何もわかりません。いきなりだったし……黒平に来ているご隠居ならわたしも見たことがあります。いつもやはり江戸の人とかいう老人と碁ばかり打っておみえのようじゃが……」
「はて……頼母はなぜあなたが必要になったのでしょう……あの黒装束には、わたしも危うく黒平から逃げていくところだったのです」
「どこまで行かれるのです。甲州ならどんな道でも知っていますから、お行きになるところまでご案内いたしましょう」
「行くところはありません。ゆえあって、黒平に近くて人目につかない場所へ行きたいのですが……」
「わたしも当分は家へは戻れませんから。よろしければわたしとごいっしょには……」
「どこか身を隠すところがあるのですか」
「いくらでもございます。甲斐という国は山が多いので、身を隠すには不自由はございません。地理のわからぬ人が踏み込めないような場所も知っています」
「では、お願いいたします……」
「おいでなされませ……」
権作は先に立って歩きだした。岩場が尽きて、道は林の中に入る。権作は道を通らずに林の中

へ踏み込んでいった。
しばらくして、権作は話しかけてきた。
「わたしがあなたのお顔を見たとき驚いたのをご存じですか……」
「黒装束の一味と思われたのでしょう」
「違います。わたしはもうあきらめていたのですから、黒装束の一味が来ても驚くことはございません」
「では、なぜ驚いたのですか」
「あなたがあるお方にあまりに似ていらっしゃったからです。四十年前のことですが、わたしの命の恩人は忘れるものではございません。これでも四十年前には江戸へ出かけていったものですよ……」
「わたしがその人に似ているといわれるのか……」
「生き写しでございます。風の便りに聞いた話では、なにか落ち度があって閉門になり、だれかに殺されてしまったということですが……たぶん何かのまちがいでございましょう。あのお方が閉門になるようなことをなさるはずはございません……」
閉門、死……そのことばが主馬之介にはある面影を結びつけた。
「そのご仁の名は……？」
「大番頭までお勤めになったそうですが、水野左衛門尉とおっしゃいました」
「水野左衛門尉――」
「ご存じですか……」

「知っているどころではない。水野左衛門尉はわたしの父だ……」
「えっ……」
「父を殺したのが黒平にいる青山頼母なのだ……」
権作は、その奇遇に、もういちど主馬之介の顔を見るのだった。

水の音

1

頼母は眠っていた。
「たいへんでございます」
重兵衛の声に、頼母は夢を破られた。
「不吉なッ！……」
と、不機嫌さがその眉宇ににじむ。
彼はいままで彼にとっては楽しい夢を見ていたのだった。あした、なにげないふりで重兵衛と湯治場を出て、権作を押し込めている石室に行くことになっていた。もちろん、権作に絵図面の場所を教えさせ、案内させるつもりであった。
頼母はその夢を見ていたのだった。
権作は意外に頑強に場所を教えることを拒んだ。石牢に入れたことを怒っていたのだが、それも再三の拷問によってついに口を割ったのである。
ところが、そこは人が足を踏み入れるのをためらっている場所で、帰らずの森と呼ばれ、足を踏み入れた者で帰った者はいないという。
しかし、その権作も、重なる拷問の苦痛に屈して、案内するといった。
一日おいて、権作の体が回復すると、その場所へ向かって、重兵衛を供に出向いていった。一万両といえば重量もかなりあるので、ひそかに忍者数人に後をつけさせていった。
忍者たちは、自分の通った道には彼ら特有の目印をつけていくので、帰路は権作を必要とはしない。場所さえわかれば、ただちに権作を消し、あとは配下の忍者たちによって江戸へ運び込むつもりであったのだ。
権作は、それからまる一日を歩いて、とある小高い頂を指さした。
「あれが絵図面の場所でございます」
「このあたりは、図面にも何もかいてはない。ただ真ん中に沼らしいものがあり、その横に木が一本あるが、これに見覚えはないか」
「一度だけでございますが、たしかに沼がございました」
「あったのか――」
「しかし、その沼に行くのには道がかなり険しゅうございます……」
「どんな場所だ……」
「たしかに、木のそばは岩ばかりで、わたしが押し込められた石室のようなものがございました。中はかなり深うございます。わたしは恐ろしくて中へ入ったことはございません。入り口に立つ

と、穴の中でごうっという風の音がしております。その気味の悪さといったら……」
「それだ。それに違いない……」
頼母は重兵衛を振り返ってにこっと笑った。やっと一万両を手に入れることができたという喜びを抑えきれなかった。
重兵衛の声に夢を破られたのはその時であった。
頼母はそれが不吉な前ぶれのような気がした。もう少しで手に入るという寸前に夢を破られたのが、現実を意味しているように思えてならなかった。
「何事だ、今ごろ……」
「はい。実は……」
と重兵衛は口ごもって、思い切ったように、
「権作が逃げました……」
「なにッ……」
頼母はがばと跳ね起きた。
「見張りはいなかったのか……」
「二人つけておりました。一人は岩が崩れて死にましたので、残る一人がその報告へ戻ってきた間の出来事でございました」
「石牢は老人で破れるほどのもろいものか」
「いや、三寸格子の頑丈なものですから、とうてい中からは破れるものではございません」
「それなら逃げ出せる道理はあるまい」

「錠が壊されておりました」
「なにッ……だれかが助け出したと申すのか」
「それ以外には考えられません」
「見当はついているのか」
「まったく……しかし、きょう宿へ来た若い武士が主馬之介であるとしたら、あるいは……」
「若い武士……？　そんなものが来ていたのか」
「はい。花田小次郎と名のっておりましたが、怪しいと思い、それとなく目を離してはおりません。先刻、抜け出していったので、一人あとをつけさせております。まもなく何かの報告が参るものと思いますが」
「まずいことをやってくれたな……」
と、頼母は眉をひそめる。
「手配はしておきましたので、権作はやがて発見されるものと存じます」
「たわけ。相手は甲斐の地理に詳しいのだ。外へ出せば見つけ出すことはかなうまい。どうやら、こんどのことは失敗であったらしい」
「気を落とされるには早うございます。もう少し報告を待っていてください」
主馬之介の行方さえわかれば、なんとか打つ手段はあると重兵衛は思っていた。その考えが甘かったと気づいたのは、それからまもなくのことであった。
「報告が参ったようでございます……」
重兵衛が人の気配を感じて縁側へ行くと、一人の忍者がうずくまっている。

「権作の行方はわかったか……」
「まだわかりませぬ。が、主馬之介らしい男の跡をつけていった者が、この向こうの丘の木立の中で死体となって発見されました」
「なにッ……」
重兵衛もさすがに顔色を変えた。
「失敗したのか……」
これで二度目である。配下のてだれ者が三人犠牲になったのだ。それが事実とすると、主馬之介という人物について根本から考えを改めねばならぬ。
死人に口なしという。虚無僧の存在を知らない彼らにとって、主馬之介以外の人物を考えることはできなかった。
「重兵衛、やはり主馬之介であったな……」
頼母が吐き捨てるようにいった。
「主馬之介がこれだけの腕前だということを見損なっていたように思います」
「わしたちは主馬之介に踊らされているような気がする。ばかばかしいことだ」
「しかし、黒平から遠く離れるということはございますまい」
「策があると申すのか」
「一つだけございます……」
言いかけた重兵衛は、
「だれだッ！」

と、声を投げていた。

2

廊下の足音が止まったのである。
「兵衛にございます。なにかあったのでございますか……」
頼母は眉をひそめ、
「なんでもない。気にするほどのことではない」
といった。兵衛の足音は遠ざかっていったが、彼は頼母の部屋から、だれだッと叫んだのが頼母ではなかったのに気づいていた。
(何者であろう。こんな夜中に、二人で何を話していたのか——)
頼母の秘密の一端をのぞいたような気がした。頼母がこんな山の中へ来たのは単なる湯治だけではなかったようだ。
やはり松平壱岐守から頼まれた絵図面がその謎を持っているような気がする。
兵衛の部屋の窓からは、頼母の部屋の出入りを見ることができる。
兵衛は、窓の障子をすこし開けて、その間から根気よく見つめていた。
絵図面——それがどれだけの意味を持っているものであるかはわからない。が、壱岐守はそれに一千両もの大金を投げ出すという。
甲府城代ではあっても、一千両の大金をおいそれと投げ出せるものではない。絵図面にはそれ以上のものが隠されているのではあるまいか。

兵衛は、壱岐守が一千両を渡すといったのは、自分を味方に引き入れるための空手形ではないのだろうかと思った。

絵図面を取ってくれれば、一千両の代わりに死を与えようとするのではあるまいか。そうだとすれば、うかうかとその手に乗るのは愚かなことだ。

兵衛は、早苗に一刻も早く絵図面を盗ませるために、主馬之介を利用してみようと思った。主馬之介を捕まえるのは造作はない。彼が早苗の弟であるのを知っているのは自分一人であり、夜が明けたら主馬之介をおびき出してどこかへ押し込め、その命と引き換えに早苗に絵図面を奪わせるのだ。これならば早苗もいやだとはいいきれまい。

絵図面を奪っても壱岐守に渡さず、その絵図面の持つ意味を白状させる。絵図面へ対する執心からみても、それを白状させる自信はある。

白状させ、謝礼をもうすこし引き上げておいて姿を隠す。絵図面さえ手にあれば、もうこっちのものだ。

壱岐守からもらった五十両で、当分は不自由なく身を隠すことができるのだ。そうなれば早苗の心も変わらないとはかぎらぬ。

兵衛は、そんな夢を描きながら、根気よく頼母の部屋をのぞいていた。

眠気もまったく感じられない。

頼母の部屋では、頼母と重兵衛は無言で向かい合っていた。ややあって、

「兵衛に気づかれたのはまずかったな……」

「まだわたしだとは気づかれてはおりませぬ。しかし、わたしは、甲府から戻ってきてからの兵

衛の行動は不審に思えてならないのですが……」

「わしが動くのが気になるとみえる。まさか甲府で壱岐守と会ったのではあるまい」

「壱岐守につけていた者が殺されましたのではっきりしたことは申せませんが、兵衛が泊まったところがわかりません。小料理屋で暴れているのをとめに入った武士と二人で出かけていったことまではわかっておりますが」

「その武士の素姓は――」

「それもわかりません。おそらく甲府詰めの者ではないかと……」

「それが事実であれば、壱岐守と会ったとみて差し支えはあるまい。とかく欲には転びやすい男ゆえ、油断だけはできぬが……」

「そのうち馬脚をあらわしましょう」

「壱岐守もあせっているものとみえる。兵衛を使って絵図面を盗み出させようとしているのだろうが、そのくらいのことを見抜けないわしと思っているのか……そのうち壱岐守の泣き面を見せてやろう……」

頼母は自信があった。

「重兵衛――権作を奪ったのは壱岐守とは思えないか――」

「いや、それは違いましょう。壱岐守も昇仙峡において権作を捕まえようと数人の者を伏せておりましたが、わたしたちが途中で奪ったので慌てておりました。あの石室は気づきますまい。土地の者はひどく恐れておりますから」

「しかし、かぎつければ奪い去るに違いない」

「足跡は二人のもの。一人が権作であれば、いま一人は主馬之介に紛れもありませぬ」
常に意表をつく主馬之介の存在が重兵衛にも不気味でならなかった。

3

ちょろちょろと水の音がする。
筧（かけひ）を通って落ちてくる水の音であった。山峡の夜を、その筧の水の音がいっそう静かなものにする。
「重兵衛——」
「なんでございますか……」
腕を組んでいた重兵衛は顔を上げた。
「主馬之介の行方を一刻も早く捜し出さねばなるまい。同時に、権作の行動からも目を離してはおけぬ。主馬之介はともかく、権作のほうは近いうちに壱岐守のところへ出向いていくかもしれぬ」
「行きますか——」
「必ず行くと思うな。領民というものは領主には弱いものだ。領主から褒められれば喜ぶものだ。その点、壱岐守は心得ている。権作が城代のお召しと聞いて、すぐ出かけていったのもそのため。如才ない壱岐守は、それとなく褒美を与えると耳に入れていたに違いない。権作は壱岐守をいささかも疑ってはいない。われらが捕らえなくとも、壱岐守の配下によって同じ運命をたどらされることになっていたとは気づいていてはいない」

「しかし、助け出したのが主馬之介だとすると、すでに耳に入っているかも……」
「主馬之介が壱岐守が絵図面をねらっているということを知らなかったらどうする」
「なるほど……」
「おそらくそこまでは気づいてはおるまい。さすれば、時期を見て壱岐守に会いに行き、何者かにさらわれたことをいうだろう。壱岐守はむろん権作をどこかへ隠してしまう。そうなれば奪い去るのは容易なことではない」
「やはり、その前に、主馬之介のほうをなんとか誘い出す方法を考えてみなければなりませんな」
「策はあるか——」
「一つだけ……しかし、主馬之介が乗ってくるかどうかはわかりません」
「申してみよ」
「早苗を捕まえるのです。権作を押し込めていた石室がいいかもしれません。見張りは一人にしておき、主馬之介がその気になればすぐにでも助けられるように見せかけておくのです。入り口には数人を隠しておきます。二日や三日、身動きもせずに潜んでいることは、配下の者たちならばさして苦痛ではなく、だれでもできることでございます」
「主馬之介がやって来たら……」
「すでに三人を殺されておりますので、斬（き）ろうとすると逃がすおそれがないとは申しません。主馬之介が石室の中へ入ってゆけば、その入り口をふさぐのです」
「ふむ……」
「それで二人とも出ることはできません」

「中には水があるので、それで生き延びれるぞ」
「水で命はつなげますが、十日もすれば動くことはできなくなるでしょう。そうなってから石を取り除けば、いくら非凡の剣客でも斬るのは造作ございません」
「二人の命を奪うのはそれでもよかろうが、権作がいっしょに入っていったときはどうする。二人は消えても差し支えはないが、権作はどんなことがあっても生かしておかねばならぬ人物だ。ほかに人を探すのは簡単にはいかぬぞ」
「わたしが案じているのはそのことでございます。権作も相当の年ですから、十日の間、水だけで命がもつかどうか――」
「ほかに策はないか――」
「それでいけなければ、もう一度考えてみましょう。早苗がこちらの手にある以上、何度でも主馬之介をおびき寄せることはできます」
「早苗はわしたちが知っているのを気づいてはおらぬから、当分いままでのとおりにしておけ。目だけは離さぬようにな……」
「心得ております」
頼母はふと思い出したように、
「いま気がついたのだが、早苗は兵衛を味方につけているのではないのか。兵衛は早苗を追いかけていた。並々の執心ではない。身をまかせるということで、味方につかぬともかぎらぬ。そのことを一応、考慮においていてもらいたい」
「ご期待にそうようにいたします」

重兵衛はお休みくださいといって部屋を出ていった。さっき兵衛が来てからかなりの時間が立っているので、いいころあいだと思っていたのだが、それまで根気よく待っていた兵衛は、
「あっ……」
と、思わず小さな叫びをあげた。
出てきたのは意外にも重兵衛ではないか。さっきの声は明らかに重兵衛のものでなければならぬ。しかも、あの時の呼吸は材木問屋の隠居のものではない。
（ご隠居は重兵衛にすべて連絡させていたのか――）
いまやっとそのことに兵衛は気づいた。
そのころ早苗は、そんなことがあっていようとは思わず、夢の中であった。

落葉の章

1

東天が白みはじめると、頼母はもう起き出してきた。ゆうべはろくに寝てはいないというのに、それらしい様子は頼母の顔には見えなかった。
重兵衛は頼母が湯から上がったときに起き出してくるのが常であった。
まだだれも起きてはこない。江戸から連れてきた者たちにも、朝はゆっくり寝るように命じてあった。

頼母は、朝のすがすがしい山の空気を楽しむように、しばらく白んでくる連山を見つめる。
黒富士と木賊峠（とくさとうげ）の間から、はるかに八ガ岳の連峰がのぞまれる。それにつづいて、信濃（しなの）との境に連なる金剛岳、朝日岳、国師ガ岳の連山が並び、目をかえせば、富士の麗姿が朝の日ざしにひときわ高くそびえ立っている。
もう小鳥がさえずっていた。
頼母は、庭といっても自然のままのものだが、落葉を始めた雑木林をひとまわりして戻ってくると、筧（かけひ）の水で顔を洗い、口をすすぐ。
江戸にいるときは自分から立って洗いに行くことはないのだが、黒平に来てからは、ずっと朝は一人でやった。
江戸ではまだ夏の名残がのこっているのだが、ここでは朝夕はもう冬を感じさせることも珍しいことではない。
筧の水は冷たかった。顔を洗うと眠気がきれいにぬぐいとられていくのが自分でもはっきりわかる。
頼母はそれからゆっくり湯につかる。湯殿へ引き返してくると、
「おはようございます」
早苗が手をついた。いつものことである。
「朝の湯というものは老人には楽しいものだ。といっても、若いそのほうにわかれというのが無理な話かもしれぬな」
頼母は、微笑して衣類を脱ぎ、湯殿へ入っていく。粗末な湯殿だが、窓から山の姿が見通せる

ので爽快（そうかい）な気持ちになる。
早苗はそっと衣類を改めようと思ったが、頼母から見える位置にあるので身動きができなかった。
「早苗……」
「は、はい……」
「気分がすぐれぬようだな。江戸が恋しくなったのであろう。無理もないことだ。江戸と違って毎日山ばかり見ている生活は、若い者にはつらいであろう。兵衛のやつ、気が狂いそうだといいおったわ。甲府へやってからはだいぶ気持ちも落ちついたようだが、女の身では一人で甲府にやることもできぬ。そのうち甲府へでもみんなして息抜きに出かけてみよう」
「水が変わったせいか、なんとなく気分が……」
「ははは、湯治場へ来て、健康な者が病になるとは困ったことだ」
「病と申すほどのことではございません……」
いまならば頼母の衣類を改めることができるのだ。絵図面は必ず身につけているに違いない。みんなが起き抜けてこないうちに奪い取って、主馬之介に渡して、一刻も早くこの場から去らせるのだ。
あせるばかりで、自分を見つめている頼母の目が恐ろしかった。いつも早苗は思う。頼母が何を考えているのか読み取ることはできないのだ。それだけに、あるいは知っていて素知らぬ振りをしているのではないかとも思ってみるのだった。
（けさ奪い取って主馬之介に渡さなければ、せっかくの機会が流れる。兵衛の起きてこないうち

に……）

　早苗の顔は青ざめていた。

「青い顔をしているな。気分がすぐれぬようならば、遠慮なく部屋へ戻って休むがよい」

「大したことはございませんから……」

　早苗は、強いて平静になろうと思いながら、反対にいらだってくるのだった。

　こうしている場合ではない。みんなが起きてくれば、たとえ絵図面を盗み出すことができたとしても主馬之介に渡すことはできない。

　湯から上がれば、頼母はまず絵図面を確かめるだろう。なければ早苗の仕業であることは気づかれてしまう。

　調べられ、早苗が持っていれば、それで今までの姉弟の苦心は水泡になる。どうしても主馬之介に渡さなければ意味はなくなってしまうのだ。

「いい湯だ……」

　頼母のしみじみとした声が、自分の動揺をあざわらっているように早苗は思えた。

「どうした……こんな山の中では医者はいないから、ひどくならないうちに自分のほうで気をつけなければならぬぞ……」

「大したことはございません……すぐ治りますから……」

　いいかけた早苗は、はっとしたように語尾をのんだ。二度も早苗の危機を救ってくれた横笛の音が流れてきたのであった。

2

「あのお方だ……」

　あの時の虚無僧だと思うと、早苗はほっとした気持ちになった。

「ほう。珍しく横笛が聞こえる。なんびとのすさびか、みごとな音色じゃ。あれだけの音を出せるのはそう多くはない」

「…………」

「風流な人もあったもの。やはり、この山峡の朝に横笛を口にせずにはおれなかったのであろう。ひと目会ってみたいものじゃが……」

　頼母もうっとりと聞きほれていた。

　朝の山峡のすがすがしさにはまったくふさわしい清澄の音色であったといえる。

　早苗にはその横笛が虚無僧の存在を知らせてくれているものに思えた。曲は多いのに、三度とも同じ曲である。そのことが、故意に早苗の知っている曲を選んだものに思えてならなかった。

　静かに目を閉じ、横笛の音に聞き入っていた頼母は、目を開いて、

「早苗、引き取るがよい。無理をして寝込むようなことにでもなられては困る――」

「はい。では……休ませていただきます」

　早苗は絵図面を盗むのをあきらめて湯殿から出ていった。

　早苗は虚無僧に相談したいと思ったのであった。主馬之介のことも気になるが、いますぐ連絡することは人目があり、兵衛が主馬之介をあばいてしまうとは思えないので、その前に虚無僧と

会いたかった。
　顔も知らない人に助けを請うのは厚かましいことであろう。が、今の早苗には虚無僧に頼るよりほかはない。
　重兵衛が起きてきて、
「早苗さま、おはようございます」
　と、声をかけた。
「おはようございます」
「お顔の色がよろしくないが……」
「少し気分がすぐれませぬので、しばらく休ましていただこうと思い……」
「それはそれは……お大事に……」
「失礼いたします――」
　早苗は逃げるように部屋へ戻ると、重兵衛の姿が湯殿へ入っていってからそっと抜け出していった。
　笛の音に兵衛が気づいているのではないかと思ったが、兵衛の部屋からは心地よさそうないびきが聞こえていた。
　早苗は木立を突っ切って笛の音のほうへ歩いていった。
　横笛は依然として続いている。かなり遠いものであったが、早苗は笛の音を頼りに歩いていった。
　はたして笛を吹いているのは虚無僧であった。

「早苗どのか……」
　虚無僧のほうから声をかけた。
「は、はい……」
「つけられているな……」
　虚無僧はいって、木立のほうへ目を凝らして、
「早苗どのは頼母に素姓を知られているのをご存じか――」
　といった。
「わたくしの素姓が知られているのですか」
　早苗は顔色を変えた。
「甲府で、主馬之介どのに送った手紙を、頼母の忍者が飛脚から奪い取ったのだ」
「えっ……」
「彼らはその手紙を主馬之介どのに届けた。主馬之介どのを小仏峠で消してしまおうとしたのだ」
「ああ……」
　相手を甘く見ていた軽率さに早苗は後悔すると同時に、頼母の恐ろしさをあらためて知らされた思いであった。
「主馬之介どのは、そなたの危険を知らせるために、ここまで危ないのを承知でやって来たのだ……」
「主馬之介が危のうございます。衆住兵衛が主馬之介が来ているのを知っているのです」
「心配はない。主馬之介どのは昨夜のうちに出ていった。わたしの笛の音を聞いて出てきたのだ

が、やはり尾行がついていた」
「主馬之介はいまどこにいるのです」
「当分姿を隠しておくように言っておいたから、そのうちに現れるだろう。早苗どのも二度と戻ってはならぬ」
「でも……わたくしは……」
「いまは逃げること、それだけ考えておればよい。三人ばかり早苗どのの後をつけてきているな。うしろを見るな。わたしの行くとおりに歩けばよい。山峡のそぞろ歩きにはかっこうのすがすがしい朝だ……」
虚無僧は、ゆっくり立ち上がると、はるかな連山の上を流れていく白雲の行方を目で追ってから歩きだした。
早苗は、虚無僧のあとについて雑草を踏みながら、なんとなく虚無僧の温かい心の中が、自分に流れ込んでくるような気持ちがした。

3

ずっと自分の後をつけてきた者がほんとうにあったのだろうか？　頼母が自分の素姓に気づいていたのならば当然のことであろう。
だが、早苗には人の気配は少しも感じられない。
落葉を始めた林の中に踏み入れていくと、樹間から遠く八ガ岳が見える。と思ったのは束の間のことで、深い樹林が果てしなく続く。

どれほど歩いたのか。早苗は時間の記憶はなかった。虚無僧がどこへ連れていこうとしているのか疑ったことはない。いや、そればかりか、こうやって二人で歩いているということに心の安らぎさえおぼえるのだった。
虚無僧は、三人の尾行者があるというのに、冷然たる態度で、一度も振り返ってみようとはしない。
虚無僧は早苗にさえ話しかけようとはしないのである。樹林が尽きると、急に眼前の展望が開けた。
「まあ……」
思わず早苗の口から感嘆の声が出た。
「早苗どの……」
虚無僧は、眼前に開けた雄大な山の景色に見とれているように視線を遠くへ投げながら、声だけをかけた。
「はい……」
早苗は夢から覚めたような声で返事をした。
「つけている三人をなんとか始末しなければならぬ。すこし走るぞ。いいか」
「はい……」
「どんなことがあっても、けっして声を立ててはならぬ……」
虚無僧はそういうと、早苗の手を取って急に樹間に飛び込んだ。
そのまま二人の姿はもつれるようにして遠ざかっていった。

「気づいたぞ……」
　はたして、木陰から三人の浪人風の男が姿を現してきた。
「追えッ……あの虚無僧を斬(き)って、早苗を奪うのだ」
　三人は二人が消えていった樹間へ走りだした。速歩ということに幾年ものあいだ鍛えている彼らと、女連れでは、その結果は当初から明白である。
　虚無僧ほどの男がそのくらいのことに気づかなかったのであろうか。
　しかし、後を追った浪人たちは、まもなく小首をかしげながら足を止めていた。
「遠くへ行くはずはない。このあたりに潜んでいるのであろう。見つけ出して虚無僧を斬れッ！」
　吐き捨てると、三人は三方に分かれて捜しはじめた。
山峡の樹木は落葉が早い。平地よりも早く冬が訪れてくるからだ。
　わずかの音も聞き逃すはずはない彼らであるだけに、発見は時間の問題であった。身を隠すにも木陰を利用するよりほかにはないのだ。
　早苗は身を伏せて息をひそめていた。浪人たちの足音がすぐ近くでしている。左手は虚無僧にあずけたままだ。
　虚無僧にすべてを任せている。それだけで危険にさらされているという気持ちは不思議にわかなかった。
「早苗どの、ここから動くなよ……」
　耳元でささやき、虚無僧は早苗の手を振りほどいた。彼の右手は脇差(わきざし)の柄(つか)へかかっていたのだ。
　浪人の一人が二人のほうへ落ち葉を踏んでくる。

　その足音が近づくにつれて、早苗は自分の五体が硬直していくのを感じた。
　浪人は、二人には気づかず、近寄ってきたが、ふと足を止めた。二人の存在に気づいたのである。
　そのせつな——
　虚無僧の五体は大きく飛んでいた。

4

「ううっ……」
　浪人は刀の柄に手をかけたが、抜き合わせることもできず、肩から深々と一刀を浴びてつんのめっていった。
　虚無僧はその時を待っていたのであった。相手が相手だけに、一刀で仕留めなければ、仲間が集まってくるのを恐れたのだ。
　虚無僧が飛び出したのはまったく機を見るにみごとだったといえる。浪人が近づいてきて、人の気配にぎょっとしたせつな、立ち直る時間を与えずに一刀を浴びせたのである。
　鮮血が折からの朝日に鮮やかな朱を爽空(そうくう)に散らせた。
「いたぞッ！」
　二人が抜刀して一気に駆け寄ってきた。その時には虚無僧はすでに十分の余裕をもって二人を待ち受けていた。
「名のれッ！」

浪人は切っ先に仮借もない殺気をにじませながら叫んだ。
　虚無僧は天蓋の中から二人を静かに見つめながら、
「ご覧のとおりの流雲の身、名のるほどの者ではない。人の名を尋ねるときは自分のほうから名のるのが礼儀だとは習わなかったのか。もっとも、忍者には礼儀などというものはなかったかもしれぬ」
「おのれッ！」
「青山頼母の飼い犬と見たが……」
「斬れッ！」
　一人が叫んで、つつと左側から詰め寄ってきたが、刃圏外で踏みとどまっていた。左側から牽制し、右側の男が同時に踏み込む。彼らのよく用いる手段であり、彼らの場合、衆は個としての行動になる。特に相手が強敵の場合、個々に斬りつけていたのでは、その遅速が相手にとっては思う壺になるのを百も承知している。
　衆が衆としての力を発揮するためには、その行動は個としてのものでなければならぬ。すなわち、一糸乱れぬ統制によって動かなければならない。
　二人の場合においても同じことがいえる。
　斬ろう、と思いながらも、二人は虚無僧の冷然たる態度が十分の自信をもって二人の斬りつけるのを待っているように思えて、うかつに踏み込むことができなかったのだ。
　早苗は——心の中で、虚無僧の無事を念じながら、目を閉じていた。見たいのだが、見るのが恐ろしくて目を開いていることができなかった。

　林の中では無言の対峙がしばらく秒刻をきざんでいた。
　梢をそよがせる風の音を、虚無僧はじっと聞いていた。二本の刃が自分の命をねらっているというのにいささかも動じないのは、それだけの自信があるのか。
　浪人はしだいにあせりを生じてきた。
「なんの……」
　不気味さをはね返すように腹のうちで叱咤し、切っ先に意志を動かそうとするのだが、思いきって行動には出られなかった。
　三人だけで追ってきたのはまずかったと思う。万一の場合のために、助勢の連絡だけはつけておくべきであった、と今にして切歯したが、ここまで来てはどうすることもできない。
　連絡するには方法がないではなかった。煙玉を使用すればよかった。煙の色で、遠く離れた仲間へ意志を通じることはできる。
　駆けつけてくるまでにはやや時間がかかるが、それまでなんとかして時間を稼いでおけばよい。この不気味な虚無僧を斬ることは難しいかもしれぬが、斬られないように時間を稼いでいることは至難ではない。
　しかし——
　今は、それさえあきらめねばならなかった。煙玉を使用するのに、一人だけで虚無僧を牽制することが不可能であるのを知らねばならなかった。
　時が流れれば自分たちのほうに不利になる。いつまでも虚無僧が静止を保っているとはいいきれまい。

このままでは明らかに目的を果たすことはできぬ。それは二人とも同じ考えであった。

左側にいた男が自分が牽制するといわんばかりにつつと間合いを詰めると、さっと陽光を裂いて斬りつけた。

彼らの手段では、その間に一人が飛びすさり、煙玉をたたきつけて仲間へ知らせる予定であった。そのために、虚無僧が左方の浪人の刃を避ける一瞬の秒刻が必要であったのだ。

だが——一瞬後には、彼らは自分たちの失敗を知らずにはおれなかった。

虚無僧は、斬りつけた浪人は無視して、右方の浪人が飛ぶと同時に自分も飛んでいた。斬りつけた男がむなしく虚空を裂かねばならなかったのはいうまでもない。

煙玉をたたきつけようとした男の右手が二の腕から両断されて、落ち葉の中へ飛んでいった。

「しまった……」

声にならぬ叫びが斬りつけた男の口から漏れたとき、翻転した虚無僧の刃はその男の肩口から血をしぶかせていた。

虚無僧はそれから片腕を落とされて落ち葉の中を転げまわっている男へ近づいていった。

逃げることはないとみて、もう一人の男のほうへ向かっていったのは、この場合、適切な処置であったといえる。

虚無僧はじっと見下ろしていたが、

「頼母のような男に雇われたのを不運とあきらめてもらおう。忍者なら忍者らしく、自分で自分の始末をするように教えられているはずだ」

そう浴びせて、すでに絶命しているもう一人の男のそばを通って、

「早苗どの……もう大丈夫だ」

と、優しく声をかけた。三人を斬ったとは思えない落ち着いた声であった。

夢

1

早苗はようやく目を開いた。

「不憫(ふびん)だが、斬(き)っておいた。今の場合、こうするよりほかになかった」

「わたくし、あなたさまが来てくださらなかったら、どんなことになっていたかもしれませぬ。どうしてわたくしたちのためにこれほどまでにしていただけるのかお教えくださいませ」

早苗はそういって虚無僧の顔を見たが、天蓋(てんがい)に隠れて見えなかった。

「いまは何も聞いてくださるな。ただわたしの気まぐれの行為だとしておこう。けっしてそなたたちにとって不利なことをするような男ではない」

「それは信じております。けれども……」

なおも追いすがるような眸(ひとみ)でいいかけようとする早苗を制して、

「行こう……」

と、虚無僧は歩きはじめた。

「お名前をお聞かせくださいませ……」

「名のってみても心当たりはあるまい」
「でも、あなたさまのお名前だけでも……」
「春之介とでも覚えておいていただこうか」
（春之介さま……）
早苗はそっと口の中で呼んでみた。その名前が本名であろうとなかろうと、べつに気にはしていなかった。ともかく、虚無僧の名を知ったということだけで、それだけ二人の距離が近くなったような喜びが、あるほのかな思いとなって胸の中へ広がっていった。
もう後をつけてくる者もいない。こんどこそ二人だけになれたのだ。
早苗は春之介のあとに遅れないようについていきながら、
「春之介さま――」
と呼んでみた。
「なんだ……」
春之介は静かに早苗のほうを見た。
「どうしていつも天蓋をお取りにならぬのですか」
「虚無僧が天蓋をかぶっているのはあたりまえのことだ」
「わたくし、妙に思ったことがございます。春之介さまはいつも横笛ばかりで、尺八を手にされているのを見たことはございません」
「つい横笛のほうが好きなもので手にしてしまうのだが、尺八も伊達に持っているのではない。あの木陰で一曲お聞かせしよう。見晴らしもよい……」

春之介はそういって樹間に踏み入っていき、
「早苗どのはそこに掛けるがよい」
と、切り株をさした。言われるままに早苗は腰を下ろした。その横で春之介は落ち葉の上に腰を下ろし、尺八を取り出して唇につけた。
やがて……喨々たる尺八の音が流れだした。その二人の頭上を、小鳥が二羽並んでよぎっていった。
早苗は、いまは何もかも忘れて、春之介の奏でる尺八の音に耳を傾けていた。きょうも高く澄んだ青空が頭上にある。早苗は、ふと、いつかはこの春之介と別れねばならないのではないかと思った。すると、急にある寂しさがどっと五体を包んだ。やがて別れねばならない縁ではあっても、自分にはそれを望んではいけないのだと、己をしかった。今の幸せだけで満足していなければならないのだ。束の間の夢、やがて消えるうたかたの夢であろうとも、この思い出だけを自分の胸にしっかり秘めておこう。
早苗の心の中を知っているのか知らないのか、春之介は己がいま尺八を奏していることすら忘れたような態度で無心に没我の境にあった。
奏し終えて春之介は、
「わたしは尺八よりは横笛のほうが好きなのでな……」
と笑った。
早苗はあわてて、

「でも、春之介さまの横笛は、お姿に似つかわしくはございません」

「ほう……」

「わたくし、はじめてお聞きしましたとき、公達(きんだち)が月夜の風流を楽しんでいらっしゃるのかと思いました」

「京ならばそうだろうが、江戸では公達ではあるまい」

「お大名のご子息のすさびかと……」

「早苗どのも案外口がうまい。見て汚いわたしだったので、がっかりしたといいたいのであろう」

「いいえ、そんな……ひどうございます。そんなつもりで申し上げたのではございません」

真っ赤になって早苗はいった。その目ににじんでいる涙を見ると、春之介のほうが慌てて、

「口が過ぎたら謝る。早苗どのをいじめるつもりで申したのではない」

言い訳して天蓋を取り、

「いい朝だ。山の朝というものはいつ来ても心の中まで洗い流してくれるような気がする」

とつぶやいた。

早苗は春之介の顔が急に見ることができなかった。いまやっと顔を見せてくれた。見ようと思いながら、まぶしくて顔を上げられなかった。

ようやく早苗はそっと春之介の横顔を見たとき、このお方はやはりただの虚無僧ではあるまい、と思った。

二十四、五であろうか。春之介の顔はひどく気品があり、その生まれがかなりの身分であるの

を明白に物語っているのだ。

人にはどうしてもぬぐいきれない生まれのいやしさがある。と同時に、いくら身を落としても消えない気品があるものだ。

春之介の虚無僧が人の目をあざむくためのものでないとすれば、その血はある高貴の血を受け継いでいる者であろう。

「早苗どの……」

「は、はい……」

名を呼ばれただけで、早苗の項(うなじ)は真っ赤になってくる。

「頼母から絵図面を盗み出すのはまず難しいかもしれぬ」

「では、どうすることもできないといわれるのですか……」

「いや、絵図面を奪うのはあきらめても、それが頼母の思いのままにするというわけではない。頼母はやがて絵図面を頼りに動きだすに違いない。当分の間はそれを待っているのだ。下手に動くと相手の思う壺(つぼ)だ。頼母の動きはわたしが見張っていよう。早苗どのはわたしが連絡するまで身を隠しているがよい。少しは不自由であるかもしれぬが、辛抱してもらおう……」

「一人で待つのですか……」

「うむ。気のいい老人夫婦がいる。よく話してあるから案ずることはない。ただし、けっして家の外へは出ないことだ。そのうち主馬之介どのもいっしょに住んでもらうことになる……」

「お願いいたします。主馬之介のことだけは……」

「わたしに任せておいてもらいたい」

「姉弟そろってお役に立たず、足手まといにばかりなって……」
早苗は自分たちの苦労がなんの役にも立たなかったのを知っていた。今までに何度も危機にさらされたのも、春之介がいたからこそ無事に切り抜けることができたのだ。その感謝の念が恋に変じつつあるのを、早苗はまだ気づかないのだ。ただ、春之介と離れたくないという気持ちだけは、抑えるのに努力を要することであったが——

2

そのころ——
頼母は、朝餉を終えて、また重兵衛と碁を打っていた。
兵衛は、起きてすぐ早苗の姿が消えているのを知って尋ねてみたが、だれも知らないという。頼母に尋ねてみると、
「早苗はもうここへは戻ってはくるまい」
碁盤から目を離さず頼母はむっとした表情でいって、
「それは待ってもらいたい」
と、いま重兵衛が打った黒石を取り上げた。
「これで二度目でございますよ。待って差し上げます。お約束は三度でございますから、もう一回だけということになります。よろしゅうございますか」
重兵衛はにやっと笑った。黒石を握ってはいるが、実力は重兵衛のほうが三目は上だということである。

こうやっているところを見ては、単なる湯治場で知り合った客同士としか見えなかった。
「早苗どのは江戸へでも帰ったのですか」
兵衛は頼母が慌てないのが不思議でならなかった。
「死んでいるか、生きているか、まもなくわかる。早苗を連れてきたのはわしの失敗であった。兵衛はなぜそのように早苗のことになると夢中になるのだ」
「べつに気にしているわけではございませんが」
「死体になっていたら、そのほうにくれてやろう。それまで待っているがよい」
「なにか不届きなことでもあったのですか」
「何もしない者ならとがめだてはせぬ。碁の邪魔になる。向こうへ行っておれ」
その間、頼母は一度も兵衛を見ようとはしなかった。見ていれば青ざめた兵衛の顔がわかったはずである。
兵衛は早苗が絵図面を盗み損なったのであろうと思った。盗んで逃げたのならば、頼母がこれほど落ち着いていることはあるまい。とすると、早苗は失敗して逃亡したのに違いない。
（まずいことになった……）
これ以上深く尋ねて怪しまれてはと思い、兵衛は退出していった。
重兵衛が頼母の配下であると知ったのはよかったが、そのあとで眠っている間に、主馬之介は逃げ、早苗は失敗してしまった。
（昨夜のうちに主馬之介をどこかへおびき出して捕らえておけば、もうすこしなんとかなっていたのかもしれぬ……）

せっかくうまくいきそうだと思っていたのに、功をあせった早苗の軽率さが腹立たしくなる。
昨夜のけさだ。そうあせらずとも、ゆっくり機会を待てばよいものを、一度失敗すれば二度と機会はなくなるということが早苗にはわからなかったのだろうか。
早苗一人の失敗ではすまされぬのだ。頼母は警戒を厳重にするだろうし、兵衛の行動も封じられることになる。
(ばかなやつだ……)
と、兵衛にはあきらめきれなかった。
兵衛は早苗が死んでくれるのを願った。万一捕らえられ、自分が絵図面を盗ませたのを白状するようなことにでもなれば、兵衛の命はない。
兵衛は早苗にはじゅうぶんに未練があった。が、こうなってはそんなことは考えてもおられない。一刻も早く早苗の始末をつけておかなければならぬ。そう思いながら、出ていくのは頼母に怪しまれてはならぬので、じっとしていなければならぬのだった。
兵衛は、落ち着かなかった。早苗が捕らえられればすぐ逃げ出すよりほかにはない。待っているべきか、いますぐ逃げ出すべきか、迷った。
そっとのぞいてみると、頼母と重兵衛は碁に夢中になっている。
しかし、兵衛はついに待っていることはできなかった。壱岐守からもらった五十両がまだ手をつけずにそのまま残っている。その五十両を懐中にすると、散歩に行くような振りでそっと抜け出していった。

3

「遅いな……」
思い出したように、頼母がぽつりと吐き捨てた。
「どこへ行くのか突き止めてくるように言いつけてはありますが、もし逃げるようならば捕らえてくることになっております。もうしばらくお待ちください」
「それにしても遅すぎる。報告があってもよいと思うが……」
「三人をやっておりますから、一人は報告に戻ってくるはずです」
重兵衛はそう答えたが、内心では不安を感じていたのだった。三人を尾行させているのだから、よもや早苗を見失うことはあるまい。
なにか変事があれば煙玉で知らせてくるはずである。それもない。
彼らは、尾行するときも、自分の歩いた道には必ず目印をつけていくので、引き返して報告に戻った者が、追いつくのはさして難しいことではなかったのだ。
重兵衛はじっとしておれなくなったとみえて立ち上がった。
「様子を見に行かせてみましょう」
「うむ。主馬之介と連絡を取っているのかもしれぬ。二、三人やってみよ。主馬之介にはすでに三人が殺されているのだ」
頼母はまだ主馬之介の仕業と思い込んでいた。
重兵衛は部屋を出ていくと手代を呼び、

「早苗を追っていった三人が戻ってこない。すぐ二、三人に跡を追わせてもらいたい」
　命じて、なに食わぬ顔で戻り、また頼母と碁を打ちだした。
「兵衛と早苗はなにか連絡をとっていると思っていたが、さっきの兵衛の態度では何も知らないようだ。兵衛もいちど試してみる必要がある。壱岐守と気脈を通じているのならば、ねらっているのはわしが持っている絵図面ということになる。甲府へやってみよう。後をつけさせるのだ。念のために二人をつけてやろう」
「いますぐでございますか」
「うむ……」
「人がおりません」
「いないとは……?」
　けげんな面持ちで頼母は尋ねた。
「十一人を連れてきましたが、小仏で二人殺され、甲府で一人、そのほかに二人、もう五人が死んでおります」
「ふーむ。六人だけか——」
「そのうち三人は早苗の後を追い、いままた二人が行きましたので、一人だけしか残ってはおりません。その一人も、さっき兵衛がふらりと出ていきましたので、後をつけさせましたから、一人も残ってはおりません」
「兵衛は出ていったのか」
　と、頼母はしばらく考えてから、

「兵衛のやつ、逃げたのに違いあるまい。早苗が逃げたので、自分の身にも危険が迫っているとみて逃げたのだ。それに違いない」
「壱岐守のところへ逃げ込めばすぐ報告が来るはずです。先日のこともありますから、深追いはしないようによく言い聞かせてあります」
「兵衛が壱岐守のところへ逃げ込んだのがわかればそれだけで十分だ。兵衛もばかな男だ。壱岐守からうまく言いくるめられたのに違いない。壱岐守が一万両を手にして、兵衛に分け前をやるものか。命が助かったらそれだけでも拾いものだ」
「そのうち思い知ることでございましょう」
　ぱちりと石を打って、頼母は、
「六人しかいないとは心細くなったな。もう幾人か呼び寄せることはできぬか」
「数日はかかります」
「いたしかたはない。もう少し人数を集めておかなければ、壱岐守にしてやられることになる」
　頼母が恐れているのは、むしろ壱岐守のほうであった。甲府城代の地位を利用して、どんな妨害に出るかわからぬ。
　湯治ということで甲州へ来ているほんとうの理由を江戸へ知らされるだけでもゆゆしき問題なのだ。
　壱岐守があえてそれをしないのは、頼母の手に絵図面があるからであった。

4

「重兵衛、厄介者(やっかいもの)がみんないなくなったので、かえって気兼ねしなくてもよいようになったな」
「皮肉をおっしゃる」
と、重兵衛には耳に冷たいことばであった。
「皮肉ではない。わしがすこし甘かったのだ。だれか戻ってきたようだな」
と、頼母は庭先へ視線を投げた。早苗の後を追わせたのが戻ってきたものらしい。
「これへ……案ずることはない――」
重兵衛の声がかかってから杣男(そまおとこ)が顔を出した。杣男にはなっているが、むろん重兵衛の配下の忍者の一人である。
「わかったか――」
「はっ……十町ほど行った林の中で、三人とも死体になっております」
「なにッ！」
頼母もさっと顔色を変えた。重兵衛も緊張の色を浮かべた。
「二人は袈裟(けさ)がけに一刀で事切れ、一人は片腕を落とされて死んでおりました」
「早苗の行方は……」
「わかりません……」
杣男は、去れと重兵衛の合図を待ってから、消えていった。
二人はしばらく無言であった。

頼母は相手が意外の強敵であったことに対する驚きに啞然(あぜん)となっていた。
重兵衛は三人に煙玉を投げる余裕を与えずに斬り捨てた手練に対する驚異であった。あの場合、必ず煙玉を投げて時間を稼ぐに違いない。それを忘れるような三人ではなかったはずだ。それをさせなかったのはよほど非凡の相手に違いない。
「主馬之介であろうか……」
それよりほかには頼母には思い当たることはなかった。
「違いましょう。主馬之介は早苗の弟ですから、まだ若うございます。それに、ちらっと見たところでは、さしたることはないと思われます」
「しかし、昨夜も主馬之介を追っていった者が斬られたのだぞ……」
「それが不思議でならないのです。わたしには姿を現していない強敵が一人いるように思われてなりません。早苗や主馬之介になんらかの方法で連絡を取っているように思われるのですが、お心当たりはございませんか」
「…………」
頼母はしばらく考えていたが、その眉宇(びう)に一抹(いちまつ)の明るさを浮かべた。
「わかった。やっとわかった。そうだ、それ以外にはない。早苗は横笛の音を聞いて逃げ出したのだ」
「横笛――？」
「いつものごとく湯に入っているときであった。どこからともなく横笛の音が流れてきた。たしかにその時、早苗の表情が変わったのを知っている。みごとな音色だった……」

「そういわれれば、ゆうべも主馬之介が出ていくとき横笛の音が聞こえていました。主馬之介と連絡を取っていたと思われないこともございません」
「すると、次々に斬っていったのは、主馬之介ではなく、その横笛の主ということになるが」
「わたしもそう思いますが……」
「敵を欺いているつもりで、こっちのほうが欺かれていたらしい。さすがのわしも、陰の人物がいたとは思ってもみなかった」
「一人か、二人か、あるいはまだいるのか、見当もつきません。大敵であるのだけはわかっておりますが」
「一万両の謎もだいぶ人に知られてきたらしい。絵図面がこっちの手にある以上、人手に渡ることはない。敵が増えてきた以上、権作一人を捜しまわっていることはできぬ。土地に詳しい者を探してさらってこよう。幾人かの中には一人ぐらい知っている者がいるかもしれぬ。そのほうが早道であるかもしれぬ」
「知らない者は……？　いかがしておきますか」
「死んでもらうことだ。生かして帰して口外されるようなことがあれば面倒になる。三人死んだので残るは三人か……甲府のならず者を金で雇ってくることだ。三人いればできないことはあるまい。さっそく手配をしてもらおう」
「かしこまりました……」
うなずいて、重兵衛は部屋を出ていった。

5

重兵衛はすぐ戻ってきて、
「甲府城代よりの使者がみえておりますが」
といった。頼母は当惑げな顔で、
「珍しいこともあるものだ。壱岐守が何を考えて使者をよこしたのか、ともかく会ってみよう。ここへ通すがよい……」
と答えた。重兵衛はその旨を宿の主人へ伝えた。
使者というのは壱岐守の腹心山名三十郎であった。
「挨拶はよい。わしはご覧のとおりの湯治客だ。そのつもりで扱ってもらいたい」
如才なくいって、頼母は三十郎の腹の中を読み取ろうとするようにじっと見つめるのだった。
「実は、壱岐守が申しますには、こんな山の中でさぞ退屈でございましょうから、甲府へお招きして一献差し上げたいと申しております。明日おみえになればと申してはおりますが、こちらのご都合次第で変更いたしましてもいっこうに差し支えはございません。いかがなものでございましょうか」
「壱岐守どのが招くといわれるのか。ありがたいことだ。わしも正直なところ、いささか退屈しておったときじゃ、遠慮なく招きに応じよう」
「来ていただけますか」
三十郎は、おそらく来ないのではないかと思っていたので、かえって拍子抜けがした。

「うむ。せっかくの招きゆえ明日まいることにする。老人のことゆえ何かと造作になるが、旅籠のほうもお願いしておこう」
「その儀ならば手配しております」
「行き届いたことだ。ゆっくりしていくがよい」
「壱岐守が待ちかねておりますので、すぐ戻らせていただきます。では、明日、駕籠を差し向けます……」
三十郎は、待たせてあった馬に乗ると、鞭をあてた。
遠ざかっていく蹄の音を聞きながら、頼母は入ってきた重兵衛に、
「あしたはそのほうたちに思いきって働いてもらわねばならぬかもしれぬ」
といった。
「あしたは行かれるのですか」
「行く。壱岐守の目的はおよそ見当はついている。わしから絵図面を奪い取るつもりらしい。その手に乗るわしだと思っているのか。さんざんもてなした上で、絵図面が手に入らず、悔しがる壱岐守の顔が目に見えるようだ。ははは」
頼母は大きな声で笑った。
「だいぶあせっておるようでございますな」
「権作は途中で消えるし、わしから絵図面を写し取るのが難しいとわかってきたので慌てているのであろう。欲を出さなければ分け前にありついたのに、欲を出したためにもとも子もなくなってしまう。それにもまして、兵衛などというのは、よくよくのばか者に生まれてきたものとみえ

る。邪魔になるようならば、兵衛も消しておかねばなるまい」
頼母はむしろあしたという日が待ち遠しくてならないらしい。
「それから、重兵衛、例の横笛の主だが、このあたりに土地の者でない男の姿を見かけなかったかどうかを調べてみることだな……」
「それならば調べてあります。虚無僧を一人見かけたと申しておりましたが」
「虚無僧か――なるほど、一度調べてみるがよかろう。このあたりに足を入れてくる者は、すべて一応は疑ってみたほうがいいかもしれぬ」
「あしたは大丈夫でございますか。供の者がおりませんが」
「順太郎を連れていこう。役には立たぬが、いないよりはいいだろう」
順太郎というのは兵衛とともに連れてきた若い武士であった。抗うということを知らない男で、黒平にいてもほとんど部屋の中にこもっていた。自分からそうしているのではなく、用があれば呼ぶから部屋におれといわれて、その命令をおとなしく守っている。そのうえ気が小さく、剣術はほとんどできない。
二年前から雇ったのだが、頼母もよほどの時でないかぎり思い出すことはなかった。兵衛がいないので、その順太郎を連れていくよりほかになかったのである。
順太郎を連れていっても、彼になにも望んでいるわけではなかった。ただ、使い走りには役に立つだろうくらいにしか考えてはいなかったのだ。
そのころ――
兵衛は、尾行者を気にしながら、しきりに道を急いだ。目につかないように樹間を縫っていっ

た。蹄の音を聞いたが、それが黒平へ急ぐ山名三十郎とは思いもせず、甲府へ急いでいくのだった。

　頼母が自分さえ信じていないのを知って、兵衛は内心恐ろしくなった。重兵衛を使ってなんらかの動きをやっているのだが、敵を欺くにはまず味方からのことばをそのまま実践している頼母の非情さが恐ろしくなってきた。

　甲府へ着いても、兵衛は壱岐守を訪ねていくのをためらった。

　壱岐守は頼母から絵図面を盗むために兵衛を必要としたのであり、絵図面を盗むことに失敗した自分をはたして心よく迎えてくれるだろうか。そう考えたとき、兵衛はこの五十両を持って消えていったほうがいいのではないかと思った。

　絵図面がどれだけの秘密を持っているにしろ、自分は一人であり、一人の力で頼母や壱岐守らと争っていけるものかどうかわからぬ兵衛ではない。

（逃げよう――）

　いまならどこへでも逃げることができる。兵衛は自分の欲を捨てることによって安全な道を選ぶことにした。

　甲府の城下へ足を踏み入れたが、兵衛は壱岐守を訪ねていくことをやめて、信濃へ出る道をとった。まず信濃へ出て、それから先はあらためて考えてみることにしたのだ。

　結果からみれば、衆住兵衛はそれが幸運であった。壱岐守にしろ、頼母にしろ、どちらへついていたとしても、命を全うすることはできなかったに違いない。

　兵衛は足を速めた。頼母からの討っ手がかからないうちに、できるだけ甲府から離れようと思

った。

6

　主馬之介は権作と杣小屋で朝を迎えた。

「ここならだれも気がつくことはございません。わたしは食べ物を集めてまいりますから、主馬之介さまはどこへも行かずに待っていてくださいまし」

「わたしが行こう。権作は見つかればこんどこそ危ない」

「それは主馬之介さまも同じことでございます。わたしなどはどうなってもかまいませんが、主馬之介さまは大切なお体。それに、山道は慣れない人は迷ってしまいます。もう油断はしておりませんから、二度と捕まえられるようなことはございません」

　ここでもまた自分は役に立たないのだろうかと、主馬之介は自分の非力が情けなかった。

「それにしても絵図面が欲しゅうございますな。甲州のことなら、ひと目見ればどこかすぐわかります。絵図面さえ見ることができれば、むざむざと人に取られるようなことはないのですが……」

　と、ゆうべ主馬之介から聞いた話を思い出して悔しがるのだった。主馬之介から聞いて彼らがどうして自分が必要であったのかようやく知ることができた。同時に、城代が自分を呼んだのも、どうやらそのことに関連を持っているように思えるのだった。

　確かめるまでは城代にも会いたくないと思う。四十年前の恩返しに、権作は姉弟のためにできるだけの力になろうと決心したばかりであった。

権作は、若い折、江戸へ出たことがあった。だれもが考えるように、江戸で成功して国へ戻ってくる夢を描いていたのだ。

が、江戸で待っていたものはけっして温かいものではなかった。転々と職を替えたが、どこでも長続きせず、ついには盗っ人にまで落ちたのである。

ある日、彼は追われ、飛び込んだのが主馬之介の父左衛門尉の屋敷であった。権作は床下へ潜んでいたのだが、追ってきた目明かしを左衛門尉は追い返した。

目明かしは許可なくして武家屋敷には踏むことはできなかった。

左衛門尉は、しかし、権作が床下に隠れていたのを知っていたのである。

「出てくるがよい……」

声をかけられたとき、権作はままよと捨てばちな気持ちになっていた。

左衛門尉は、ひと言も小言はいわず、五両の金を与えて、

「どんなことがあっても人さまのもので生活しようという気を起こすではない。この金を持ってまともな暮らしをせい。もし目明かしどもにとがめられたときは、この金は水野左衛門尉からもらったものだというがよい。いつでも証人になってしんぜよう」

権作が江戸で人の温かさに接したのは、それが最初の最後であった。神社の前を通っても頭を下げたことのなかった権作だが、左衛門尉には心の中で手を合わせたものだ。

権作はうれしかった。もう二度と悪事はやるまいと心に誓った。そして、その足で甲州へ戻ったのである。それから四十年が過ぎているのだが、彼は左衛門尉の顔を忘れたことはない。その時の五両を今でも肌身につけていたのである。

権作が主馬之介を見たとき、あまり似ているのでびっくりした。権作の脳裏に刻まれている若い日の左衛門尉とうり二つといってよいほど似ていたのだ。

いま、その恩の何分の一かを返すことができるという。権作は、自分を石牢の中へ押し込めたことよりも、左衛門尉を無実の罪に落として殺し、その絵図面を奪い去った青山頼母が許しておけないのだった。

「主馬之介さま、わたしは必ず戻ってきますから、どんなことがあってもここから離れてはなりません」

「気をつけていくがよい」

「できたら早苗さまの安否も確かめてまいります」

「危ないことはしてくれるな」

「なあに、大丈夫です。わたしが行かなくても方法はございますから」

権作は何度も小屋から離れないように念を押して出ていった。

7

権作は顔なじみの杣男に様子を見にやったが、早苗の姿はなかったという。

わかったら小屋に知らせてくれるように頼み、数日間の食糧を持って戻ってきた。

主馬之介は権作の顔を見てほっとなったが、早苗の姿がないと聞くや、さっと顔色を変えた。

早苗は、頼母の手によって、ついにどこかへ押し込められているのだろう。まさか殺すとは思えないが、早苗を生かしておいても役に立たぬとみれば殺すことも考えられる。

虚無僧が助け出したということも考えられるが、頼母の身辺には忍者が絶えず目を光らしているし、気づくまいと思っていた主馬之介の後さえつけていたのである。いかにあの虚無僧でも、そう容易にあの警戒の中から早苗を助け出せるとは思えなかった。

「姉はわたしが確かめてくる……」

「なりません。そんなことをすればかえって相手の思う壺、もう少し相手の出方を待ってみましょう」

権作はやはり立つ主馬之介をなだめるのにかなりの苦労だった。

早苗は、そのころ、甲斐左門の家にかくまわれていた。郷士の家で、老夫婦は春之介の頼みを心よく引き受けてくれた。

早苗は、左門夫婦が春之介に対する態度が主人に対するそれのごとくていねいなので、春之介が出ていってから、

「春之介さまはいったいどんなお身分のお方ですか」

と尋ねてみたが、

「気になさることはございません。怪しいお方ではございませんから」

と答えるだけで、明かしてくれようとはしなかった。

早苗は、春之介がいなくなると、気の抜けたような気持ちでぼんやり座っていた。頼母から絵図面を奪い返すという目的だけで生きていたときと違って、もう一人の別の自分が生まれたような気持ちだった。

まだ素姓も知らない春之介にすべてを任せて手をこまねいている自分をしかることもあった

が、動くことがかえって足手まといになるとしたら、早苗にはどうすることもできない。

それにしても、主馬之介のことが気がかりになる。若いだけに危険の率も高くなるのだ。これほど姉弟の力がないのだったら、主馬之介も呼ぶべきではなかった。呼ばなければ、主馬之介を頼母の毒牙がねらうこともなかったのだ。

左門が入ってきて、

「早苗どの、心配されることはない。春之介さまにお任せして、そなたはなにも考えぬことじゃ。春之介さまが戻ってきて、そなたの元気がなくなっていれば、かえって思いきって動けなくなる。春之介さまに心配をかけないようにすることじゃ」

「わたくし、そんなに顔色が悪いのでしょうか」

「鏡をのぞいてみなされ、まるで病人じゃ。無理もないと思うが……あすかあさってかわからぬが、春之介さまのお戻りのときは元気な顔を見せてくだされ。それが春之介さまを喜ばせるなによりのものじゃ。それからな、春之介さまにはないしょだが、出ておゆきになるとき、無事、早苗どのの仇がとれたら、妻に申し受けたいといわれた」

「えっ……」

「春之介さまはごりっぱなお方じゃ。わしもそれを聞いたとき、そうなってくれればよいと思った……」

早苗はうつむいて項を上げることができなかった。

春之介さまの妻になる、はっきり左門の口からいわれて、自分の心の中に同じ願いがいつからかあったのを、いまやっとはっきり知った。離れるときの寂しさはそのためのものであったのだ。

いままで早苗は頼母から絵図面を奪い返すことばかりに夢中になり、自分が人の妻になる日のことを考えてみたことはなかった。いや、むつまじい夫婦を見てうらやましいと思ったことはあるが、自分にはそんな日は来ることはあるまいと、あきらめていたのである。
　それが、春之介の口からいわれたと聞くと、うれしさと恥ずかしさで左門の顔を見ていられなかった。今まで夢を忘れていた早苗に、はっきり未来への明るい希望がわいた。

肚（はら）の中

1

　昼近く、山名三十郎は、五人ばかりの供といっしょに、壱岐守の駕籠（かご）で頼母を迎えにきた。頼母はすぐ駕籠の中の人となって黒平から離れていった。
　そのあとから、重兵衛も手代を連れて甲府へ出ていった。むろん、生き残りの忍者三名を引き連れていったのだが、その三人はひと足先に甲府で待っていることになっていた。
　頼母が連れていかれたのは、いつか兵衛を連れていった家である。
「壱岐守どのはさすがに粋人じゃ。甲府にこれだけの造作の家はないだろうな」
　頼母はひと目で気に入った振りをしているが、内心では、壱岐守がどのような出方をするのか、興味をもって待っていたのだった。
「お気に入られてお招きしたかいがあったと申すもの。あちらの奥座敷に用意がしてありますが、

その前に二人だけで折り入ってお話ししたいことがございます」
　壱岐守はそういって、三十郎らに座を外すように命じた。
「その話とやらを先に聞きましょう」
　頼母はうながした。
「実は先日の絵図面のことでございますが」
　壱岐守がいいかけると、頼母は手を振って笑った。
「あれは謝らなければならぬと思っていたのだ。壱岐守どのに悪いことをしてしまった」
「といわれますと……」
「実は、あの絵図面は作り話だった。わしはそれを真に受けて、正直なところ、その場所を探すために甲州まで出かけてきたのだが、どうしても場所の見当がつかぬ。ところが、あの絵図面はいい加減に書いたものであるとわかったのだ。人騒がせな由井正雪だ。おかげでこの年寄りが甲州まで恥をかきに来てしまった。はははは」
「それはほんとうのことでございますか」
「ほんとうも嘘（うそ）もない。由井正雪が書いたものであることはどうやら事実のようだ。つまり、正雪は、軍資金を隠してあるということで、集まってきた謀反者たちが散っていくのを押さえていたのだ。事が破れても、軍資金の一部を隠してあるといえば、それだけでも士気に関係する。さすがに策士の正雪じゃ」
「あの絵図面は作りごとだったのですか」
「うむ。そなたには悪いことをしてしまった。事が失敗しても、軍資金があれば残党も散らずに

次の機会を待つと思ったのだ。残党はいなくなって、わしがうまうまとその罠にはまり、大事に幾年もの間、ありもしない黄金の手に入る日を夢見続けてきたのだからな」

「信じられません」

「わしも初めは信じられなかった。だが、信じるよりほかになかった。それが事実とわかった以上、絵図面の場所を探しまわるということもできぬ」

「で、絵図面はいかがなさいました」

「焼き捨てた。見るのも腹立たしいのでな」

「では、わたしはまだ知って日が浅かっただけに幸運というべきでしょう」

壱岐守も苦笑したが、内心では狸めと吐き捨てていた。

頼母がそれほど怪しげなものを幾年ものあいだ持ちつづけていたとは考えられない。それほど間の抜けた頼母ではない。

黒平の様子もそれとなく見張ってはいるのだが、そのような様子はなかった。そればかりか、頼母はますます執心の度を加えているではなかったか。

自分を警戒しているのだ。それよりほかには考えられない。

（いまに見ておれ、それでだまされるような甘い男と思っているのか……）

肚の中で笑いながら、

「せっかく楽しい夢を見ていたのに、残念なことをしてしまいましたな。しかし、早く気がついただけでも幸運でした」

「そなたにはなんとわびてよいかわからぬ。せっかく手を貸してやろうとまでいってくれたものを、悪い結果になってしまったな……」

二人は笑いながら、互いの肚の中ではかえって闘志を燃やしていたのだった。

2

壱岐守は、絵図面は必ず身につけているに違いないという確信があった。きょう招待したのは、その絵図面を奪い取るのが目的であった。

頼母もそのことはすぐ気づくだろうし、万一の場合に備えて絵図面を隠していくことがあるかもしれぬと思い、ひそかに四人の者を留守中の黒平へ向かわせていたのだった。

「湯にお入りになりませんか。黒平とはまた趣が違うものです」

壱岐守は誘ってみたが、

「わしはいつも湯は朝に入ることにしているのでな……夜は遠慮しよう」

「では、あちらへ酌人たちも待ちかねていると思われます。お気に入った者がございましたら、いってください。わたしのほうから申しつけておきますから」

「それには及ばぬ。この年になれば……」

「それほどのお年でもございますまい」

「若い女と添え寝するだけでも精気が出るかもしれぬな……」

どっちともつかぬ返事をして頼母は立ち上がった。

奥座敷では五人ばかりの着飾った酌人たちが待っていた。頼母の気を引くように若い女たちを集めたとみえ、どの女も若さにあふれた肌艶の女たちだった。酌人とはいったが、あるいはどこ

かの娘たちを呼んできたのかもしれぬと頼母は見た。女たちにはまだ生々しさが残っている者も交じっていたから。

「これはこれは……わしももう十年若くなりたくなった」

そんな冗談を飛ばしながら女たちの中に座ると、至極ご機嫌のほどで、女がつぐ杯を干すのである。

「いかがでございましたか」

壱岐守が座を外すと、三十郎が後を追うようにして出てきた。

と三十郎が尋ねたのは、さっきの密談の結果だった。

「狸め。絵図面は由井正雪のいたずらだったと申したわ」

「そんなことを申しましたか」

「だまされるわしと思っているらしい。黒平へ行った者はまだ戻らぬか……」

「はい。あしたまでゆっくりできるが、見つけ次第立ち戻るように申しつけておりますから。しかし、わたしは肌身につけておると思いますが……」

「わしもそう思っておる。湯に入れようとしても、朝湯を使うという。女を見て触手が動いているようだから、また別のことを考えてみよう」

それだけ話して、壱岐守は戻っていった。

頼母の供をしてきた順太郎は、小部屋でぽつんと座っていたが、退屈なので絵草紙を借りて読んでいた。

酒を勧められたが、飲めぬというし、奥座敷のほうへ来ないかと誘われても、酒席にはべって

いると息苦しくなるといって小部屋で待っているのだった。

頼母は、久しぶりに若い女に囲まれて、まんざらでもない様子だった。若いころは酒豪をもって鳴らした頼母だが、年は争えないものとみえてめっきり酒量が少なくなり、いくらも飲んではいないのにもう酔いがその顔に出ていた。

頼母の声が大きくなり、しきりに女たちをからかっている。壱岐守は渋い顔で見つめていた。

かなり夜も更けてきた。頼母も相当に乱れているので、潮時を見て、

「そろそろお休みになってはいかがですか」

と、壱岐守はいった。

「うむ。では休もうか……」

よろっと立ち上がる頼母の腕を取って、そっと耳に口を寄せて、

「お気に入った者がございましたらおっしゃってください」

「この女を借りていくぞ……」

頼母はいちばん年増の手を握っていた。年増といってもまだ二十三にはなるまい。

「だいぶ酔っておられるので、静かに寝せてやるがよい」

壱岐守はそういって、いっしょに頼母を抱えるようにして出ていき、あとは女に任せてから奥座敷へ戻ってくると、

「ご苦労であったな。向こうで謝礼をもらって戻るがよかろう」

と、女たちへいった。

3

女はぐったりとなった頼母に着替えさせるのにひと苦労であった。
頼母は口だけは達者で、
「そのほうも着替えしてここへ来るがよい」
という。
「はい、すぐに参ります。明かりを消してよろしゅうございますか……」
女は、許しを得て明かりを消すと、部屋の隅に寄って帯をほどきだした。帯を解く音があるなまめかしさとなって頼母の耳に流れ込んでくる。
長襦袢(ながじゅばん)一つになった女が生娘ではないのはその豊かな体の線を見てもわかる。きゅうっと締めた細い腰のあたりにたまらない色気があった。女はそっと首を回して、ゆっくり頼母のそばへやって来た。
酔いが深かったのか、頼母はもう寝息を立てていた。
女はしばらく枕元(まくらもと)に座っていたが、やがて足音を立てないように頼母の脱いだ着物に近づいていくと、寝息を気にしながら、なにやら探しはじめた。
胴巻の中も調べていたが、その金には手を触れようともせず、女は丹念に一つ一つ改めていった。
女の顔にはっと喜びの色が刷(は)いた。手に触れたものをおそるおそる取り出してみたが、紙切れのごときものであった。開いてみると絵図面らしかった。

「これだ……」
小さく叫び、もう一度よく寝込んでいる頼母の顔をのぞき込んで、そっと部屋を出ていった。
と――しばらくして、今までぐっすり眠っていた頼母がぱっちり目を開いて、
「ばかめが……」
その顔に嘲笑(ちょうしょう)が浮かんだ。
女は長襦袢のまま壱岐守の部屋へ行った。壱岐守はこの家を預けている愛妾(あいしょう)お竜と床に入って待っていた。
「うまくいったか……」
「これに……苦心いたしました」
「大手柄だ。見せい！」
引ったくるようにして壱岐守は絵図面を開いてみたが、瞬間、喜びの色が消え、唇が引きつった。
「違う。これではない……これは偽物だ……」
「えっ……」
「ふふふ、いかにも頼母らしい用心深さだ。しかし、これであの絵図面がいたずらではなかったという証拠になる。むだではなかったようだ……」
「では、これはお役に立たぬのですか」
「本物なら百両で買うと約束したが、偽物では一文の価値もない。これはもとどおりにしていたほうがよい。そのほうは部屋へ戻れ。せっかくだったが、骨折り代として十両だけはとらせよう。

それで辛抱してもらおう」
女の顔にありありと落胆の色が浮かんだ。
「しかたがございません……」
女はそれでも十両になったことに満足して戻っていった。
頼母は、さっきと同じように、心地よさそうな寝息を立てていた。
「油断のないじいさんだこと……」
女は絵図面をもとどおりにしまって、頼母の横に身を入れた。頼母は、自分から女を連れてきながら、それさえ忘れての高いびきである。
女はふうっとため息をついた。
このままでは眠れそうにない。せつなさを感じながら、屋根を打つ雨の音を聞いていた。ついさっきから降りだした雨であった。
みんなはもう寝静まったものとみえて、ことりとも物音はしない。
時だけがあすへ流れていった。

4

朝になった。夜が白んでくるや、頼母は目を覚ました。いつになくぐっすり眠れたような気がする。昨夜、偽の絵図面を喜んで開き、偽物とわかって怒っている壱岐守の顔を思い浮かべてみただけでも痛快だと思う。
朝会ってどんな顔をするか、それを見るのが楽しみだった。

昨夜の女はまだぐっすり眠っている。頼母は、その女の顔を見て、ほうと目をみはった。意外なほど女は美しかった。
頼母の経験では、夜、興味を抱いた女のほとんどは、朝の寝顔を見るとがっかりしたものである。夜は自分を美しく見せようとする気持ちを失ってはいないが、朝はそのままのなんの虚飾もない女がむき出しになるからだ。
そうした落胆は、夜会っただけの女にひどい。
しかし、この女の寝顔にはまだあどけなさがあった。じゅうぶんに男を知った女の媚態を夜は感じさせていたのがむしろ不思議なくらいだった。
（思いのほかの拾い物だ――）
頼母がもう少し若ければ、むなしく一夜を過ごすということはなかったであろう。若い折からの無理のせいか、老いるのが早かった。
それでも気持ちの上では若さが残ってはいたが、体のほうがいうことをきかないのを知っている。頼母は、心ひかれるのを感じながら、そっと寝床を出ていった。
雨はきれいに上がってさわやかな夜明けだった。庭下駄をつっかけて庭へ下りた。雨に洗われた樹木がいきいきとして朝のさわやかさを謳歌しているように思えた。
女中が声をかけてきた。
「お目覚めでございますか」
「おはよう。雨上がりの朝というものは一段と気持ちのよいものじゃな……」
「はい。降りつづくのではないかと心配しておりましたが……」

「壱岐守どのはまだお休みか」
「ゆうべ遅うございましたので……お供のお方は起きておいでになります。お呼びいたしますか」
「捨ておいてもらおう。こんな時にはゆっくり寝ていればよいものを……あまり律儀すぎるのもかえって迷惑なものじゃ」
と、頼母は苦笑した。順太郎が兵衛くらいに欲がある男なら、こんな場合、いろいろと使い道もあるだろうが——
「お湯をお召しになりますか。朝湯を召される由にて、用意してございます」
「それはありがたい。年寄りというものはとかく朝湯を好むものでな。朝ひと風呂浴びると一日が楽しくなってくる」
「お流しいたします。こちらでございます」
女は先に立って歩いていった。
湯殿はさして大きなものではなかったが、湯ぶねから雨に清められた庭がよく見えた。
「黒平で湯につかっているようだ。江戸ではこんな気持は味わえない」
「熱くはございませんか」
「いや、このくらいがよい。ゆうべわしの部屋に泊まった女、どんな素姓の女だ」
「お気に召さなかったのでございますか」
「召すも召さぬも、こう年をとってはとんと体のほうがいうことをきいてはくれぬ」
「まだそんなお年ではございません」
「世辞でもそういってくれればうれしくなる。わしがもう少し若ければ連れて戻りたい女だと思

ったのだ」
「まっ……あのお方ははじめておみえになったのでわかりません。ほかの人たちはここへ出入りしている酌人でございます」
「江戸の酌人と違って、ひどく感じのよい女たちであった」
「ゆうべは評判のよい人を選びましたので、そうお感じになるのかもしれませぬ」
女はそういって、頼母が湯ぶねから上がるのを待っていた。

5

女も昨夜の女と劣らない美しさである。二の腕までまくって襷をしていた。裾もふくらはぎのあたりまで上げて水にぬれるのを防いでいるのだが、その肌のこまやかさに頼母はあらためて視線を投げた。
まだ十九にはなっていないだろう。昨夜の女には男を知った女の色香が感じられたが、この女はまだ男を知らない固さが残っている。
「甲州というところは美しい女が生まれるところとみえるな」
「お世辞でございますか——」
「世辞ではない。ほんとうにそう思っている」
言いかけて頼母の顔が微笑した。
「まあ……」
女はその微笑をからかっているのだと思ったが、実はほかのことへ関しての微笑だったのであ

る。

頼母は衣類を脱ぎ捨てたあたりで人の気配がしているのを耳ざとく聞き取っていたのだった。

(また絵図面を捜しに鼠がやって来たものとみえる——)

昨夜、目的を果たしえなかったので、湯に入るときならば必ず身から離すに違いないと待っていたのであろう。

(わしがそれほどの間抜けに見えるのか)

頼母は、彼らが頼母に気づかれないようにと気をつかえばつかうだけ吹き出したくなってくるのだった。

はたして——

一人の男が丹念に頼母の衣類を調べていた。肌身につけているとしたら、この衣類の中のどこかに隠されていなければならぬのだ。頼母が肌身につけて湯に入ることがないだけに、もしなければ万一の場合に備えて持ってはこなかったに違いない。

一度、二度——調べてみたが、それらしいものはなかった。偽の絵図面だけは見つかったが、夜ならばともかく、明るいところでは見誤ることはない。本物は相当の月日を経ているのだからひと目でわかるのだ。

(やはり持ってはこなかったのであろう)

その男は、衣類を元どおりにして、そっと出ていった。

壱岐守はようやく起きたところであった。頼母がいま湯につかっていると聞き、にっと思わず微笑を浮かべた。

(こんどこそ絵図面を奪い取ることができる)

と待ちかねているところへ、その男が入ってきた。

「うまくいったか……」

「ございません——」

「ない? そんなはずはない。必ず持っているはずだ」

「何度も捜してみましたが、どうしてもございません。偽絵図面だけはございましたが、それはまだ新しいものでございます」

「すると、やはりどこかへ隠してきたのだな。用心深い頼母のやることだ、そのくらいのことはやるかもしれぬ」

壱岐守は、しかし、黒平へやった配下に期待をかけていた。頼母が持ってこなかったとすれば、隠している場所は黒平よりほかにはあるまい。

「ご苦労であったな……頼母には気づかれてはいないだろうな」

「気づいてはいないらしく、お駒としきりに話をしておりました」

お駒というのは頼母の背を流している女であった。

「ご苦労ついでに、黒平まで馬を飛ばしてもらおう。人目につかぬうちに戻るようにな。なければないで、また別の方法を考えなければなるまい」

壱岐守は、吉凶いずれの結果が出ても、一刻も早く結果を知りたかった。

6

壱岐守は庭へ下りてみた。ちょうど頼母が湯から下りてきたところであった。
「お目覚めかな……」
湯上がりのほてった顔で、頼母も庭へ下りてきた。
「お休みになれましたか」
「おかげで退屈がすっかりとれた。かさねがさねの馳走に若返ったような気がする」
頼母はそういって笑った。
表面はなにげない二人としか見えなかったが、肚の中では互いの肚を読み取ろうとしていたのだ。
「昼になりましたら駕籠で送らせますから、それまでごゆっくりなされませ」
「そうさせてもらおう。わしもそろそろ江戸が恋しゅうなってきた。近いうちに江戸へ戻るようになるかもしれぬ」
「では、その時は、もう一度お別れに……」
「邪魔をしよう」
「ゆうべの女、お気に召しましたらお供させてもよろしゅうございますが」
「なかなかよい女だが、もう女は必要ではなくなった。とんと体のほうがいうことをきいてくれないのでな。はははは」
「そんなお年では……」

「年をとったよ。わしもつくづく年には勝てぬと思うようになった」
話しているときに、山名三十郎が、
「ご城代さま――」
と呼んだ。壱岐守は目礼して三十郎のほうへ寄っていった。黒平からの報告が来たのに違いないと思っていた。
「知らせが来たか――」
「はい。いくら捜してもわからないそうでございます。夜が明けては人目につきますので、一応立ち戻ってまいりました。これだけ捜しても見つからないのですから、肌身につけているに違いないと申しておりますが」
「持ってはいないようだ。どこかへ隠しているのであろう。相手は頼母だ、一筋縄でいくような男ではない」
「権作の行方だけでもわかれば……」
「頼母が権作もいずれかへ隠しているに違いない。そのほうも極力捜してもらおう。近く江戸へ戻るといいおったが、いよいよ動きはじめるつもりらしい。おそらく権作から絵図面の場所を聞き出したのに違いあるまい」
「江戸へ戻ると申しましたか……」
「こうなってくれば、絵図面ばかりねらっていることはできぬ。根気よく頼母の行方をつけまわすのが近道かもしれぬな……」
「忍者も相当動いているようです。こちらも人数を増して、頼母の忍者は見つけ次第消していく

ことにいたしましょう」
「そうしてくれ。頼母の手足をもぎ取っておけば、老人のことだ、身動きはできまい。時期を見て、頼母を眠らせてもよい」
「消しますか――」
「一万両がこっちのものになるとはっきりしてからのことだ。ともかく、頼母から目を離さないようにしておいてくれ」
「黒平に泊まっている重兵衛と申す江戸の材木問屋の隠居がやはり甲府へ来ております」
「この間の時も来ていたようだが……」
「はい。あの男が忍者たちとの連絡を取っているように思えてなりません。それ以外に方法はないように思われます」
　そのことは壱岐守もうすうす気づいていたのである。
「様子を確かめてみよ。もしそれに違いないとわかれば、すぐ消しておけ。兵衛に尋ねてみればなにかわかるかもしれぬが……」
「黒平に残っていると思っていましたが、わたしが行ったときもおらず、また、ゆうべ黒平へ出かけていった者たちの言によっても、兵衛の姿は見受けなかったということですが……」
「はて……頼母の命をうけてどこかへ行ったのであれば、わしかそのほうのところへ必ず連絡してくるに違いないが……」
　と、壱岐守の眉宇が曇る。
「わたしの考えますところでは、露見しそうになって逃げたのか、あるいはすでにこの世の者で

はなくなっているか、その二つのうちのいずれかでございましょう」
「ふむ……わしに策がある。成功するかしないか、ともかくやってみることだ。頼母が帰ってからゆっくり相談しよう」
　壱岐守はそういって、ある決意を面上に浮かべた。

招かざる客

1

　主馬之介はじっとしていることはできなくなった。一日は耐えられたが、早苗の行方がはっきりしない間は落ち着いていることはできなかった。黒平へ行けばなんとかその消息がつかめるのではないかと思う。
　虚無僧が助けてくれたのであればそれでもよい。もし頼母がどこかへ捕らえているのだとしたら助け出す方法を講じなければならぬ。
　権作にそのことをいってみても、必ず止めるのはまちがいない。そっと抜け出していくよりほかにはないのだが、道はわからなかった。
　が、大体の位置はわかっている。太陽の位置で方角を知ることもできるし、権作から取り囲んでいる山も聞いているので、方角を見失うこともあるまい。
　権作が薪を集めに行っているすきに、主馬之介はそっと抜け出していった。

姉を捜しに行くと書き置きだけは残していった。

が、主馬之介はまもなく自分の歩いている場所がわからなくなっていった。尋ねる人とてない山中の道は、不案内の者にはしょせん無理であった。

夕刻になって、やっとわき水にありつくことができた。草の間からこんこんとわき出てくる水に咽を潤すと、はじめて生き返ったような気持ちになった。

(軽率だった)

主馬之介は後悔した。今ごろ権作は山の中を捜しまわっていよう。いや、道に詳しい権作ならば黒平へ行っているかもしれない。

頼母に発見されるようなことでもあれば、権作に申し訳ないことになる。

あの虚無僧は、自分の軽率さがだれかを危地へ追い込んでしまうことを知っていて、当分身を隠しているようにいったのに違いない。

主馬之介はなおも歩きだした。樹林が尽きて、また樹林を抜け、細々と続いている道をたどっていった。

「あっ……家がある……」

遠くに明かりがちらっと見えたとき、主馬之介の顔にほっとした喜びの色が浮かんだ。

さっきのわき水で空腹をしのいだものの、歩きだすとすぐ空腹が足にひびいた。とにかく一碗の飯が食べたかった。

木の間にちらつく明かりに吸い寄せられるように主馬之介は歩いていった。

かなりの家であった。郷士の家らしい。主馬之介は入っていこうとして、ふと足音を聞き、反

射的に身を隠した。

ねらわれているという潜在意識が、無意識のうちに彼にこうした態度をとらせるのだった。

三人の男たちであった。二人は浪人風であり、一人は杣男である。

「おや……」

と、主馬之介の目をみはらせたのは、その杣男を一度見かけたことがあったからである。主馬之介はすぐその杣男を思い出した。

黒平でたしか見かけたことがある。頼母といつも碁を打っているという重兵衛と話しているのをかいま見たことがある。

(なんのためにこんなところへ今時分浪人者とやってきたのか――)

頼母となんらかのつながりがある男たちではあるまいか――

三人が家の中へ入ってから、主馬之介はそっと入って植え込みの中へ隠れた。少しずつ動いていく。家の中が見える位置まで来たとき、主馬之介は思わずあっと叫びそうになるのを非常な努力で抑えたものである。

その部屋の中に意外なものを見たからであった。

行燈のそばでこちらへ横顔を向けている女の顔が、早苗にそっくりであったからだ。

2

「姉ではないのだろうか――」

主馬之介はまじろぎもせずに凝視した。横顔はまったくうり二つといってよかったが、声をか

けるにはまだ自信はなかった。

　主馬之介はいましばらくこちらを向いてくれるのを待った。正面を向いてくれればはっきりするのだが――

　いらだつ心を抑えた。もし早苗であったとすれば、どうしてこんなところへいるのか。

　虚無僧が、黒平から助け出してきたのならばそれでもよい。だが、頼母がここへ連れてきたのであれば、安易に声をかけることによって自分もまた捕らわれねばならないようになるかもしれないのである。

　家へ入っていった三人の話し声がしている。女はちらっと庭へ視線を投げた。

「姉だ……まちがいはない――」

　主馬之介が身を乗り出すようにしたとき、その肩を押さえた者がある。はっとして振り向くと、見慣れぬ浪人風の男であった。

「声をかけるな……」

　低い声でそう命じた。主馬之介はその声にどこかで聞き覚えがあると思ったが、急には思い出せなかった。

「あなたは……?」

　主馬之介はとがめるような語調で尋ねた。

「横笛の主だ……」

「あなたが……」

「やはりじっとしておられなかったとみえるな」

「申し訳ございません。足手まといにばかりなっているのが心苦しかったのです。姉の安否だけでも確かめたいと思い、黒平へ行こうとして道をまちがえてしまいました。あそこにいるのは姉ではございませんか」

「早苗どのだ……」

「どうしてこんなところへ……」

「わたしが黒平から連れてきた。もう少し遅ければ取り返しのつかぬことになっていたかもしれぬ。間に合ってよかったが、頼母の配下を三人斬った」

「ここはだれの家なのですか」

「わたしの知人で、心配するような家ではない」

「いま三人の者が入っていきましたが、あの杣男は以前黒平で見たことがございます。頼母といつも碁を打っている重兵衛と話していたのを見ましたが……」

「うむ。三人とも頼母の配下の者だ」

「どうしてここへ……姉をかぎつけたのでしょうか……」

「いや、別の用件でこの家の主、左門を訪ねてきたのであろう。彼らに発見されないように早苗どのを連れ出さねばならぬ。そなたはこの裏手の鶏小屋の陰で待っているがよい。わたしがそっと呼び出してくる……」

　主馬之介はいわれるままに樹間を縫って裏のほうへ出た。鶏小屋の向こうは広々とした畑が丘のほうまで続いていた。

　春之介は、主馬之介が消えてから、早苗のほうへ近づいていった。

早苗は、しきりに縫物をしていた。男物であった。いつか春之介に着せるつもりで、左門夫婦に布を買ってきてもらったのである。

「早苗どの……」

そっと春之介が呼んだ。

「まっ……春之介さま……」

いつもの虚無僧姿とは違って、さっぱりとした着流し姿の春之介を見て、早苗はどぎまぎした。顔が赤くなってくるのが自分でもわかった。

「そっと出てくるがよい……」

「は、はい……」

早苗は春之介が左門夫婦へ気兼ねして呼びに来たものだと思った。庭へ下りると、

「足音を立てぬように、そっと来るのだ」

耳もとでささやかれることばを、早苗は夢中で聞いていた。

「頼母の配下が来ているのだ」

「ええっ……」

「見つかってはまずいから、しばらく隠れていてもらいたい。鶏小屋の陰で主馬之介どのも待っているのだ」

「主馬之介が——」

「しっ——」

と口を封じて、春之介は鶏小屋の裏へ連れていった。

「姉上——」

と、主馬之介が待ちかねたように飛び出してきた。

「主馬之介、ご無事で……ずいぶん心配しました」

「わたしも、姉上の身が……」

二人は久しぶりの対面に声も出なくなった。

「なるべく静かにしておいてもらいたい。話はあとでゆっくりできるのだ。わたしが戻るまで、どんなことがあってもここから動いてはならぬ。よいな……」

「春之介さまはどこに行かれるのですか」

「頼母の犬どもがなんのために来たのか気になるので行ってみよう。都合によってはすこし暇どるかもしれぬが、二人はここから動いてはならぬ。このあたりにも頼母の目が光っているのを忘れてはならぬ」

「はい……」

二人はうなずいて、頼もしげに春之介の顔を見つめた。

春之介は、もう一度念を押して、庭をまわり、表から家の中へ、いま戻ったといった様子で入っていき、

「叔父上、ただいま戻りました」

と声をかけて、出てくるのを待たずに上がっていくと、襖を開き、

「お客でございますか。失礼つかまつった……左門の甥、春之介と申す浪人者です」

春之介はそういって初対面の挨拶をするのだった。

3

春之介の顔を見ると、左門はほっとした表情になった。彼がみずから甥と名のったのは、左門の当惑を助けるためのものであるのを知って、心の中では手を合わせたのである。

「春之介、実は弱っていたのだ。このお方たちが土地のことについてなにかお聞きしたいといわれる。甲斐の古い絵図面らしいが、その場所がどこであるか見てくれぬかと申されておるのだが……」

浪人の顔にちらっと困惑の色が浮かんだ。

春之介は浪人者に尋ねた。

「その絵図面というのはお持ちでございますか」

浪人はあわてていった。

「いや、お気が進まれぬのならよろしいのだ。ご無理にお願いできることではない」

「春之介、実はな、ここへは持ってきてはいないので、同行してもらえないかといわれるのだが、今からではのう……」

「せっかくおみえになったのをすげなく返すということもできますまい。わたしもごいっしょに参りましょう。近いのですか」

「すぐ近くだが……」

浪人は言い渋って顔を見合わせたが、互いの意志はそれで通じたとみえ、

「そう願えればかたじけない。あまり遅くならないうちにご案内いたしましょう」

浪人はそういって腰を上げた。

左門は気が進まない様子であった。が、春之介がついていることであるし、左門は任せることにした。

外へ出ると、左門に少し遅れて春之介、そのあとに杣男が続き、浪人二人は春之介の両側を歩いていった。

彼らは春之介を見たのははじめてであった。着流しではなく、虚無僧姿であれば、彼らはすぐにでも横笛の音を思い出したかもしれなかったのだが。

二人の浪人はともすれば遅れがちになる。春之介はいっこうに気にしている様子ではなかったが、しかし、彼らが何者であるかを知っていて油断するはずもない。

かなり歩いたようだが、家らしいものはない。

「まだ遠いのですか」

春之介が尋ねても、浪人は、

「もうすぐです」

と答えるばかりで、行く先をいおうとはしない。

雑木林に入ったときである。春之介の背後から、杣男が山刀をいきなり浴びせた。同時に左右の浪人者も春之介に抜き討ちをくれた。

せつな——春之介の手にも銀蛇がひらめいた。

「うっ……」

杣男が山刀を飛ばしてのけぞる。

春之介は、彼らがかかる行為に出るのは、初めから知っていたのだった。それを気づかないと見たところに彼らの敗因の第一があったのだ。

春之介はその時期をひそかに待っていたのであった。杣男が山刀を抜いたとき、すでにそれと気づき、大地をける一拍子早く、斬り捨てて飛んでいたのである。浪人は、自然、虚空を割らねばならなかった。

左門は春之介の背に隠れるようにして、

「な、なんの狼藉だッ!」

浪人はしかし殺気をもって答えた。失敗したとみるや、左右から春之介を挟むようにしてじりじり寄っていく。

「なんのためにわたしの命を奪おうとするのだ。理由次第によっては、二人の命もいただくことになろう」

春之介はそういって静かに青眼につけた。

浪人たちは、内心、杣男を倒した春之介のあまりにもさえた剣に恐怖を抱きはじめていた。及ばぬと知ってまで命を捨てる彼らではない。

「ひけい!」

一人が叫ぶと、二人はさっと樹間へ姿を消していった。

あとは一陣の微風が残っただけであった。

斬られた杣男は、ぴくっともせず、目をむいて死んでいた。

4

「また一人死んだのか……」

頼母は、左門呼び出しが失敗したと聞くや、その眉宇に一抹の曇りをにじませた。これで残るのは二人、重兵衛と手代に自分、順太郎まで加えて六人になった。すでにわずかの間に八人もの忍者が斬られている。

頼母はいらだってきた。あれだけ慎重に事を運んだのが、甲州へ来てからは一つずつ崩れていくのだ。

必ずしも左門である必要はなかったのだが、左門はこのあたりの知識人であるし、古文書などもかなり読んでいるというので、まず左門に当たってみることにしたのだが、もののみごとに失敗してしまったのである。

最初のつまずきで失敗したということが、今後のなりゆきの暗示のように思えてならなかったのである。

「もう二、三人当たってみますか」

と重兵衛はいったが、頼母は気が進まぬ様子で、

「権作の行方はわからぬのか」

「今もってわかりません。人が足りなくなりましたので、手代を甲府へやりました。権作が甲府へ現れたらすぐ連絡してくることになっております」

「権作一人を追ってみても始まるまい。甲州へ来ればすぐわかると思っていたのに……」

頼母にしてみれば、こんな結果になるとは思ってもいなかったのだ。

甲府城代は松平壱岐守であるし、壱岐守は四分六ぐらいの分け前なら喜んで手を貸してくれると思っていた。

第一のつまずきは壱岐守であった。壱岐守は全部を自分のものにしようと計った。壱岐守さえ手を組んでいたら、権作を逃がすこともないだろうし、今ごろは一万両を手にしていたことであろう。壱岐守が欲を起こしたばかりにその計画も崩れ、壱岐守自身も一文にもならぬことになってしまったのである。

（ばかなやつだ……）

壱岐守の愚かさが腹立たしくなってくる。

壱岐守にしてみれば、信ずるに足ると思えば手を組んだかもしれないのだが、表面の穏やかさとはまったく違った頼母の非情さを知っているだけに、どうしても頼母とは手を組むことはできなかったのである。

頼母の第一のつまずきはそれであった。それをきっかけに、打つ手打つ手が外れていき、十人の忍者も二人になってしまっては身動きもできなくなってしまう。

一刻も早く場所を探し当てなければならぬ。そのためには絵図面の場所を知らなければならぬし、そのためにどうしても土地に明るい古老の知恵が必要なのだ。

それさえ今の頼母には難しくなろうとしている。

「重兵衛、左門は失敗したが、ほかにはいないのか、適当な者は……」

「杣男にでも尋ねまわってみるのも一方法ではございましょうが、それには日数がかかります」

「ほかになければ致し方はあるまい」

「やはり権作を捜すのが早道かと存じますが」

「権作が甲府へも姿を現さなければ、主馬之介からわれらの目的を聞いていると見て差し支えはあるまい」

「絵図面を手にしていながら、みすみす見ているのは悔しゅうございますが……」

「重兵衛、思いきってこの絵図面を壱岐守へ渡してみようか」

「何をいわれます。それこそ手に入ったものを与えてしまうようなもの。壱岐守を喜ばせるだけのことです」

と、重兵衛は顔色を変えた。

「いや、壱岐守ならば城代でもあり、必ずこの絵図面の場所を知るに違いない。壱岐守から目を離さずに、その後をつけていけば、労せずして目的を果たすことができる」

「しかし、われらの人数では……」

「それならば安心せい。壱岐守は必ず小人数で行く。人目に立ってはならぬことだ。目に立つような人数で行くはずはない」

「忍者を連れていきましょう」

「いや、それもやるまい。ある特定の人物以外には知られては困ることだ。これでいこう。主馬之介や早苗のことはかまうな。あした黒平を下るぞ。壱岐守へ江戸へ戻るという挨拶をしてくるのだ。忍びの者は甲府へ残して、そのほうとわしたちだけで江戸へ戻る。むろん、途中から引き返して、目印を見ながら跡を追うのだ。絵図面は壱岐守へ与えてこよう。それでもまた失敗した

ら、あきらめるよりほかにはない……」

ついに頼母は一勝負することを決心した。

青空の旅

1

「三十郎、出かけようか……」

壱岐守が旅支度をして三十郎を促したのはそれから三日目のことである。

三十郎のほかに屈強の者を五人選んで連れていくことになった。三日の余裕を見たのは、頼母がはたして江戸へ戻っていくかどうかを確かめていたのである。それとなくあとを尾行させていたのだが、翌夜は黒野田に泊まり、さらに江戸へ向かって歩きだすのを見届けて引き返してきたのだった。

壱岐守は、配下の者に命じて、山窩を一人案内に立てた。山暮らしの彼らなら、絵図面をひと目見てそれがどこを意味するものであるかがわかるだろうと思ったのだが、はたして山窩はひと目でそれが八ガ岳の権現岳の中腹にある岩場であるのを見てとったのである。

八ガ岳は甲州と信州の国境に連なる八つの峰の総称である。赤岳を最高に、硫黄岳、横岳、峰ノ松岳、阿弥陀岳、権現岳、西岳、編笠岳と並び、峨々たる高峰を連ねている。至るところに岩が露出し、歩行不能の場所もかなり多い。その中には、権作を押し込めていた石室のように、自

然にできている洞穴も幾つか存在しているはずであった。

山窩の男は名を為朝といった。六十ばかりの男ではあるが、山から山を流れて歩く彼らには山道は平地と同じであった。

一行八人は、信州往還を八ガ岳に向かっていった。二日目に八ガ岳にかかるつもりであった。為朝は身なりが目立つので、杣男のような身なりになり、山刀も風呂敷に包んで担いでいくことになった。

為朝はみんなと同じ食事を与えられたことにひどくご機嫌であった。

そのあとから一日遅れて、商家の隠居風の男と、番頭風の男に手代とおぼしき若い男がついていった。

手代は重兵衛がいつも連れていた手代に紛れもない。が、番頭風の男は、実は重兵衛の変身だった。

黒平にいたときは、だれが見ても老人としか見えない。が、今の彼は四十前後の番頭である。それは彼らにとってはなんでもないことであった。彼らは歯を入れたり抜いたりすることは平気であるし、同時に声を変えることすらできるのだった。

隠居は身なりこそ黒平にいたときの重兵衛のようだが、頼母であるのはいうまでもない。三人は、尾行者が甲府へ戻っていったのを確かめてから、その足で甲府の旅籠に潜み、壱岐守の動きから目を離さない忍者からの報告を待っていたのであった。

二人の忍者は、壱岐守の一行をつけ、その二人の残している目印をたどって頼母たちは歩いていたのである。

壱岐守はそんなことは考えてみようとはせず、いたって軽い足どりで青空を仰ぎながら歩いていく。

　きょうも——旅には絶好の秋晴れの空だ。

「三十郎……こんどはそのほうにずいぶん世話になったな。甲府へ戻ればそれだけのことはする」

「これも日ごろのご恩返しでございます」

「頼母があきらめたのは愉快だった。こんどこそ思い知ったであろう。欲の深さにかけては恐ろしいほどの執念を持っているやつだ。さすがの頼母も、ああ年をとっては駄馬に等しい。死ぬ日を待っているようなものだ……」

「しかし、跡をつけてくるかもしれません」

「捨てておけ。絵図面はこっちにある。跡をつけていても道案内もないのだ、恐るるに足りぬ。八ガ岳まで来たら、思いきって消してもよい。気にすることはない……ひと足先に黄金はこちらへいただく。一万両というから、二千両はそのほうへ渡さねばなるまいな」

「二千両……」

「そのほうも甲府まで追いやられたのだ。そのくらいは手にしても悪くはあるまい……」

「一万両が手に入ったら、江戸へ戻りたいものです」

「うむ……こんな田舎で一生暮らせるものではない。なんとか、わしとそのほうの二人だけでも江戸へ戻るように工作してみよう。金があればなんとかすることもできよう」

「頼母がそれと知ったら、恨んでなにかかやりはいたしませんか」

「うむ……もし跡をつけてくるようならば消しておこう。八ガ岳なら、死体が発見されてもだれだかわかるまい。たとえわかっても、わしたちの仕業だとは知れることはないのだ」

「跡をつけてこない場合は……」

「その時は、江戸へ戻れるようになったら、ひと足先に刺客を向けて殺させよう。何を考えているのかわからぬやつだ。生きていてもらってはどんな面倒なことになるかもしれぬ」

　八ガ岳の連峰はすぐ近くにくっきりと姿を見せているのだが、なかなか道のりははかどらなかった。

2

　同じ道を、春之介と主馬之介は歩いていたのである。主馬之介と権作が先に行き、すこし遅れて春之介と早苗が並んでいた。

　澄み渡った青空の下の旅は、だれしも嫌な気持ちになる者はいない。

　早苗は、これが二人だけで何も考えない旅であれば、どれだけ楽しいことであろうかと思った。春之介は、いっしょに歩いていても、ひと言も優しく声をかけようとはしなかった。早苗はそれが寂しかった。

　道案内には権作という絶好の人物がいる。信州往還を行くのなら、たぶん八ガ岳であろうと彼はいう。八ガ岳ならば、黄金を埋蔵するにはふさわしい場所がいくらもあるとのことだ。

　絵図面を早苗たちが見ているのだったら、それを聞いて見当をつけることができるかもしれないといったが、主馬之介も早苗も自分の目で絵図面を見たことはなかった。

頼母たちはゆっくりした足取りなので、春之介たちも見失わない程度に距離をはなして、ゆっくり秋の日ざしを楽しんでいるような足どりであった。

早苗は、いよいよ最後の時が迫りつつあると思いながらも、不思議に不安はなかった。

旅籠は、わざと頼母たちを避けて、隣にとった。二階の往還を見下ろせる部屋であり、頼母たちが出立すればすぐわかるようにしていたのだった。

部屋に通り、春之介と主馬之介が風呂に行った間、権作が往還の障子を細目に開いて見下ろしていた。

早苗は、なにげなく、さっき旅籠に着いたとき女中にかけられたことばを思い出して、顔が熱くなった。女中は、早苗を、

「ご新造さま――」

と呼んだのだ。春之介のいるところで呼ばれ、はいと返事をしたものの、体じゅうが熱くなって顔が上げられなかった。

女中も、早苗に声をかけるのに、なんと呼んでいいのかとまどったに違いない。まだ丸髷(まるまげ)には結っていないのだが、二人が入ってきたときの感じでそう呼んでしまったというのが本音であったのであろう。

早苗は、いまふっと、なにげなくそのことを思い出したのだった。

(わたしは、人の目には、春之介さまの妻に見えたのであろうか?)

早苗はそれがうれしかった。が、はたしてその日が来るのかどうか。それを思ったとき、必ずしも明るい希望はわいてこないのである。

頼母たちの野望を阻止することができたとしても、その日が春之介との別離の日になるのではないだろうか。

幸せだと思ったときには、その反対のことをあわせて考えるのである。早苗は、こうやって人目には春之介の妻と思われながら旅をすることに幸せを感じているだけに、別れる日が恐ろしかった。

今までは目的があったので、そのために日々のつらさも忘れることができたが、目的を果たしてしまえば、あとはただ生活の苦しさだけが残るのだ。

生きている――ただそれだけではないのか。

「お嬢さま、何を考えていらっしゃるのですか」

権作が顔を向けて、

「赤くなっていらっしゃるが、よほどうれしいことのように思われますね。そうそう、さっき女中がお嬢さまをご新造さまとお呼びしたようですが、わたしも、その時、ふっとそんな気がいたしました」

「そのようなことを……」

早苗は項(うなじ)まで真っ赤になってうつむいた。

「からかっているのではございません。二人が歩いていらっしゃるのを見ていて、わたしもそんなことを考えました。主馬之介さまも、春之介さまが兄になってくれるのならばといっていらっしゃいましたが、わたしも、主馬之介さまにもそうお願いしてみてはと申してきましたから、今ごろは、もしかしたら、お願いしていらっしゃるのかも……」

「そのようなことを春之介さまにいってはなりませぬ」
「お嬢さまはあのお方がお嫌いなのですか」
「い、いいえ……」
あわてて否定して、早苗ははっとしたように口をつぐむ。
「でしたら、お嬢さまからもはっきりおっしゃったほうがいいかもしれません」
「そんなはしたないことを……」
「言わなければ、春之介さまはお嬢さまに嫌われているのだと思っていられるのかもしれません」
「でも……」
「お嬢さまの口から言いにくいのなら、わたしが言って差し上げましょう」
その時、二人の戻ってくる足音が廊下に響いてきた。
「権作さん。いまのこと言ってはなりません」
早苗はそういって視線を伏せた。春之介の顔をまともに見ることができなかった。
春之介は入ってくると、
「いい湯だ。早苗どのも入ってくるがよい。山へ入れば風呂に入れない日が続くかもしれぬ」
真っ赤になってうつむいている早苗を不思議そうに見下ろしていた。

3

翌朝も晴天だった。
頼母たちは朝早く立った。春之介たちもすこし遅れて旅籠を出た。春之介は夜中どこかへ出かけていったが、戻ったのは明け方であったが、べつに眠そうな顔もしていない。たぶん頼母の旅籠にでも潜んでいたのであろう。
主馬之介はそれが心苦しくて、
「わたしにもなにか仕事を与えてください」
と頼んでみたのだが、春之介は笑って、
「そなたは早苗どのを守っているのが役目だ。頼母たちのことはわたしに任せておいてもらいたい」
というだけであった。
頼母も、信州との国境まではいくらもないのであり、八ガ岳あたりであろうと見当をつけていたのだった。
「どうやら、壱岐守も一万両が手に入るので有頂天になり、わしたちのことは忘れてしまっているとみえるな……」
「まだ油断はなりません。相手には屈強な者がそろっており、こちらは人数が少ないので、なにか方法を考えねばなりません」
「それは先方に着いてからのことだ。いくらでも方法はある。道の上から石を落としてもよいし、また、谷へ突き落とす方法もある。彼らが甲府城代の一行であったとわかっても、まさかわしたちの仕業だとは気がつくまい」
「こうなれば一人でも多いほうがよろしゅうございますな。順太郎でも連れてきていたほうがよかったかもしれません」

「あれはだめだ。このような時に役に立つ男ではない。かえって足手まとい。それに、こんどの一件については何も知らない者に、わざわざ教えるまでもあるまい」

頼母は、順太郎がもう少し役に立つ男だったらと、なんど思ったか知れなかった。

「うまく目的の場所まで行けばよいのですが……」

「大体の見当がついたら、壱岐守の始末を考えるのだ。ほっとした気のゆるみに乗じて、まず壱岐守、それから山名三十郎……」

「彼らが黄金を手にしてからでは遅いのですか……」

「遅いな……黄金を見ればあとの者たちも欲が出る。欲を出さないうちに壱岐守と三十郎の始末をすれば、みんな戻っていくに違いない」

「およその見当では……」

「ふふふ、重兵衛らしからぬことをいう。わしがそれほどの間抜けだと思っているのか。絵図面は壱岐守へ渡しておいたが、控えをとっている。場所さえわかればそれで十分。あとはこの控えで役に立つのだ。本物が壱岐守といっしょに消えても、一万両はわしのものになる」

「うまくいけばよろしゅうございますが、安心は禁物です。主馬之介たちの消息が消えているのが不気味でなりません」

「案ずることはない。今ごろはわしたちの行方を捜しまわっているだろう。一万両のほうを手に入れてから、江戸でゆっくり二人の始末を考えればよかろう。そのうち、必ず江戸へ姿を現してくる。待ち受けているのも知らずにな。はははは……」

三日目にやっと八ガ岳の麓にたどりついた。

「重兵衛、いよいよ宝の山だ……」

頼母はうれしくてたまらないといった表情だった。

その喜びは壱岐守も同じであった。

「三十郎、いよいよ宝の山に入ったのだ。頼母の悔しそうな顔が目に見えるようじゃ」

「夕刻にはたどりつくそうでございますが、今夜は野宿しなければなりません」

「野宿も結構、寝ながら仰ぐ月もまた格別であろう……」

壱岐守は野宿も気にはしていないらしい。

三十郎が身を寄せて耳もとにささやく。

「あの為朝という男、あのまま逃がしてやりますか……」

暗に斬ろうかといっているのだった。

「人里にはめったに出てくる男ではないのでべつに子細はないと思うが、念のためということもある。場所がわかったらすぐ斬ってもらおう」

「心得ました……」

三十郎はうなずいた。

為朝は、そんな会話が交わされていようとはつゆ知らず、権現岳を指さしながら、

「あの二番の山が権現岳ですよ。だんだん道が険しくなってきますから気をつけてくださいまし。昼すぎれば岩場も越えねばなりませんから……」

そこまで案内すれば謝礼をもらえるのだと、内心わくわくしていたのだ。まさか白刃の謝礼だとは思ってもみない。甲府城代がそんなことをするとは、為朝には考えられなかった。

4

山道へかかると、半刻（一時間）ばかりで早苗は疲れをおぼえた。女の身では八ガ岳のような険しい道は無理であったかもしれない。

けさ旅籠を出るとき、権作が、

「お嬢さまは残っていたほうがいいんじゃございませんか。八ガ岳という山は相当けわしゅうございますから」

と、山を知っているだけに止めようとしたのだが、早苗は、

「いいえ、参ります。倒れたときは見捨てていってもかまいません」

そういって無理についてきた手前もあるので、どうしても音をあげたくなかった。

山道を途中休むことなく登っていくので、疲労に疲労が重なっていくばかりだった。

早苗は春之介がいたわりのことばをかけてくれないのが恨めしかった。こんな場合も春之介に甘えようという気持ちが、自分でも気づかないうちに動いていたのだ。

春之介は早苗が疲れているのを気づかないのではなかった。

ことばをかけるのはやすい。が、いたわってやれば、早苗は座り込んでしまうかもしれなかった。道はしだいに険しくなるばかりであり、わざと非情を装うことによって、早苗に意地を持たせようとしていたのだった。

頼母も、老人には八ガ岳の道はこたえるとみえて、ともすれば足が止まりがちになった。

重兵衛はたいして疲労は感じなかったが、頼母は何度も休んだ。

一人遅れていた手代が戻ってきて、

「早苗たちが参ります」

と告げた。

「なにッ！　一人でか――」

切り株に腰を下ろしていた頼母は、ぎょっとして立ち上がった。

「いえ、四人です。主馬之介と権作もいっしょです」

「権作が……では、やはり助け出したのは主馬之介だったのか――」

「いま一人は見なれない浪人ですが……」

頼母はちょっと思案してから、

「もしかすれば、その浪人が横笛の主ではあるまいか」

「虚無僧がうろついていたと聞いておりますが、あれがそうだとすれば……」

重兵衛も、早苗を追った三人に、煙玉の連絡のすきも与えずに斬り捨てた手練を思い出して、眉宇に不安をにじませた。

「道を変えることはできぬか――」

頼母はいったが、

「目印をたどっていくのですから、それは難しゅうございます」

「思案がないと申すのか……」

「一つだけはございます。このまま気づかぬ振りをして後をつけさせ、崖下を通るときに上から石を落とすのです。いかに非凡の腕をもっていても、落下してくる石を防ぐことはできますまい。

それで失敗すれば手段はありません」
「ふむ……ほかになければ……」
「それとも、どこかへ隠れていてやり過ごしますか。それも一方法には違いありませんが、それだけこっちの目的も遠のいていくことになります。権作がついているのですから、先に目的地に行かれると、あとがまずうございましょう」
しかし、頼母は、
「いや、彼らを先にやろう。彼らを先にやって壱岐守と争わせるので、どっちが残ったとしても、手を下さずにいずれかを消すことができるのだ。そのあとで残ったほうの処置を考えてみても遅くはあるまい。いや、そのほうがおもしろいかもしれぬ」
「なるほど……こっちの人数が少ないのですから、なるべく大事に使っておいたほうがいいかもしれません」
重兵衛も納得して、三人は急に足を速めた。道が曲がりくねっているので隠れるには造作はない。少し遅れても、目印をたどっていくのであるからべつに差し支えることはないだろう。

5

思いつきとしてはよかったのだが、彼らは先に壱岐守の後を尾行している二人の忍者が春之介を知っているということに気づかなかった。それを知っていれば、別の方法を考えたであろう。そのため、三人はまったく予期しなかった結果を招くことになろうとは夢想もしなかったのだ。
彼らは、幾つかの道を曲がって、樹間へ飛び込んだ。

「気づいたな……」
と、春之介は、急に消えた頼母たちを捜そうともせず、山を登っていく。春之介は頼母が目印をたどっているのを気づいていたのだった。山道を登りながら、その目印をみんな消していたのである。
彼らの用いていた目印は、木枝にこよりを結んでいたのである。およそ二十間ばかりの間をとってあり、道を曲がるときは二つのこよりを並べて曲がる方向へ結んであった。
彼らはそのために戻る道がわからなくなっているのだが、追い越していった春之介の一行を見送って、
「いまにおもしろいことが始まる。これで一万両ははっきりわしのものになる」
頼母は失敗ということをすこしも考えてはいなかった。
頼母は春之介たちの姿が見えなくなってから、
「重兵衛、ぼつぼつ出かけようか……」
と笑いかけた。
「こういうことになるとは、運が向いてきたのでしょうな……」
三人は歩きだしたが、二つのこよりが結んであるのを見つけて、
「こっちへ曲がってゆくのです……」
重兵衛はそういって細い道を入っていった。
一町ほど行ってから、重兵衛はふと小首をかしげた。さっきまで二十間ごとに確実に結んであったこよりがなくなっている。

「おかしゅうございますな。こよりがございません」

「ないではすまされぬ。もうすこし行ってみよう……」

それからまた道をたどっていったが、三本道に突き当たって、はたと迷った。

「目印がございません……」

重兵衛の顔が青ざめていた。

「ないのはまっすぐということであろう……」

頼母はそう断定してまっすぐに踏み入っていった。

このあたりの道は、杣男も注意して足を踏み入れようとはしないのだ。道といっても、それらしく見えているだけのことで、人が造ったものではなかった。獣たちが通っているうちに道のごとく見えるようになったものであろう。

そのことを知らない三人は、なおも奥へ奥へと踏み込んでいく。

道らしいものはいつしかなくなっていた。

「迷い込んだらしい。戻ろうにも戻ることはできぬ。とにかく、下りることだ。下へ向かって下りていれば、麓(ふもと)に出ることができよう」

それから三人は下りはじめたのだが、歩いても歩いても同じところばかり歩いているような気がした。

木立は深く、見通しはまったくきかない。

「重兵衛、なんとしたことだ……」

「もうすこし歩いてみましょう……」

三人はまた歩いた。彼らの下りていく先が死の谷と呼ばれ、踏み込んだ者で戻ってきた者がいないのだということは三人は知らない。

一歩一歩麓に近づいているのだと思いながら、生きて出ることのできないという死の谷へ向かって、一歩一歩、歩いていくのだった。

日が落ちればもう見当はつかなくなる。野宿するよりほかにないのだが、その谷に、夜ともなれば飢えた山犬たちが群がってくるのである。

その谷へ踏み込んだ者が生きて戻ってはこないのは、出口を発見するより早く、山犬の群れに襲われるからであった。

三人が日が落ちないうちに死の谷から出ることができればともかく、地理不案内の者にはとうてい望むべくもないことであった。

枯れ枝をかき分けて歩く三人の顔には、不安と恐怖がありありとにじんでいた。

死人(しびと)沼(ぬま)

1

三人がこよりの結んであった道を曲がったのはまちがいではなかった。そこから五間ばかりのところをさらに右へ折れるのだが、そこは道ではなかったし、そこの目印は外されていたので、重兵衛たちは道を誤ってしまったのである。

「この道をまっすぐに行けば、山犬の群がっている死の谷へ迷い込んでしまいます」

権作はいったものだ。権作ならば、目印がなくとも、まちがえることはなかった。

春之介はみんなをせきたてて足を速めた。道のないところを踏み込んでいくので、もはや目印だけを頼りにしていることはできなかった。

先行している忍者たちが壱岐守に気づかれるようなことになれば、目印は消え、壱岐守も見失ってしまう。

壱岐守を見失っては、八ガ岳まで踏み込んできた意味はない。

「まもなく権現岳に入ります」

と権作がいったのは、昼もだいぶ過ぎてからであった。

「もうすこし急ごう……」

春之介はいって、早苗を振り返り、

「早苗どの、歩けないのならここにいるがよい。そんな意気地ない女を待っている場合ではない」

「歩けます……」

早苗は、青ざめた顔で、唇をかみしめながら、みんなのあとへついていく。主馬之介が見かねて声をかけようとすると、

「主馬之介どの……そなたも早苗どのといっしょに休みたければ休んでいるがよい。そなたたちのような弱い者たちといっしょに行動はできぬ。それでよく大それた望みが持てたものだ。そういわれて悔しければ、わたしに負けずに歩いてみるがよい」

言い捨てて待ってやろうとはせず、権作を追い立てるようにして登っていくのだった。

「権作、このあたりになるとだいぶ山も深くなってくる。そのほうがついているから安心はしているものの、これでは道に迷ったら二度と戻れないようになるかもしれぬな」

「へえ。八ガ岳というところは岩場が多うございますからな。とくにこっちのほうから登る者は山窩ぐらいのもので、案内人なしで行けるのは三人とはおりますまい。うっかり道に迷うものなら、それこそ山犬どもに」

「山犬は多いのか」

「この下のほうの死の谷に相当おります。なにしろ何百匹と群れをなしておりますから、襲われたら二度と生きて戻れるものではございません」

「山犬や狼には火をたいておけば近づいてくることはないと申すが」

「それはたしかに火を恐れます。火を燃やして一晩ぐらいは助かっても、道がわからないのですから、逃げることはできません。こんな山奥ではだれも助けに来てくれる人もありませんや。そのうち腹が減って動けなくなり、結局は山犬の餌になるだけのことで」

「なるほど、恐ろしいところだな……。頼母の一行はどうなるのだろう」

「あの道をまっすぐに行きますと道が分かれております。麓に出ようとすれば登り道のほうを行けば運がよければ出るかもしれませんが、下り道のほうへ行くと迷ってしまいます。あのあたりで迷った人は、不思議に死の谷のほうへ踏み込んでしまうのですよ。どっちへ行ったものやら、運が悪ければ迷い込んでしまっているでしょうよ」

「悪いことをしたような気がする」

「わざとそうしたんじゃなく、あの連中が死の谷のほうへの道を選んでいったとすれば自業自得、

今までの報いでしょう。あいつらだって、山犬よりもひどいんですからね。山犬なら迷い込んだ者を食うだけですが、あの連中ときたら、だれかれの見境なく食いついてきます。石牢へ入れられたのは忘れることはできませんや」
　権作はよほど恨んでいるらしかった。
「お嬢さま、大丈夫ですか。いまから岩が多くなってきますから、足もとに気をつけてください。やはり女の足では無理な山だったかもしれません」
「大丈夫です……」
　早苗はそう答えるのもやっとだった。恨めしそうに春之介の後ろ姿を見つめながら、歯をくいしばって歩く。
「主馬之介さま、わかりました……」
　権作が喜びの声をあげた。
「何がわかったのだ……」
「彼らの行く先ですよ。あいつらは死人沼に行くんです」
「死人沼……?」
「へえ。それにまちがいはございません。わかったらもう跡をつけていくことはありませんや。わたしが道はよく知っております」
　権作は確信をもって答えた。
「どうしてそれがわかるのだ……」
「そこの木の枝をご覧ください。なにか変わったところがあるはずです」

　そういわれて春之介が指さされた枝を見ると、何かの実らしいものが掛けてある。何の実であるか春之介にはわからなかったが、ちょっとさくらんぼを思わせるもので、黒い球状が二つ細い枝でつながっていて、それを枝にかけてあるのだった。

2

「はじめて見るものだが、これが何かの目印か」
　手に取って春之介は見つめた。
「これはご城代さまの案内をしている山窩が残したものに違いございません。道に迷わないための目印ではなく、これは彼らのまじないですよ。これは八ガ岳にも少なくなった木の実ですが、食べられるのです」
　と権作は一つ口に含んで、
「お嬢さまも一ついかがです。甘くてうまいものです。これを食べていると元気が出ますよ。わたしも山に入ったときはよく食べます。もうずっと以前ですが、この実を食べて生きつないだこともありましてな。わたしにとっては命の恩人のようなものです」
　早苗は手にとったが、気味が悪く食べる気にはならなかった。手のひらに載せて眺めていると、春之介が取って自分の口の中へ入れ、
「うむ、うまいものだ。なるほど、一つ食べただけで元気が出てきたようだ」
　その表情があまりまじめなので、早苗は思わずぷっと吹き出した。
「早苗どのがやっと笑った。山道へ入ってからはずっと怒ってばかりだったが、笑いを忘れてし

まったのではないかと心配していたのだ」
「存じません」
と、早苗は横を向いた。
「また怒る。早苗どのはよくよく怒る性分とみえるな……」
そんなことをいって春之介は笑うのだった。
「権作、しかし、この実でどうして壱岐守が行ったのが死人沼だというのがわかるのだ」
と、春之介には納得できなかった。
「さっきも申しましたように、これはまじないですが、山窩が死人沼に行くときはかならずこうやっていくのです。この実をこうやっていくと、死人沼に引きずり込まれないということを信じているのです。彼らは古い言い伝えにはけっして逆らうようなことはいたしません」
「死人沼というのはまだ遠いのか……」
「一刻（二時間）はかかりましょう。岩ばかりのところで、その岩に囲まれて沼があるのです。沼というものはたいてい浮き草があるものですが、その沼にかぎって草ひとつありません。見ただけで気味の悪いもので、岩に囲まれているせいか、いつも死んだように波ひとつ立ちません」
「それで死人沼と申すのだな……」
「そればかりではなく、その沼の付近の岩には穴が多く、自然にできたものでしょうが、そこからときどき金が出ることがございます。金の塊といっても小さなものですが、そのために山窩の者たちは、大風のあとなどはよくそこへ金を探しに参ります。ところが、かならずだれかが死人沼へ落ちるのです。底なし沼ですから、いちど落ちたら浮かび上がることもございません。岩ば

かりのところにどうしてあんな沼ができたのかわたしにもわかりませんが……」
「気味が悪い……」
と、早苗は耳をふさいだ。
「それで、その魔よけにあんなことをするようになったのですが、不思議にそれからは沼へ落ちる者はいなくなったのです。彼らはあの実のおかげだと信じています。一人に一枝ずつ掛けていくのですから、まだあと七つはあるはずです。それを掛け終えるまでは、けっして沼へ近づくことはございません。このあたりにはもうあの木は少なくなっておりますから、それを探していくので暇どることでございましょう」
「金塊が出たとなると、やはりほんとうのことであったのかもしれぬ。しかし、たびたび出たとすると、一万両がそっくり残っているかどうかはわからないことになる。早苗どの、その時はどうする?」
と、春之介は早苗を振り返った。
「わたくしは一万両を欲しいとは思ってはおりませぬ。ただ頼母の自由にさせたくなかっただけですから。頼母や壱岐守の手に渡らなければそれでいいのです」
「主馬之介どのは……? 念のために、そなたの気持ちも聞いておこう」
「わたしも姉と同じ気持ちです」
「そのつもりでわたしもいよう。権作、壱岐守が暇どるようならば追い抜きたいが、ほかに近道はないか」
と、春之介は尋ねた。ひと足先に目的地へ着いて、壱岐守の動きを見ていたかったのである。

「ございません。ほかの道を通れば遅くなるばかりです」
「ないか……」
「壱岐守の一行が実を探すために横道へそれましたら追い抜いていくことができますが、もうすこし歩いてみましょう、ひょっとすればうまくいくかもしれません」
「近づくのは避けたほうがよい」
「相手は人数が多いのですから、足跡が残ります。人が通るなどということのない道ですから、山に慣れた者ならすぐわかります」
　権作はそれから二十町ばかり歩いたとき、
「春之介さま、追い抜けますぞ……」
　と明るい声を上げ、
「ご覧なさい。ここから曲がっていっています。死人沼に行くにはこの道をまっすぐに行くのですから、おそらく黒い実を探しにいったのでしょう」
　といった。
「まだこよりの目印がついているな。ばかなやつどもだ……」
　春之介は、頼母たちが道を迷っているとも知らず、まだ目印をつけながら壱岐守の後を尾行する二人がおかしかった。
「さあ、参りましょう……お嬢さまも頑張ってください」
「大丈夫です」
　と早苗が答えると、

「あまり大丈夫でもなさそうな顔をしているが……おぶっていってやろうか」
　春之介はいたずらっぽく笑いながら背を向ける。
「大丈夫です。わたくしは疲れてはおりません」
　早苗は、春之介の横をすり抜けて、ずんずん歩きだしていく。
「早苗どの、道が違う。そっちへ行ったら山犬が出るぞ」
「えっ……」
　ぎょっとして早苗が足を止めると、
「冗談だ。山犬と聞いたときの早苗どのの顔は見ているのも気の毒なくらい真っ青だった」
(意地悪——)
　ほっとすると同時に、こんな時にも冗談のいえる春之介が頼もしく思われるのだった。

3

「おい。まだ遠いのか。日が暮れるまでには着きたいが……」
　壱岐守は、為朝だけが頼りなので、心配になってきた。為朝が裏切るようなことになると、戻り道はわからないのである。
　道というべきものはない。草むらを分けて歩いているので、為朝はほんとうに道を知っているのであろうかと疑ってみた。
　しかし、為朝は平気な顔で、
「もうすぐですよ」

という。
　為朝のもうすぐというのは何度も聞いている。山名三十郎は、為朝が黒い実をとっては木枝に掛けていくのに、さっきから気づいていたのだった。
　気づくと気になってならず、ついにたまりかねて尋ねた。
「さっきから黒い実を取って枝に掛けているようだが、なんのための目印だ」
「これですか。死人沼に引きずり込まれないまじないです。これをやらなければ、かならずだれかが死人沼に落ちて死ぬのです」
「ばかなッ！」
　三十郎は笑った。すると、為朝は真顔になって、
「笑いごとではございません。わたしも何度も見ているのです」
「沼が人を引きずり込むなどとは迷信もはなはだしい」
「信じないといわれるのですか……」
　いままで従順であった為朝が、目の色を変えて詰め寄った。
「信じろというのが無理な話だ……」
「そうですか。信じないといわれるのならしかたがございません」
　為朝はふてぶてしく苦笑して、
「わたしどもにはわたしどものしきたりがございます。山へ入ってからわたしどものしきたりを守っていただけないのでしたら、案内はごめんこうむりましょう」
「案内はやめるというのか」

「やめさせてもらいます」
「それで生きて戻れると思っているのか」
　三十郎の右手が刀の柄に伸びていった。
　為朝はぎくっとしたようにあとずさったが、
「おれを斬ろうっていいなさるのかね」
「斬るも斬らぬもきさまの意志ひとつ。案内しないというのなら命はもらう……」
　三十郎はゆっくり刀を抜いた。
　為朝はややあってから、
「どうしても斬るのなら、斬ってもらいましょう」
「…………」
「その代わり、あなたたちも二度とこの山から出られなくなるということをお忘れじゃございますまいね。ここには道というものはございません。今はまだ日が高いからおわかりにはならないが、夜になれば山犬が何百匹もほえだします。旦那方をねらって群がってきますよ。道はわからない。食べものはない。そのうち山犬の餌食になるだけさ」
「…………」
　振り下ろそうとした三十郎はためらった。
「それでもよかったら斬ってもらいましょう。八ガ岳を甘くみちゃあ、旦那方のほうこそどうなるかわかりませんぜ。それに、おれがこの笛を吹けば、仲間の者がすっ飛んできて、旦那方を生きてこの山から出すことはありませんや……どうしなさる……？」

「三十郎、そのほうが悪い。為朝の言っていることのほうが筋が通っているようだ」

この時、壱岐守が声をかけなければ、三十郎も折れる潮時を失っていたであろう。争えば自分たちに不利だということのわからぬ三十郎でもなかった。

「すまぬ。気が立っていたようだ……」

刀を納めて三十郎は頭を下げたが、内心では、目的が達せられたときには、為朝を生かしておかないつもりであった。

「為朝も機嫌を直してくれ。こんなところで仲間割れをする場合ではあるまい。黒い実がどうしても必要ならば、われらもいっしょに探そう」

壱岐守からそういわれると、為朝もしぶしぶ機嫌を直して、

「もういいんですよ。人の数だけありゃいいんですから、もう済みました。死人沼までは半刻（はんとき）ばかりで行きつきますよ」

「半刻か――」

「へえ、急ぎましょう……」

一行はそれから為朝につづいて登っていったが、三十郎がふと足跡に気づいてぎょっとしたように、

「だれかが通っているぞ……」

と叫んだ。足跡というほどのことではないが、たしかに何者かが通ったと思われる跡が残っている。

「通っていますな……」

為朝はさして気にはかけていない様子であった。

「頼母ではございませんか……」

三十郎はいったが、

「頼母なら先へ行くことはあるまい。先へ行くくらいなら、わざわざわしに絵図面を渡したりはしなかったはずだ」

「しかし、ほかには心当たりはございません」

三十郎はどうしても頼母があきらめたとは思えなかった。

「三十郎もひどく用心深くなったものだ」

壱岐守は気にもかけていない様子で、

「為朝、死人沼へ行く道は里の者は知っているのか――」

「知りますまい。おれたちの仲間以外の者では、権作というのがいました。半年ばかりおれたちといっしょに暮らしたことのあるやつで、知っているとしたらそのくらいのものでしょう。少しばかり山に詳しくても、死人沼に無事たどりつけるものじゃございません」

「権作がいったのであろうか。権作はしかしわしたちの目的を知っているはずはない」

壱岐守はしだいに不気味になってきた。

歩きながら為朝はときどきあたりを見まわしたが、

「おれたちの仲間だよ。四人らしい。黒い実でもそれがわかるんです」

「死人沼にそのほうの仲間の者が行っているのか」

「沼に行ったのではございません。嵐のあとでなければあの岩場へ行くことはございません。ただ通っていっただけです。そばを通るときでも魔よけだけはしていくのです」

為朝にいわれて、壱岐守も三十郎もほっと胸をなでおろした。

為朝の仲間がそばを通っていっただけなら、べつに気にすることもない。

その四人が春之介たちの一行であるのは、考えてもみない壱岐守であり、三十郎であった。

死人沼が近いと聞いて、一行の足は急に軽くなった。

やがて――

林が尽きて、急に眼前が明るくなった。岩が高くそそり立ち、一種の異様な雄大な景観だった。

「あそこに一段と高くとがっている岩がございましょう。あの陰が死人沼です」

為朝にいわれて、壱岐守はようやく絵図面を思い出した。目的の場所を囲んでいるのを山をあらわしたものだとばかり思っていたのだが、それは山ではなく、岩の形を示していたのだということがいまやっとわかった。

いちばん目立つ形のものを示して、この山がどこかわかるかと、人々に尋ねても、だれにもわからなかったのも当然のことであった。

壱岐守の顔には喜びの色が浮かんでいた。

（これでやっと頼母に勝つことができた）

その喜びであった。

「おめでとうございます」

三十郎がひと足先にいった。

「いや、まだ喜ぶのは早い。絵図面に示した場所が、あの死人沼のどこを示しているものであるかを探さねばならぬ。それまではまだ心を緩めてはならぬ」

喜びを抑えて壱岐守はいったが、彼自身、すでに一万両を手に入れてしまったような気持ちになっていた。

さわやかな山の空気をいっぱい吸い込んで、壱岐守は絵図面を取り出し、そそり立っている岩がその絵図面と同じものであるのを確認してから、

「もう少しだ。参ろうか――」

と、はずんだ声をかけた。

岩崩れ

1

岩の間を通って死人沼を見下ろすと、一種の不気味さがある。沼はさして広いものではなく、十間四方の水たまりといった感じのものだが、底はどのくらい深いのかわからぬという。

岩の間にどうして沼ができたのか、ただ不思議というよりほかはない。

「気味の悪い沼だな」

その静けさに、三十郎もぞっとするものがあったのだろう。

「闇夜には人魂が出るといわれ、おれたちの仲間でもここへは近寄りません。近寄ったら魂を吸

い取られると言い伝えております」

「沼には生き物はいないのか」

「すこし水がありますから魚を入れてみたことはございましたが、すぐ浮き上がって死んでしまいます。この沼は生き物の命を吸い取るのだと申し、人が死んだときにはみんなでお祈りをいたします」

そういって、

「絵図面を見せてはくださいませんか。ここまでくれば見当がつきましょう」

為朝に壱岐守は絵図面を見せた。為朝は地形と絵図面を見比べながら、

「死人沼がここで、あの岩がこれだ。すると、この矢印の場所は、このあたりだな……」

とつぶやいて、

「すこし下りていきましょう。死人沼のそばらしゅうございます。このあたりには岩穴がいくつもありましてな、雨露をしのぐこともできます……」

為朝は岩を伝って下りていった。

一行は、それについて下りはじめた。上から見たところではとうてい穴なぞありそうには見えなかったが、中ほどまで下りると、人が立って入れるほどの穴がいくらも見えた。

死人沼は近づいてみると一種の異様な色でないでいた。

暗緑色ともいうべきであろうか。黒みを帯びた濃い緑色である。波ひとつなくないでいる。

「このあたりの穴のどれかであろうな」

壱岐守は見まわして、もういちど絵図面を取り出した。

「為朝、この矢印の示すところに、三角と、長四角が二つ並んでいる。これは穴の形を示しているのではないか」

「へえ。さっきからそう思っていました。場所はこのあたりですから、ちょっと待っていてください。全部で二十三の岩穴で、そのうち沼からこっちには十一しかありません。すぐ戻ってきます」

為朝が飛び出していくと、三十郎が、

「大丈夫でしょうか。このまま逃げることはありませんか」

と、心配そうにいった。

「逃げたところで、ここまでくれば案ずることはない。穴と絵図面を照らし合わせながら行けば、そのうちわかるだろう。もうしばらく待ってみよう」

と、壱岐守は絵図面どおりの地点へ来ることができたので気にもかけていなかった。

為朝は野猿のような身軽さで飛び戻ってきた。

「ありました。ありました。ありましたッ！」

「あったか――」

壱岐守の顔がさっと緊張する。

「案内せい！」

「こっちへおいでくだされ。この岩のちょうど向こうに、絵図面どおりの岩穴が二つ並んでおります。一方の三角のほうには矢印が入り口にございます」

「うむ、それに違いあるまい。ご苦労であったな……」

そういって、壱岐守はちらっと三十郎を見て目くばせした。べつに打ち合わせはしているわけではなかったが、三十郎にはそれが何を意味しているものであるかがすぐ読み取れた。

三十郎はうなずき、なにげない様子で為朝に近づくと、岩を飛び越えようとする為朝の背にいきなりの抜き討ちだった。

「うっ。計ったなッ！……」

為朝はかっと目尻が裂けんばかりにみはり、三十郎に怨嗟の目を向けたが、支えきれず、死人沼へ落ちていった。

さざ波ひとつなくよどんでいた死人沼の水面にさっと水しぶきが上がったが、それもほんのしばらくのことで、やがてもとの静寂が訪れた。

人をのんでも死人沼は暗緑色によどんでいる。まったく死人沼の名にふさわしい不気味さだった。

春之介たちはひと足先にたどりつき、岩の間から一部始終を見ていたのだった。

「ひどいことを……」

早苗は、白刃がひらめいたせつな、目をつぶった。

「壱岐守らしいことだ。場所がわかれば白刃の礼だ……」

と、春之介も怒りを眸ににじませた。

「わたしが案内に立たされていたら、あの為朝のようになっていたのですね。ひどいことをなさるお方だ。頼母たちがさらってくれたおかげで助かったとすると、あの黒頭巾たちがわたしの命の恩人になる……よほど主馬之介さまから助けられてから甲府へ行こうと思ったが、行かなくて

よかった。ほんとうに命拾いをしましたよ」

権作の肚裏には暗然と身にしみるつぶやきがあった。

2

三十郎は血刀をぬぐって鞘に納めた。

「こうしておけば心配はございません」

と、壱岐守に微笑を送った。

「行こう……」

壱岐守は満足げに微笑して、先に立って岩を回った。

はたして、為朝がいったとおり、二つの岩穴が並んでいた。その三角のほうの入り口に矢印が岩肌に刻まれている。

「これだ。うむ、これに違いない」

壱岐守は、何度もうなずき、用意の蠟燭をともすように命じた。

岩の中は真っ暗であり、かなり深いようだが、外からは見えないので、中へ入ってみるよりほかにない。

三十郎が蠟燭を手にまず入っていった。つづいて壱岐守、そのあとに五人が続いた。

「春之介さま。あの穴の中へ入っていきましたが、あの穴はわたしも存じております。こっちの四角のほうへ抜けるのですが、中には一万両などという隠し場所らしいものはございませんでしたが……」

権作はそういって、
「ここへ入って道をまちがえば出てはこれません。入るときは縄を持って入っていくもので、戻るときはそれをたぐって戻るのです。わたしは、中へ入ったとき、運がよかったとみえて、隣の穴へ出てきました。それで、縄のとおりにもういちど入って、目印をつけてきたのですが……あの人たちは道に迷ってしまうに違いありません」
権作は、岩穴のほうを見つめながら、壱岐守らの軽率さを危ぶんだものだった。
「道に迷って死ねば自業自得だ。しばらくここで様子を見てみよう。今夜は夜を明かすことになるが、このあたりは山犬は出ないのか……」
「ここへは参りませんからそのご心配には及びません」
「夜を明かさねばならぬようになるかもしれぬが、どこか身を隠すようなところはないか」
「そこの岩穴へ入りましょう。入り口は小さいけれども中は広く、四人ならゆっくり体を横にすることはできます」
そういって権作は岩穴へ案内していったが、なるほどいわれたとおりに中は広い。しかも、そこから例の二つの岩穴を見ることができるのである。
「これは好都合だ。わたしはひと眠りするから、まず主馬之介どのが見張っていていただきたい。あとの者は横になるがよい。悪くいけば、今夜は眠れないことになるからな。日が落ちたら主馬之介どのは権作と交替するのだ」
言い捨てると、春之介はごろりと横になり、すぐに軽い寝息を立てはじめた。
「姉上も今のうちにお休みください」

主馬之介はそういったが、早苗には眠るどころではなかった。疲れがひどく眠りたいと思ったのは岩場につくまでのことで、壱岐守らが穴の中へ入っていくのを見てから、かえって目がさえてしまったのだ。
「お嬢さま、体を横になさったほうがよろしゅうございますよ」
権作はそういって自分も横になった。
外では、頼母の配下の忍者二人が、四人の姿を見て愕然(がくぜん)となっていたのだった。
「あれは早苗だ。案内しているのは権作、若い武士は主馬之介、それにあの浪人は左門の甥(おい)と名のったやつだ……」
「うむ。たしかにまちがいはない。あの四人はもともと一味だったのか……」
意外なところで意外な人物を見て、二人は唖然(あぜん)となった。一刻も早くこのことをあとについてくる三人に伝えねばならない。
「遅いなあ。頼母さまは何をしているのだ。まさか道をまちがえたのではあるまい」
「重兵衛さまがついているのだから、よもや道を誤ることはない。目印をたどっていけば、いやでも道はわかるはずだ……」
「すこし戻ってみよう。はやく知らせておいたほうがよかろう……」
二人はそれから自分たちがつけていた目印をたどりながら山を下りはじめた。
歩いても、歩いても、頼母の一行には出会わない。
「おかしい……こんなに遅れているはずはないのだが……」
いぶかりながらも、二人はなおも歩いていった。

いつしか日は西へ傾いている。そのうちに目印がなくなっているのに気づいた。

「外れているのであろう。すこし行けば次の目印があるはずだ……」

「右か左か……」

「右のほうが下へおりている。ともかく、下へおりていけばまちがいはない」

二人は二差路の下降をたどっている道を選んでいったが、その道が頼母たちが迷い込んだ死の谷へ続いていたのもくしき因縁というべきであった。

歩くほどに、二人にはもはや見当はつかなくなった。日が暮れないうちに、せめて麓にでもたどりつきたいと思った。

日はみるみる落ちていく。

どこかで山犬の遠ぼえが不気味な木霊をよんで流れていった。二人はそれを聞くやますます足を速めた。

3

「深い穴だな。なるほど、だれにも知られずに一万両を隠すにはふさわしい場所だ。由井正雪もよくもここを発見したものだな」

壱岐守はすでに発見したような華やいだ声で三十郎にいった。

絵図面どおりの場所であり、この深い穴の様子から絶対といえるほどの確信が壱岐守にはあった。

「どこまで続いているのでしょうな。もうだいぶ入っているような気がしますが」

小半刻（三十分）は歩いているだろう。歩いても歩いても穴は続いているし、人が立って歩けるほどの穴は、広くもならないし、狭くもならぬ。こういう岩穴にはよく蝙蝠が住んでいるのだが、それらしい様子もなかった。

穴は曲がりくねっていた。幾度も二つに分かれたところがあったが、右へ右へと道をとってきたので、戻るときは左へ行けばよいと思っていたのだが、それが甘かったのを知ったのはさらに小半刻ほどしてからであった。

「ご城代さま、いちど外へ出たほうがよくはないのですか。まだまだ穴は尽きるようには思えませんし、道がいくつも分かれているようですから、万一迷ってからでは」

三十郎は時間がたつにつれてしだいに不安を感じてきた。

蠟燭は二昼夜はともしても大丈夫だったが、それとても道に迷ってしまってからは頼れるものではない。

だいいち、助けに来てくれるのを望むことはできないのである。それだけに、勘だけに頼ってずんずん奥へ入っていく壱岐守が危ういものに思えてならなかった。

「もうすこし入ってみよう。道を誤ることはあるまい。右へ右へと歩いているのだから、どれだけ奥へ入っても戻れないことはない」

壱岐守は、もうすぐ一万両が手に入ると思う期待があるだけに、三十郎のことばには耳を貸そうとはしなかった。

五人の供のほうからまず反抗があらわれた。彼らは欲につられてきただけのもので、壱岐守と生死を共にする気はないのであった。

だから、壱岐守のやることが危険だと思えば手を引くのにためらうものではない。
彼らは、何度もいいだそうかと思いながら、もうすぐ埋蔵場所へたどりつけるかもしれぬという望みを捨てることができず、我慢しながらついて来たのだが、いくら深いとはいえ、もう半刻にもなるのだから、一里近くは歩いているのである。
（同じところをぐるぐる回っているのではあるまいか——）
そう思いだすと、もう黙っていることはできなくなり、
「ご城代、これ以上深入りするのは危険でしょう。一里ばかりは歩いているように思えます。道に迷っているのでなかったら幸いですが、いちど外へ出て別の方法を考えてみたらいかがですか」
といわずにはおれなかった。彼らの中から意見がましいことばが生まれたのははじめてであり、壱岐守はむっとして、
「そのほうたちの指図はうけぬ」
「なんといわれます」
一人が詰め寄ってきた。
「そのほうたちの指図は受けぬと申しておるのだ」
「おことばが過ぎましょう。ご城代、甲府にいるときはそのおことばも通りましょうが、こんどのことは、われらの役目とは関係のないものです。もし出口がわからなくなるようなことでもあればなんとなされます。すまなかったでは済みませんぞ。われらは、これで戻らせてもらいましょう。地獄までお供するのはご免こうむります」
と一人がたたきつけるようにいうと、

「われらも同じ意見だ。戻らないのならば、われらだけでも戻らせてもらいます」
と、もう一人が口を添えた。五人とも同じ気持ちであるのはその眸の色でわかる。
「逆らうのか！」
と、壱岐守はその双眸に殺気をにじませ、ちらっと三十郎を見やった。逆らう者は斬れといっているのである。
三十郎にはそれはわかったが、しかし、五人を相手にしては、たとえ勝ったとしても自分も無傷であるというわけにはいくまい。
まして、今の場合、仲間割れはしたくない。三十郎自身、これ以上深入りすることの危険を感じていたときであり、
「ご城代さま、わたしもいったん外へ出て方法を考えたほうがよいと思われますが……万一、道に迷ったときは、それこそ取り返しはつきません」
といった。
壱岐守は何かいおうとしたが、思い直したようにやめ、
「そなたまでそんなことをいうのなら致し方はない。いったん戻るとしよう」
しぶしぶ言わざるをえなかった。内心では役に立たぬ者たちだと怒っていたのだが、今の場合、さすがにそれを口に出すことはできなかった。

4

一行七人は道を戻りはじめた。

「もう日は落ちたかもしれぬな……」
と一人がいうと、三十郎が、
「もう半刻以上過ぎているから、いま落ちかかったときであろう」
「あしたいっぱいで目鼻がつかなければ、いったん戻ってからあらためて出向いてきたほうがいいかもしれませんな。このままだと食糧がなくなってしまいます」
「あしたいっぱいは心配することはあるまい。あしたいっぱいで発見できなければいったん山を下りるのもやむをえまい」
「山名さん、その時はわたしは遠慮させてもらいます」
と一人がいうと、ほかの四人も、
「わたしもそう願いたいものです。こんな思いをするくらいなら、甲府でのんびりとやっていたほうがいい」
すると、壱岐守が斬り捨てるように、
「黙っておれ！」
といった。
それでなくても闇に閉ざされた岩穴の中である。小さな話し声もこだまして不気味な反響となって戻ってくるのだ。
壱岐守も闇の圧迫に妙にいらだちはじめていたのである。
「もう少しだというのに……」
まだ未練を捨てきらないでいた。引き返していると思うと、もうすこしで行きつけたかもしれなかったように思えてならなかった。
こうやって眼前にしながら戻らなければならぬというのは連れてきた五人のせいだと思え、こんな者たちを連れてきたのは失敗だったと後悔するのであった。
壱岐守は自分の欲を満足させようとしているのだから、どんな結果になったとしてもいいかもしれない。
三十郎も分け前をもらえるのだからあきらめられよう。
だが、五人の者は、成功すればわずかの謝礼、悪くいけば元も子もなくなる。一万両の秘密を知っているだけに、口を封ずるために五人の命を奪うかもしれなかった。それだけの非情さは持っている壱岐守のことだ。
為朝の案内で八ガ岳に行くというのでついてきただけのことだ。途中で八ガ岳に黄金が隠されているということを聞き、謝礼が多分にもらえるというので欲を出したのだが、もともと壱岐守に尊敬を持っているわけではなかったから、不安を感じてまで行動を共にする意志はなかったのだ。
戻りはじめてから小半刻は過ぎている。入ってきてからの時間と比べれば、ちょうど半分を戻ったことになろう。
しかし、一里ばかりも岩穴が続いているということがありえようか。絶対にないとは言い切れまいが、その率はきわめて低い。
「山名さん、わたしたちは同じところを回っているのではありますまいか」
その一語で不安は頂点に達した。いっせいにぎくっとしたように足を止めた。

「そのようなことはあるまいが、万一ということもありうる。岩穴にしては少し深すぎるかもしれぬ」

「右へ右へといっても、道が回っていれば同じところへ出ることもあります」

「もう半分歩いてからいえばよい。出るか出ないか、もう半分歩いてみなければなんともいえることではない。そのほうたちが歩かないというのなら置いていくだけだ。三十郎、もうすこし歩いてみよう」

壱岐守は言い捨てて歩きはじめたが、彼にもその不安はぬぐいきれなかった。入ってくるときはいまにも一万両が見つかるという期待があっただけにさして不安はなかったが、戻り道は意外なほど遠かった。

「念のために目印をつけておきましょう」

三十郎は小柄を取り出して岩肌に矢印を刻んだ。十間おきばかりに同じ目印をつけていった。

それからまたしばらく歩いた。同じような岩穴が依然として続いている。

闇はどこまでも深く、七人の歩く足音が異常な反響となって闇をますます深くする。

三十郎はぎょっとして叫んだのだ。

「ご城代、同じ道を歩いておりますぞ」

「なにッ！　ば、ばかなことを申すなッ！」

壱岐守の声も震えた。

「これをご覧ください。この矢印はわたしがさっきつけたものです。わたしたちは同じ道を歩いているのですぞ」

五人の顔が闇の中でなかったら死人のように蒼白になっていたのに気づいたことであろう。五人は、不吉な予感が的中して、声も出なかった。

五人とも、腕には自信があり、刃を持っての敵ならこれほど恐怖することはなかっただろうが、自然の恐怖にはどうすることもできないのだった。

5

「ご城代、どうしてくれるのだ。だからわたしたちがいったのだ。ご城代が軽率なことをなさるからこんな結果になったのだ。すまないでは済ませぬ」

五人は血相を変えて詰め寄った。

「わしにどうしろというのだ。こうなるように願ってなったのではない。仲間割れをしている場合ではなく、なんとか力を合わせて外へ出るくふうをすべき場合だ」

「あなたはそれでよかろうが、わたしたちはこんなところで飢え死にするのはごめんだ」

「勝手にするがよい」

「なにッ！」

と刀に手をかけるのを、三十郎が中に入って、

「いま争ってみても外へ出ることができるわけではない。喧嘩は外へ出てからでもできる。外へ出てから、どうしてもご城代を斬りたいというのなら、そのとき斬ればよい。いまはみんなの力を合わせて外へ出る道を探すことだ」

三十郎のことばに、しぶしぶ刀の柄から手を離した。

三十郎は先に立って、
「矢印のない道へ入ってみましょう。左も右もない。穴をぐるぐる回ってみれば、左も右も問題にはなりませんからな……」
そういって歩きはじめた三十郎は、やがて二差路に出ると矢印を確かめて、
「こっちへ行ってみましょう」
と、足を踏み入れていった。
だが、さらに四半刻は過ぎても穴は尽きなかった。行きどまりになり、引き返し、七人は恐怖から逃れるように歩きつづけたが、外へ出るような気配はない。
数本の蠟燭が燃えつきた。いよいよ出れないとなると、蠟燭は最も貴重品になる。
「明かりは消しておこう」
壱岐守はいったが、
「こんな足場の悪いところでは、明かりがなくて歩けるものではない。もう半刻や一刻は歩いてからでも遅くはない」
五人は承知しなかった。
壱岐守は、自分の甲府城代としての威厳がまったく失われているのを怒りながら、自分も一介の人間としてしか通用しないのを知らねばならなかった。
こうなっても、壱岐守は、あのとき引き返さなければ、いまごろは一万両を発見して、無事外へ出ることができたような気がするのだった。
（この五人があせるから道をまちがってしまったのだ。この五人のせいだ……）

壱岐守は自分が軽率だったとは思ってもいないのだった。
そして、無事外へ出ることができたら、五人の処分も考えるつもりだった。
「あっ！……」
先頭を歩いていた三十郎は、はっとして飛びすさった。
「い、岩が崩れる……」
叫んだときに、岩肌が割れて、どどっと崩れだした。
「に、逃げるのだ……」
壱岐守は、五人を突きのけて、いま来た道を走りだしたが、十歩と走らないうちに、
「ぎゃあッ！」
絶叫が穴の中をはいまわった。壱岐守の頭が落石で割れ、ぴくりともしない。
岩は崩れるばかりだった。行きもできず、退きもならず、残る六人は立ち往生だった。しかし、岩はますます崩れていく。六人は自分が岩を避けるのだけで頭の中はいっぱいであった。
どどっ！　激しい音とともに岩が五人の上を襲った。五人は下敷きになった。
岩崩れはまもなくやんだ。
その場所が入り口から二十間ばかりのところであったのも皮肉なことであった。

6

「あの音は……？」
春之介はぱっとして跳ね起きた。見張りは権作である。早苗もいつの間にかうとうととなって

いたが跳ね起きた。主馬之介はもう外へ走り出していた。
「岩が崩れたようです。岩穴は、何もないときはほとんど崩れることはありませんが、人が中へ入るとそれだけで崩れることがよくあるものです。ご城代さまも岩の下敷きになったのかもしれません。静かに歩いていることもできず、岩に目印などをつけようとすると、その刺激で岩が崩れるのをよく見たことがあります」
「死んだかもしれぬな」
　春之介はぽつりとつぶやいた。
「死んだかもしれません。岩の下敷きになっては、医者もいないのですから死ぬよりほかはございません。なんの罪もない為朝を案内させておいて殺してしまわれるのですから、その報いでしょう。あの為朝という男はいい男で、山窩は里の人のいうことは信じないものですが、為朝だけは里人を信じる男でしてな。それが自分の命を縮めることになったのですが、為朝だけは生かしておきたかった」
　しみじみした口調で権作はいった。
「春之介どの、様子を見に行ってみませんか」
　主馬之介は興奮していた。
　いまやっと日が没したときで、西空にはまだ余光が残っている。
「なりませぬ。もうしばらくしてから行ってみましょう。落ち着いてからでないと、入ればまだ岩が崩れてきます」
　権作は顔色を変えて止めた。

「権作に任せよう。功をあせってわたしたちまで同じ運命をたどらされてはならぬ。どうせもう夜であり、山を下りるのは明朝だ。慌てることはない」
　春之介にいわれると、主馬之介は無理にということはできなかった。
　それから半刻ばかりしてから岩穴へ入った四人は、岩に打たれて死んでいる六人を見た。壱岐守の懐中から絵図面を取り出した。
　六人といったのは、一人だけ足を打って生きている者がいたからであった。春之介はその男を担いで外へ出た。
　権作が手当てをしたが、明朝にはどうにか歩けるだろうという。
「歩けないときはわたしがおぶっていってやろう。もともとおぬしには罪はない。壱岐守の巻き添えになっただけのことだ」
　春之介のことばに、その男は涙を流して、
「かたじけない。あなたたちが来なかったら、わたしも死んでいたのだ。甲府へ戻ったら、一日も早く江戸へ戻れるようにまじめになる。甲府にやられたのも、つまらないことなのだが、こんどでもわたしに欲がなかったとはいえぬのだ」
「ゆっくりあしたまで寝ているがよい……」
　春之介はそういって、ほっとした表情の主馬之介と早苗を見た。さっき壱岐守の懐中から取り出してきた絵図面を二人の前に置きながら、
「どうやらこの絵図面を守ることができたようだ。壱岐守は死んだし、頼母も今ごろは山犬に襲われていることだろう。万が一、生きているとしても、ふたたびこの絵図面の一万両をねらうこ

とはあるまい。頼母が生きていたとしても、江戸へ戻れば無事では済まぬはずだ。幕閣にも人なきではない」

「はい。これも春之介さまのお力添えがあったからでございます」

「そなたたち二人の力だ。ここまで来たのだ、一万両を探してみるか——」

「いいえ。その気持ちはございませぬ。その絵図面は捨ててくださいませ」

早苗はいった。主馬之介も、

「わたしも姉と同じ気持ちでございます」

といった。

「その返事を待っていたのだ。それを聞いて、わたしも肩の荷をおろしたような気がする」

と、絵図面を破り捨てて、

「水野家の再興が許されるかもしれぬぞ」

「えっ……」

「とにかく江戸へ戻ってみる」

「春之介さま、あなたさまはほんとうはどなたなのです。春之介という名前がほんとうの名ではございますまい」

早苗は一刻も早くそれが知りたかった。

春之介は笑いながら、

「そのうちわかることだ。江戸までの楽しみということにしておこう」

といった。そして、

「お家が再興になれば女は必要ではない。早苗どのはわたしに任せておいてもらいたい。主馬之介どのが妻を持てば邪魔になるのだからな……」

春之介さまと別れなければならないのだろうか——と心配しているのに……春之介は大きな声で笑いつづけるのだった。

7

翌朝、春之介は、けが人を背負って山を下りていった。歩けるからと恐縮するのだが、山道は足の不自由なものには無理だからといって、春之介はむりに背負っていった。

いわば敵方ともいうべき自分であるだけに、春之介の心がよほどうれしかったに違いない。

韮崎（にらさき）まで来たとき、

「心配しておりました……」

と出迎えた武士を見たとき、早苗ははっと顔色を変えた。頼母とともに黒平へやって来た順太郎だった。

「早苗どの、案ずることはない。わたしの父の家来で、頼母の旧悪を調べるために奉公していたのだ。さすがの頼母もこの男を役に立たぬ者と思ったらしいが、腕はわたしよりできるかもしれぬ男だ。こんどのことで、頼母の動向はみんなこの男から聞いたのだ。だから、ほんとうはこの男の手柄だったのかもしれぬ」

「早苗どの、お久しぶりだ」

順太郎はそういって笑った。

早苗は、春之介にいわれてみると、いままで頼りない人と思っていた順太郎が急に頼もしく見えるようになったから不思議なものだ。

「そうとも知らずに……」

いいかける早苗のことばをとって、

「礼には及ばぬ。わたしは自分の役目を果たしたのですから……」

順太郎はおごることもなく、

「若さま――」

と、春之介を呼んだ。

早苗はぎくっとした。

順太郎が若さまと呼んだことに対する驚愕である。

「江戸のほうはどうであった……？」

春之介は尋ねた。

「はい。水野家の再興はお許しになる望みが強いとのこと、それで主馬之介どのは、お屋敷にて当分の間いろいろのことを学ぶようにとのことでございました」

「それはよかった。主馬之介どの、再興が許される望みがあるそうだ。順太郎といっしょに江戸へ行くがよい」

といって、

「順太郎、そのほうに頼みがある……」

「なんでございますか……」

「わたしは父の無理を聞いてきた。こんどはわたしの無理を聞いてもらいたいとな……」

と、早苗の心配げな顔をちらりと見て、

「もしお許し願えなければ、わたしはこのまま早苗どのを連れて、二度と屋敷には戻らぬと伝えてくれ」

早苗ははっとして顔を上げた。

「さよう申し伝えます。で、その後、返事はいかがいたしますか」

「わたしたちはゆっくりあとから参る。府中で待っているから返事を届けてもらいたい」

「かしこまりました」

と、順太郎は答えた。

彼にはそうなるのがわかっていたような表情だった。

「春之介どの、ほんとうのお名前を聞かせてはくださいませんか」

主馬之介が尋ねてみると、

「あいかわらずせっかちだ。江戸へ行けば何もかもわかることだ。あせらずともよかろう」

と春之介は笑って、

「早苗どの、わたしだけ勝手に決めてしまったが、そなたの心はどうだ……」

と振り返った。

「…………」

早苗はうつむいていた。返事はしなかったが、心の中では、春之介の父が許してくれようと許してくれまいと、どちらでもよかった。春之介からどんなことがあっても離れまいと自分の心に

言い聞かせていた。

春之介が見上げると、幾人もの命をのんだ八ガ岳がきょうもくっきりと青空にそびえていた。

その後、頼母の姿らしいものを見かけた者はいなかったということを付記しておこう。おそらく、重兵衛たちとともに、死の谷で山犬に襲われたのでもあろうか。

0193-012550-3066

春陽文庫

変幻去来坂

昭和63年3月15日　初版印刷
昭和63年3月20日　初版発行

著者　江崎俊平
1988©

発行者　和田欣之介

印刷　城北印刷製本センター

発行所　株式会社 春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番一六号
電話（二七一）〇〇五一番
振替東京　〇一一六一七番

既刊目録（時代編）

山手樹一郎長編全集　全84巻

- 桃太郎侍　山手樹一郎
- 恋風街道　山手樹一郎
- 恋天狗　山手樹一郎
- 華山と長英　山手樹一郎
- 又四郎行状記(上)　山手樹一郎
- 又四郎行状記(下)　山手樹一郎
- 夢介千両みやげ　山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(一)　山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(二)　山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(三)　山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(四)　山手樹一郎
- 新編八犬伝　山手樹一郎
- 鳶のぼんくら松　山手樹一郎
- 遠山の金さん　山手樹一郎
- 花笠浪太郎　山手樹一郎
- はだか大名　山手樹一郎
- ぼんくら天狗　山手樹一郎
- 朝焼け富士　山手樹一郎
- 浪人横丁　山手樹一郎
- 素浪人日和　山手樹一郎
- 青空浪人　山手樹一郎
- 野ざらし姫　山手樹一郎
- 鉄火奉行　山手樹一郎
- 巷説荒木又右衛門　山手樹一郎
- 江戸の虹　山手樹一郎
- 恋染め笠　山手樹一郎
- 青空剣法　山手樹一郎
- 春秋あばれ獅子　山手樹一郎
- 青雲の鬼　山手樹一郎
- 青年安兵衛　山手樹一郎
- 江戸群盗記　山手樹一郎
- 巷説水戸黄門　山手樹一郎
- 変化大名　山手樹一郎
- 江戸ざくら金四郎　山手樹一郎
- 大名囃子　山手樹一郎
- 女人の砦　山手樹一郎
- 若殿ばんざい　山手樹一郎
- 紅顔夜叉　山手樹一郎
- 浪人八景　山手樹一郎
- 朝晴れ鷹　山手樹一郎
- わんぱく公子　山手樹一郎
- 江戸の朝風　山手樹一郎
- 江戸の暴れん坊　山手樹一郎
- 青春の風　山手樹一郎
- 浪人若殿　山手樹一郎
- 天保紅小判　山手樹一郎
- 浪人市場(一)　山手樹一郎
- 浪人市場(二)　山手樹一郎
- 浪人市場(三)　山手樹一郎
- 浪人市場(四)　山手樹一郎
- 八幡鳩九郎(上)　山手樹一郎

- 八幡鳩九郎(下)　山手樹一郎
- 鶴姫やくざ帖　山手樹一郎
- 天保うき世硯　山手樹一郎
- 天の火柱　山手樹一郎
- 隠密三国志　山手樹一郎
- 江戸へ百七十里　山手樹一郎
- 江戸の顔役　山手樹一郎
- 侍の灯(上)　山手樹一郎
- 侍の灯(下)　山手樹一郎
- お助け河岸　山手樹一郎
- たのまれ源八(一)　山手樹一郎
- たのまれ源八(二)　山手樹一郎
- 千石鶴(上)　山手樹一郎
- 千石鶴(下)　山手樹一郎
- 放れ鷹日記　山手樹一郎
- おすねと狂介　山手樹一郎
- 青雲燃える(上)　山手樹一郎
- 青雲燃える(下)　山手樹一郎
- さむらい読本　山手樹一郎
- 三百六十五日　山手樹一郎
- 素浪人案内(上)　山手樹一郎
- 素浪人案内(下)　山手樹一郎
- 江戸に夢あり　山手樹一郎
- さむらい根性(上)　山手樹一郎
- さむらい根性(下)　山手樹一郎
- さむらい山脈　山手樹一郎
- 殿さま浪人　山手樹一郎
- 虹に立つ侍(上)　山手樹一郎
- 虹に立つ侍(下)　山手樹一郎
- 男の星座　山手樹一郎
- 江戸隠密帖　山手樹一郎
- 錦の旗風　山手樹一郎
- 少年の虹　山手樹一郎

山手樹一郎短編全集　全12巻

- 矢一筋　山手樹一郎
- 将棋主従　山手樹一郎
- 春風街道　山手樹一郎
- 暴れ姫君　山手樹一郎
- 天の火　山手樹一郎
- 恋の酒　山手樹一郎
- 夕立の女　山手樹一郎
- 夜の花道　山手樹一郎
- 浪人まつり　山手樹一郎
- 槍一筋　山手樹一郎
- 秋しぐれ　山手樹一郎
- 下郎の夢　山手樹一郎
- 鍔鳴浪人　角田喜久雄
- どくろ銭　角田喜久雄
- 風雲将棋谷　角田喜久雄
- 妖棋伝　角田喜久雄
- 将棋大名　角田喜久雄
- 恋慕奉行(上)　角田喜久雄
- 恋慕奉行(下)　角田喜久雄
- 半九郎闇日記(上)　角田喜久雄

春陽文庫

黄門廻国記　直木三十五
若さま侍捕物手帖　全5冊
双色渦巻城　昌幸
五月雨ごろし城　昌幸
人化け狸城　昌幸
天を行く女城　昌幸
虚無僧変化城　昌幸
ゆっくり雨太郎捕物控　多岐川恭
続・ゆっくり雨太郎捕物控　多岐川恭
水戸黄門　山岡荘八
上方武士道　司馬遼太郎
梟の城　司馬遼太郎
風神の門　司馬遼太郎
真田幸村　尾崎士郎
魔風剣風　秋永芳郎
仇討ち物語　池波正太郎
錯乱　池波正太郎
うつせみ忍法帳　早乙女貢

まぼろし若殿　早乙女貢
江戸まだら蛇　早乙女貢
斬らずの若殿　早乙女貢
さむらい鴉　早乙女貢
きまぐれ剣士　早乙女貢
大江戸花暦　早乙女貢
青春の剣　早乙女貢
黒潮姫　早乙女貢
江戸浪人街　早乙女貢
剣鬼秘伝　早乙女貢
剣客往来　早乙女貢
江戸の小鼠　早乙女貢
戦国恋編笠　早乙女貢
慶長水滸伝　早乙女貢
八幡船伝奇　早乙女貢
鶴千代血笑　早乙女貢
風流剣士　早乙女貢
江戸の恋とんび　早乙女貢

東海道をつっ走れ　早乙女貢
志士の女たち　早乙女貢
幕末の剣客　早乙女貢
竜馬を斬った男　早乙女貢
さむらいの詩　早乙女貢
御家人無頼　早乙女貢
魔笛大名　早乙女貢
此村大吉無頼帖　早乙女貢
濡れ髪剣士　佐竹申伍
まぼろし忍法帳　佐竹申伍
花の無法剣　佐竹申伍
若殿まかり通る　佐竹申伍
変化若君　佐竹申伍
真田軍団はゆく　佐竹申伍
むらさき若殿　颯手達治
やまざる大名　颯手達治
若さま地獄旅　颯手達治
ひょうたん侍　颯手達治

春陽文庫

若さま隠密帳　颯手達治
若さま恋頭巾　颯手達治
若さま影法師　颯手達治
若さま風来坊　颯手達治
悪たれ若殿　颯手達治
若さま変化　颯手達治
若さま伝法　颯手達治
若さま小天狗　颯手達治
若さま旅日記　颯手達治
若さま青春記　颯手達治
若さま犯科帳　颯手達治
若さま居候　颯手達治
若さま鬼面帳　颯手達治
若さま刺客帳　颯手達治
若さま絵図帳　颯手達治
若さま獄門帳　颯手達治
若さま包丁控　颯手達治
若さま東海道　颯手達治

若さま人別帳　颯手達治
若さま御朱印帳　颯手達治
若さま秘殺帳　颯手達治
若さま中山道　颯手達治
若さま退屈帳　颯手達治
若さま幽霊帳　颯手達治
若さま箱根八里　颯手達治
若さま死神帳　颯手達治
若さま独歩行　颯手達治
若さま幻魔帳　颯手達治
女たちの忠臣蔵　颯手達治
若さま人生峠　颯手達治
若さま大福帳　颯手達治
おれは小次郎だ　颯手達治
若さま白昼堂々　颯手達治
若さま隠れん坊　颯手達治
若さま拳骨伝　颯手達治
若さま名奉行　颯手達治

若さま奥州街道　颯手達治
若さま殺人事件帳　颯手達治
若さま妖怪退治　颯手達治
若さま凱風快晴　颯手達治
若さま陣太鼓　颯手達治
若さま黄金大名　颯手達治
若さま紋十郎伝奇　颯手達治
若さま隠密三代目　颯手達治
赤穂浪士　江崎俊平
素浪人大名　江崎俊平
消えた若殿　江崎俊平
江戸っ子大名　江崎俊平
気まぐれ大名　江崎俊平
闇法師変化　江崎俊平
黒百合秘帖　江崎俊平
おもかげ大名　江崎俊平
夕雲峠　江崎俊平
朝姫夕姫　江崎俊平

江戸の野獣たち　江崎俊平
まぼろし絵図　江崎俊平
影法師推参　江崎俊平
江戸の風来坊　江崎俊平
白面剣士　江崎俊平
孤剣街道　江崎俊平
江戸の小天狗　江崎俊平
恋残月　江崎俊平
月夜に来た男　江崎俊平
ひとり鷹　江崎俊平
振袖伝奇　江崎俊平
孤剣士峠　江崎俊平
三日月悲帖　江崎俊平
闇姫伝奇　江崎俊平
花の素浪人　江崎俊平
千両鷹　江崎俊平
剣は流れる　江崎俊平
黒十字秘文　江崎俊平

姫人形絵図　江崎俊平
捨扶持一万石　江崎俊平
黒風組秘文　江崎俊平
黒雲嶽秘帖　江崎俊平
若殿恋しぐれ　江崎俊平
むらさき剣士　江崎俊平
神変天狗剣　江崎俊平
恋月江戸暦　江崎俊平
振袖おんな大名　江崎俊平
恋風無明剣　江崎俊平
三匹の鼠　江崎俊平
かげろう使者　江崎俊平
若さま紅変化　江崎俊平
鬼姫剣法　井口朝生
人情おぼろ風　井口朝生
すみだ川余情　井口朝生
岡場所の女　井口朝生
綺羅の女　井口朝生

戦国はぐれ獅子　井口朝生
忍者は斬れ　木屋進
浪人恋変化　木屋進
忍法おぼろ陣　木屋進
仇夢ごよみ　木屋進
赤獅子秘文　木屋進
神変きらら頭巾　木屋進
おまん千両肌　木屋進
風盗伝奇　木屋進
猿飛佐助漫遊記　木屋進
血汐笛　柴田錬三郎
源氏九郎颯爽記　柴田錬三郎
主水血笑録　柴田錬三郎
遊太郎巷談　柴田錬三郎
おれは侍だ　柴田錬三郎
南国群狼伝　柴田錬三郎
異常の門　柴田錬三郎
忍者からす　柴田錬三郎

同心部屋御用帳(一)　島田一男
同心部屋御用帳(二)　島田一男
同心部屋御用帳(三)　島田一男
同心部屋御用帳(四)　島田一男
菊太郎事件控(一)　島田一男
菊太郎事件控(二)　島田一男
菊太郎事件控(三)　島田一男
菊太郎事件控(四)　島田一男
開化探偵帳　島田一男
東国竜虎伝　島田一男
竜巻街道　島田一男
黒雲街道　島田一男
刃影青葉城　島田一男
江戸巌窟王　島田一男
お耳役秘帳　島田一男
素浪人無惨帖　島田一男
浮世の風　竹村篤
妖説地獄谷(上)　高木彬光

妖説地獄谷(下)　高木彬光
素浪人奉行　高木彬光
素浪人屋敷　高木彬光
あばれ振袖　高木彬光
続・あばれ振袖　高木彬光
どくろ観音　高木彬光
刺青の女　高木彬光
血どくろ組　高木彬光
振袖剣光録　高木彬光
折鶴秘帖　高木彬光
振袖夜叉　高木彬光
なりひら盗賊　高木彬光
御用盗変化　高木彬光
長脇差大名　高木彬光
鬼来也(上)　高木彬光
鬼来也(下)　高木彬光
白鬼屋敷　高木彬光
人肌変化　高木彬光

隠密独眼竜　高木彬光
隠密飛竜剣　高木彬光
振袖変化(上)　高木彬光
振袖変化(下)　高木彬光
人斬り魔剣　高木彬光
魔剣青貝流　高木彬光
怪傑修羅王　高木彬光
隠密月影帖 月の巻(上)　高木彬光
隠密月影帖 月の巻(下)　高木彬光
隠密月影帖 影の巻(上)　高木彬光
隠密月影帖 影の巻(下)　高木彬光
たつまき街道(上)　高木彬光
たつまき街道(下)　高木彬光
続・たつまき街道(上)　高木彬光
続・たつまき街道(下)　高木彬光
まぼろし姫　高木彬光
隠密愛染帖　高木彬光
江戸の夜叉王　高木彬光